つて有名な棄捐令を發してゐるのである。決して五人組の自由な議決を許してゐたのではない。もし勝手なことをすれば、却つて百姓徒黨を作るといつて處罰されるだけである。

徳川時代の五人組制度は決して一部の人のいふやうに理想的なものではない。その規定にうたはれた相互扶助の精神は何時如何なる場合でも歡迎さるべきものである。唯その美名が他の目的のために利用されてゐるか否かが問題である。

徳川時代の五人組制度にあつては、それが幕府的統治のために利用されてゐたといはざるを得ない。今日地方にあつては部落常會、又都市にあつては隣組と呼ばれるものが新しく登場して來た。そしてそれはやがて新體制の細胞となるといふ。

この場合それらは徳川時代の五人組と同じものであつてはならない。中央政府たる幕府の警察的統治のための連帶責任を負ひ、中央の命令の傳達機關に過ぎなかつた五人組制度は放棄されなければならない。徳川時代とは人間も時代も違ふ筈である。新體制下における隣保組織は新しく違つた精神の下に結成さるべき筈である。

（昭和十五年九月）

儉約論今昔觀

徳川時代を通じての道徳に儉約、節儉といふことがある。否明治以後においても勸儉貯蓄が奬勵されてゐる。ところが、この儉約の意味は徳川の初期と後期とでは大分違つて來たやうである。さらに明治以後になるとさらに變化してゐる。私は今ここにその變化の過程を一一批判しようといふのではない。唯その儉約論の變化が、自然經濟から貨幣經濟への變遷を反映するものとして頗る興味があると思ふから、かつて拔き書して置いたものの中から若干の例を拾つて、讀者の一興に供しようといふのである。

宮崎安貞の「農業全書」は誰も知つてゐるやうに徳川初期の有名なる農書である。その卷一總論の第九に、蓄積、付儉約といふ題で、次ぎのやうに論じてゐる。

「夫農家にかぎりて。富る者はまれにして。貧しきものはおほし。かねてより。財穀を蓄へざれば、凶年にあひて。飢をまぬかれ難し。つねに身持を謙り。儉約を守りて。此計を專とすべし。」

この儉約は金銀ではなくして、五穀その他である。それに續いて三四行後に、

「明君は五穀をたつとんで金玉をいやしむとして。五穀にまさる寶はなしとせり。いかんとなれば。金銀珠玉は。飢て食すべからず。寒くして。是を著るべからず。此ゆへに。五穀を蓄へ積計をつとむ。もし此計おろそかなれば。凶年其外不意の災難にあへる時。飢寒の苦しみ遁れがたし。」

即ち蓄積すべきものは實際に利用し得る財貨であつて、金銀ではない。飢饉の際に金錢を多額に蓄へなが餓死した話は徳川時代の書物に多くの實例が擧げられてゐる。今日のやうに穀物はあるが金錢がないために餓死するのとは大分訣が違ふ。

この意味の儉約論の例は非常に澤山ある。要するに金銀は實際の衣食住に役立たぬが故に、蓄積しても致方がないといふことになる。又儉約の目的はそれを以つて自ら天災を免れると共

に隣人の苦患を救濟することにある。故にその目的に適ふならば、金銀の蓄積も又許される。

同じ書に、

「又ここに一種の人あり。吝嗇の心其痼疾となり。唯金銀米錢を。妄りに貪り納ることをのみ好み。是を積貯へて。更に用る事なく。君親の難儀といへども。見つぎ助ることもなし。まして親類朋友の困窮を勞りめぐむ心もなく。仁愛慈悲の心絶はて。一向慾心つよくして。義理の心なき類あり。かかる人は凡下はいふまでもなく。たとひ高位大祿の富貴を極めたる人といふも。唯是金銀を守る畜類のごとし。人とはいひがたし。古人是を錢を守るやつことといへり。」

この議論も儉約と吝嗇の差別論で徳川時代には極めて多く見る議論である。相互扶助を道徳の基本とする時、當然の議論である。さらに金銀の蓄積を道徳的に否定せんとする理由が存する。それは流通の用具としての金銀の役目から論ずるものである。金銀は流通してこそ寶である。蓄藏してゐては何の役にも立たぬ。天下の金銀を死藏するのは罪惡であるといふのである。今その種の議論の一例を徳川初期の教訓書の中に求めよう。

近世教訓小説の先驅をなしたといはれる「可笑記」の卷の三に、次ぎのやうな興味ある一節がある。

「むかしさる人の云るは、貴賤、老若、男女ともに、金銀たくさんにもちながら、一さいもたぬふりをして、人めをかくししのび申され候、たとひいかほどもちたりといふとも、誰人ありてむりひがごとをくわだて、かりとる事もあるまじきに、いかなるいはれにて、ふかくつつむぞと云に、かねをたくさんもちながら、つかふべき事にもつかはぬは、我身ながらも悪き事と、心にわきまへしるゆへなり、まことに本心は善ばかりにて。一點もあしきはなき物と云事思ひしれり。」

金銀は使用流通してこそ役に立つ、「金銀をはこの底、くらのすみにつみかさねてたくはへをく事は、糞土しやせきにも猶おとれり」とする。このことは今でも眞理である。然るにその後次第に金銀の蓄積を尊重する議論が強くなつて來る。あまり長々と例を引用することは止める。兎に角千兩箱を積み重ねた前に頭布を被つた老人の座してゐる繪が教訓書の卷頭を飾るやうになる。「可笑記」の出板されたのは寛永十九年であるが、すでにそれから間もなく著しい

經濟的變化が起り、それにつれて儉約の意味にも變化が生じて來たやうである。さらに明治になれば、一層勤儉貯蓄が道德として奬勵され出したことは誰も知ることである。今日でも、銀行の預金勸誘の宣傳には、旺んに勤儉道德が鼓吹されてゐる。しかし、もし金銀を各人が箱の底、藏の隅に死藏してゐたら、この節約道德はそれほど力説されないだらう。明治になつても節儉が道德とされ、殊に貨幣を貯蓄することを奬勵したのは、それが資本化され得るやうになつたからであらう。もし德川時代の儉約論に從つて、今時個人が收穫の四分の一を現物のまま藏や納屋に貯藏する者があつたならば、世人は人でないとはいはないだらうが、大馬鹿者だとぐらゐはいふかも知れない。そこに同じ儉約といふ言葉でもその內容には時の變遷につれて著しい變化が起つてゐるのである。

私が今ここにこんなことに特に注意するのは、この頃の歷史論の中には、言語の時代性を全然無視したものがかなりあるやうに思ふからである。

（昭和十一年六月）

節儉と奢侈

——むかし物語

一

人間といふものは淺はかなものである。物が澤山にある時は無考へにどんどん使つてゐるが、物が足りなくなると急に慌てて儉約の重要性を今さらのやうに主張する。與謝野鐵幹であつたか、晶子であつたか忘れたが、大正の末、昭和の初め、頃北海道の王子製紙の工場を見學して、無闇にパルプを消費するのを見て、伐採される自然林を惜しみ、やがて缺乏する恐れのあることを「明星」紙上で警告してゐたことがあつたが、世の中の事情が變つたからであるとはいへ、先見の明のあつたことは確かである。樹木の成長に要する年月と切倒していく數量とを比較す

れば、これくらゐの豫測は誰にでも出來る筈であるが、目前にありあまるほど物があると、つい遠い將來のことを考へないのが世の常である。いくら物資が澤山にあつても、これを無益に浪費してはならないことは明かなことであるにも拘らず、なくならなければ、それが如何に大切なものであるかに氣がつかないのである。その意味で經濟學のいふやうに、稀少性があつて始めて價値を生ずる。

徳川時代は物不足の時代である、——といふよりも中世を通じて少數者以外はすべて滿ち足りたことはなかつたらう。だから中世は何處でも物尊重である。徳川時代も「かね」よりも、「もの」の方が重要であつた。少なくともある一部を除いては、「もの」が尊かつた。金銀はいくらあつても、寒いからとて著られもせず、餓えたからとて食はれもせず、米穀ほど尊いものはなしといふのが一般に考へてゐたところであり、又澤山の金銀をもちながら、空しく餓死した話は、饑饉時にはざらに傳へられてゐる話である。一片の布、一粒の米も無駄にすることは大變な罪惡と考へられ、子供の時から敎へこまれてゐたのである。

よく人は徳川時代の儉約の話といふと、徳川時代には三回儉約を奬勵したことがある、享保・

寛政・天保がそれであるなどといふが、徳川時代を通じて如何なる時でも儉約を奬勵しなかつたことはなかつたのである。例へば賄賂で有名な田沼意次の時代でさへも極端な儉約實行を求めてゐる。意次が老中格になつてから二年後の明和八年四月にも五ケ年節約の命令を出し、政治上の諸經費の儉約を令し、

「右諸向御定金高にて、一ケ年の御入用相濟み候樣勘辨致し、取計ひ申すべく候、差支候儀も有之候はば、翌年の金高繰越し御入用に相立て、其分は翌年御定め内を相減じ候樣取計ふべく候、委細之儀は、御勘定奉行相談せらるべく候」

と令し、下賜さるる料理の如きまでも規定して微細な點まで節約を命じてゐる。田沼時代だからといつて儉約を止めたわけではない。要するに物が不足がちであり、物價が高くなつていつた徳川時代には、何時も消費節約が必要であつたのである。

物不足の場合には、誰でも考へつくやうに生産增加を計ればよいわけで、今日でもしきりに生産擴充といふことがいはれるやうに、徳川時代でも生産增大が考へられたのである。財政困窮の各藩が家中の武士に内職を奬勵したのも、その一つであるが、田沼が龍腦、明礬、石灰、

燈油の專賣を企てたり、本草學の大家田村元雄に上野、下野、奥州等に野生の人參を探らせたり、さらに進んで印旛沼、手賀沼の埋立を試み、蝦夷地、即ち北海道拓殖を起さんとしたのも、その生産力の增大を計らんとしたに外ならない。

しかし、かうした場合大抵勞働力が十分にあるわけではないから、何でも生産してよいといふことにはならない。その時代に最も必要なものに生産力を集中させなければならないことは、今日軍事工業や生活必需品の製造に勞働力を向けなければならないのと同じことである。徳川時代は武士が米に依つて收入を得てゐた。武士の生活難は米に依る收入が容易に增大し得ないことと、他の物價が高くなるのに米價がそれに比して安いことから生ずる。このことは頗る厄介な問題であつた。といふのは米の增産を計れば安い米價は一層安くなる恐れがある。現に八代吉宗の時、新田を開發し大いに增産を奬勵し、米の産額は增加したが米價は下落した。米公方などと世間からいはれた。しかし商業的課税は物價を高くする恐れありとして、あまり採用することを好まなかつた幕府としては、土地を開發して增收を計るより外ないのである。結局米價の下落は町人共が仲間組合を作つて不正なことをするからであるとする當時の學者の意見

に從ひ、町人を抑壓し、出來るだけ節約を奬勵し、新田開發その他に依つて增產を企てたのであつて、その點においても消極的政策の吉宗でも、積極的政策の意次でも同じことであつた。

生活必要品、殊に米穀等の生產を增加させようとすれば、それに從事する農民等がその農業から離れることは大變に困る。ともすれば、利益の多い商人に轉換しようとする農民を土地に定著させて置く必要がある。それら農民の生活難を緩和すると共に、不必要な生產、殊に奢侈品生產に抑壓を加へることになる。節約と奢侈禁止とは物の裏表(うらおもて)である。奢侈を禁止せずしては、節約を徹底し得ないことはむかしも今も同じである。

二

奢侈品の製造販賣禁止令が最近發せられて、一部の社會批評家から大變歡迎さるると共に、その不徹底さが攻擊された。かういふ批評ほどたやすいものはない。かつて自由主義全盛の時代に、政府が少しく民主主義的施設を實施すると、これに贊意を表しながらもその生ぬるさを

批難した。又社會政策的施設の實行についても、その徹底せざることを攻擊しつつ、時代の思想的傾向に迎合する論者があつた。しかし實際問題としての奢侈禁止はそんなに簡單なものではない。

德川時代の奢侈禁止令は頗る徹底せるものである。今一例として天保十四年六月に農村に發した禁令を擧げよう。

「在方の儀、近年湯屋・髮結床・酒舍・小間物商・刀研等の類、次第に相殖え、百姓共辨利の筋より自然質素の風儀を取失ひ、追と奢侈超過いたし、風俗に拘り候間、在中村村におゐて右躰の渡世致し候儀一切相ならず、是迄致し來り候分は、此節より六十日を限り、殘らず取拂ひ申すべく、若し其儘に差置候はば、嚴重の御取計ひなさるべき旨、御奉行所御沙汰の趣を以つて仰せ渡され候」

今日如何に徹底せる奢侈禁止論者でも、これほどまで一切の享樂的部分をその生活から撤廢させようとは考へないであらう。德川時代の農民の生活水準が極めて低かつたから、錢湯に行つたり、人に髮を結つてもらつたりすることすら贅澤と考へられたのである。今日の農民にこ

れを強いることは出來ない。徳川時代でも都市の人間に對してはかかる極端な奢侈禁止は命じてゐない。この禁令の出た一年前、天保十三年に出した有名な石燈籠其他瀬戸物鉢植物高直の品賣出す間敷き旨を命じた觸書を見ても解るやうに、江戸の市民に對しては相當の享樂は許してゐたのである。

何を標準としてあるものを奢侈とし、他のものを奢侈ならずと判斷するのか。徳川時代には身分相應といふ言葉があつた。諸侯の奥方が著てよい品物でも町人の妻女では奢りとなる。町人男女の衣服は絹紬木綿麻布などは許されてゐるが、羽二重龍門に粉はしい品や浮織綾織等に似たものや、すべて手數のかかつたものは禁ぜられてゐる。唯將軍の御目通りに罷出る際は羽二重、龍門の衣服が許される。百姓の衣類は庄屋及びその妻子を除き、布木綿の外に著用することは禁ぜられ、ゑりや帶も絹紬を用ひてはいけない。庄屋も百姓も男女共に紫紅に染めた衣類、形つきの染物は一切禁ぜられてゐる。

荻生徂徠がかういふ議論をしてゐる。世の中には身分のよい者は少なく、身分の卑しい者が多い。又よい品物は少なく、わるい品物は多い。身分のよい者がよい品物を使用し、卑しい者

がわるい品物を用ひれば、人口と貨物とがつり合ひが取れるが、もし金があれば誰でもよい品物を使用し得るとなれば、少ないよい品物を大勢の者が使用することになるから、世の中に品物が不足し、値段が高くなる。故に制度を明確に立てて、それぞれ身分相應のものを使用させなければいけないといふのである。

かく徳川時代には身分の如何に依つて奢侈の標準をつけることが出來た。都市と村落とに違つた法制を布くことも出來た。だから奢侈を禁止する際には先づ第一に身分相應といふことを以つてした。しかしこれだけでは實際問題としては不十分である。今日でもさうであるが、ある贅澤品を禁止すれば、他の新しい禁令にないものを作る。丁度公定物價品目中にない新製品を高價に賣出すやうなものである。そこで一切の新規なもの、珍しいものの製造販賣を禁止することになる。そこで「呉服道具書物類は申すに及ばず、諸商賣菓子類にても新規に巧み出し」たもの、又「近年色品を替へ、物ずきにて仕出し」たもの、何れも停止しなければならないことになる。

元來政府が奢侈を禁じたのは如何なる必要からであつたかを知れば、自からかかる法令を出

した所以を理解させる。政府が奢侈禁止令を出す効果を考へて見ると、(一)生活必需品を生産する方に勞働餘力を向けるため、(二)物價の昂騰を防止するため、(三)質實な風俗を維持するための三つが考へられる。當時武士の生活は固定的であつた。土地から出來る一定收入で生活し、しかもその收入は大體において親代代同じものと見なければならない。將來への增收發展はあまり望みがない。從つて世の中も殖えず減らず、一定のものにきまつてゐるのが好都合なものであつた。そこに德川時代の奢侈禁止の本質があつたとすれば、上述の諸法令は頗る妥當なものであつたといはなければならない。だから學者の議論でも、又法令でも、常に古來の質素の風を賞美して、現在の奢りや華美を戒め、そこに奢侈の標準を求めてゐるのである。「百姓の儀は麁服を著し髮も粧を以つてつかね候事古來の風儀に候。」そこに標準を置くから、風呂屋も髮結も奢侈となるのである。そして物價の高騰も、又武士の出來ぬやうな贅澤な生活も、さらに農村の衰微も一切が町人や百姓のさうした生活の變化にありと見たから、德川時代は終始かうした奢侈禁止令を連發したのであつた。

三

もしこの種の生活固定化が實際に行なはれたならば、何らの發展も起らなくなつたらう。しかし兎に角德川時代の奢侈禁止の標準は頗る明確である。身分さへ明瞭ならば問題にはならない筈である。その點は今日の奢侈禁止よりも問題は簡單である。だがかうした法令を人間の社會に嚴格に實施するといふことは、假令德川時代のやうに大將は代代大將、兵卒は代代兵卒と運命づけられてゐると觀念してゐた社會でも困難であつた。幸か不幸か德川時代の法令は殆どすべて三日法度である。仰せ出された時だけ畏り奉ればよいのであつた。さらにこれらの法令を實施する役人にも運用の表裏があつた。表向きに法令にそむかれては甚だ困るが、裏みちはいくらでも大目に見る。だからどんな苛酷と思はれる法令が出ても、人民は畏つて請印を出してゐる。印形まで捺してゐるのだから確かに實行したらうが出ても、人民は畏つて請印を出してゐる。印形まで捺してゐるのだから確かに實行したらうと思ふと大きな間違ひである。だから享保の時に新奇なものを禁止しても、いくらでも新奇なものが出來、社會生活はどんどん變化してゐる。

殊に段々貨幣經濟が發達して來ると、人人の考へ方も自ら違つて來る。「もの」よりも「かね」が貴重になる。本居宣長なども町人が金をもつてゐるのは武士からもらつたのでもなく、盜んだものでもない。親代代稼いで貯めたものだ。これを取上げたりするのはよくないなどといつてゐる。宣長は町人出身だからさういふ考へ方が出たといふかも知れないが、一般にかうした考へ方は幕末に近づくにつれて強くなつてゐる。それはやがて自分の金をどう遣はうと勝手だといふことになり、この考へ方が強くなると、唯お上の命令で壓迫しても、實際にはどうにもならないことになる。

江戸末期に華美な服裝は奢侈だといふので、法令に觸れる恐れがある。そこで表は頗る質素な風に見せかけ、人の目にあまり觸れぬところに金をかけ、あつといはせるのをよしとした。江戸趣味の澁い好尚がそこから生まれて來たのである。いまだにけばけばしたなりをするのを田舍者としてさげすむ風は幾分かあるだらう。この好尚は元祿時代にはあまりない。當時は派手好みであつた。西洋にも少ない。西洋人は派手である。澁い好尚は奢侈禁止のおかげであるともいへる。それにつけて最近婦人團體で華美な服裝は奢侈であり、時節柄相應しからずといふので、さういふ服裝をした婦人に紙片をつきつけて反省を促がしたところ、ある婦人がこれは染め直しで、今は染料の關係から派手になるといはれて閉口したといふ話が新聞紙に現はれてゐたのを思ひ出す。奢侈か奢侈でないか何を標準にして濫りに反省を求めるのだらう。末梢的なことにのみ無駄な勞力を遣ひ過ぎはしないか。序でに今一つ同じく新聞紙に出てゐた話だが、矢張りある有名な婦人社會運動家が價格で奢侈か奢侈でないかをきめるのは不當だらう。價が高くても丈夫で長くもつものならば却つて經濟ではないかとお役人に詰問したら、お役人は金銀のやうな長くもつものでも禁止するのですからと答へて某女史をへこましたといふことだ。議會か何かの政治家的答辯ならいざ知らず、かかる問答をやりとりして、會議ばかりやつてゐる人人に反省を促がしたい。要するにそれらは末梢的なことの表面だけを見て議論するから起ることで、その點においては德川時代の役人の遣口と少しも變りがない。

德川時代にあつては町人の活動を禁じ、國内に封じこんで置いて、奢侈を禁止したのである。町人はもつてゐる金をどうするか。勿論秘かに貯藏することを樂しみにした者もあらうが、先づ大部分が浪費する。いくら奢侈を禁止しても裏口はいくらもある。町人は能舞臺を作ること

は禁止されてゐたが、能役者の稽古場の名義で作つた。こんな例はいくらもある。正當な勞働に對する刺戟や、將來に對する希望を閉鎖して、現はれた表面的現象だけ取締らうとしても、それは勞して效なきことは歴史のすでに敎へるところである。さうした奢侈といふやうな現象が何故現はれるか。その根本を尋ねずに、末梢的現象のみを追ひかけてゐることは、これほど大きな無駄はないであらう。

（昭和十五年九月）

むかしと今

——徳川時代の賃銀物價値下げ令

一

歴史は繰り返すといふ。同じやうなことが違つた時代に恰も新しいことのやうに行なはれてゐる。殊にこの頃世の中で統制經濟の名の下に實行されてゐる諸政策が殆ど全部徳川時代、殊に寛政以後の幕末期に行なはれたものと大差ないことを思ふと、つくづく人間の知識の限界が極めて狹いことを感ずる。よく老人がむかし自慢に、今のやり方のなつてゐないことをいふが、それも一理あることである。だがむかしも失敗したことである。それを又繰り返してゐるのであるから、今の愚はいふまでもないが、むかしも決して自慢にならない。

同じやうなことが繰り返され失敗した例を擧げれば、寛政の頃豆腐の値段を公定した。値段は政府のいふ通りになつた。だが豆腐は忽ち小さくなつてしまつた。この頃の煎餅でも、菓子でも、壽司でも、如何に小さくなつたかは人人のよく知るところである。又むかし酒の値段を引下げるやうに命じた。酒屋はお上の命令だから、承知するより外にない。が酒は市場から跡を絶つてしまつた。何處へ行つても水酒ばかり賣つてゐる。酒飲みがむかしのやうな酒が欲しいと思つて、酒屋に命じても、この水のやうな酒よりないといふ。致方なく自身出かけて酒屋に頼み込んで、やつとむかしのやうな酒を賣つてもらつた。しかし値段は法外に高い。これは今の話ではない。百數十年もむかしにわれわれの祖先が經驗して、大いに憤慨したところである。

五人組が變じて隣組になり、村寄合が部落常會となつた。奢侈品製造使用の禁止はすでにむかしに經驗ずみであるが、もし今日のこれらの組織が、そのむかしに行なはれたものと大差なく、少しも進歩してゐないとするならば、隨分と心細いことである。私は今ここにそれらのすべてについてむかしと今とを比較して見ようとは思はない。唯何か賃銀停止令に關する面白い例はないかと思つて、座右の古反故のうちから手當り次第に引拔いたら文政二年のものを得た

から、それについて少しばかり書いて見ようと思ふばかりである。

二

文政二卯年十月といふと、丁度今から百二十年あまり前のことである。米の値段が下つたのに物價が下らない。米の値段は前年から見ると一割以上も下つてゐる。前年十月に新米で肥後米が六十一匁五分のものが、その年の十月の相場は五十二匁五分、筑前米六十四匁五分が五十一匁八分、中國米四十七匁が四十二匁、その外何れも下落してゐる。

米が下つて、物が下らなくては、百姓が困る。百姓よりももつと困る者は武士である。武士は米を賣つて、金に替へ、物を買ふのだから、物が下らなくては困る。世は武士の天下である。忽ち「近年米値段下直に候處、諸色値段は高直に付き、此以後米値段に准じ、諸色値段引下げ申すべき旨」仰せ出された。

そこで、この命令を受けた天領の村村（ここにある文書は武州足立郡組合村）では寄合つて相談した。その結果次ぎのやうに値下げをすることに議決した。諸色賣買物は一率に一割引下

げ、大工、左官、家根葺、木挽、桶屋、疊屋は何れも金壹分につき、八人半の割合、杣と綿打とはその仕事の相違に依つて手間賃が違ふ。詳細は面倒だから略する。農業日雇は季節に依つて差違をつけた。四月から六月までの夏の日の永い時が高い。男一日百拾六文、女百文、この三ケ月の外は、男百文、女八拾文である。駄賃馬は壹里につき八拾文。男女作奉公人、即ち耕作に從事せる奉公人の給料は最高、男年四兩、女貳兩三分に定めた。その外手間職人は今までより壹人下げ、即ち金壹分につき今までより壹人分多く働くといふのである。

三

以上の物價並びに賃銀の引下げを實行するとなると、今日でも起つてゐるが、實際問題としていろいろ故障が起つて來る。それらの問題に對してむかしの人はどうしたか。

先づ公定賃銀より實際の賃銀の安いところがあり得る。「是迄村定にて取極め有之候より、若此節の取極高賃に相成候場所も有之べく歟」その際には從來の賃銀より、日數で定めたものならば、大工は半人下げ、その外の者は何職に依らず壹人下げ、又賃錢ならば壹歩五厘引き下

げる。

第二の問題は作男や作女のやうに最高給金を決定すると、最高の者にすべて引上げられる恐れがある。技術の劣等な者の賃銀値上げとなる。これに對しては單に「劣り候男女、右に准じ右定の外餘分の給金出だすべからず候事」と但書をつけてゐるだけである。

第三にかく賃銀を公定すると、他領の賃銀の高い方へ出てゆく恐れがある。そこで、これを禁じ「諸職人日雇駄賃等、外領え出稼候方、縱令勝手に相成候共、村方用向を闕き他出稼、決て致間致候」と規定してゐる。「勝手に相成」といふのは、その方が利益だとしてもの意味である。

その外手間が下つたからといつて怠けたり、商品の品物を劣等にしたりすることを禁じてゐるが、最後に「右の通りにては引合ざる筋にて商職相止候義勝手たるべし」などといふ者は曲事であるといつてゐる。今日兎もするとこれと同じ不平を聞くが、むかしも今も變りがない。

四

さてこの規定に背いた者をどうするか、つまり經濟警察である。むかしの人は罰金刑を規定

してゐる。「前書議定の趣き、若し相背く者有之候はば其ものより過怠錢貳貫文差出し、見逃し置き候はば、隣家組合銘〻是又過料錢壹貫文差出筈に相極め申候。」これらはなかなか手厳しい。しかもこれらの規定が單に上からの命令だけでなく、村民達の自發的決議であつたことは注意すべきである。だがこれらが實行されたのかどうか。規定や規約や決議はいくらでも出來る。要はこれを實行したかどうかにある。これだけの決議であるからいくら德川時代でも、三日や四日は實行したらう。半年や一年は續いたかも知れない。少なくとも米の値段の下つてゐる間は續かなければならない筈だ。

元來米の値段に基準を求めたのは前述のやうに武士が米を收入としてゐるからだ。しかし武士の困窮は慢性になつてゐるから、米の値段が少しばかり上つても何にもならぬ。しかし米の値段が下れば、物價や賃銀は下る筈だといふのが當時の常識になつてゐた。つまり米は日本人の常食の筈なのだから、米が下れば生活費が下り、賃銀も安くなり、物價も生產費が安いのだから下る筈だと考へたのである。つまり、理論としては武士の困ると困らぬとは問題ではないのである。ところが米は文政三年から又少しづつ上つてゐる。一一例證するのは面倒だから、

止め、肥後米だけをとると、文政二年に五十二匁五分に下つたのが、三年には五十六匁五分、四年には六十八匁五分と飛び上つてゐる。だからこの賃銀、物價引下げ令も自ら解消しても不思議はない筈である。

しかしこれは理窟である。幕府が命令を下したのは武士が困つてゐるからである。武士の困窮は解消するどころか增大する一方だつた。だから又間もなく物價賃銀引下げを、今度は上から命ずることになる。民衆はなかなかお上の都合のよいやうに、自發的には動かない。止むを得ず禁令を發したが、その禁令は効果がなかつた。これらのむかしの人のやつた跡を見てゐると粗密の差はあるだらうが、あまりにも今人の行動に似てゐる。革新運動が單に今をむかしにかへすのであつては何らの意義もない。何らか新しきものの創造に向はなければいけない。

（昭和十五年九月）

「民可使由之、不可使知之」

一

封建治下の統治が民を愚なりとし、上からの命令に從つて、絶對に服從することを以つてその特徴とする。わが德川時代の政治形態も大體これに近いものである。そして德川時代の政治思想が支那思想、殊に儒教思想の援助を受けてゐることは、誰も知るが如くである。この民を愚昧視する封建的統治論の典據として、屢ゝ論語泰伯篇の、子曰、民可使由之、不可使知之、の一節が引用される。

頃日、私は幸田露伴氏の新しい隨筆集「竹頭」を讀んだ。私はかなり昔から露伴氏の隨筆を

愛好する者の一人であつた。「讕言」「長語」「蝸牛庵夜譚」以來、近頃の諸作に至るまで、大方閲讀し、その博識と文辭の豊富とに少なからず感嘆し「天才露伴」の言の誣ひざることを思つた。特にその考證ものの如きを最も好んだ。今度の「竹頭」の如きも、その收むるところのもの、何れも豊な趣味と細かい考證とを織り交ぜた、圓熟せる好文字である。唯私は最後の「一貫章義」の一節を讀むに至つて、それについて一言したい衝動に驅られた。

それは露伴氏が「今の人の氣習として、英雄豪傑の敵陣に臨みて叱咤突破するが如く、勇猛果敢に如何樣の書でも讀過し了することを爲し、句讀訓話などといふことは、大丈夫の事とすべきものではないと云ふやうな料簡方で、一味の粗笨鹵莽みづから省ることを知らず、自己の意のまゝに解したり、評したり論難したりして、大錯誤に墜ち、大狂妄を敢てする如きは、何とも以て悲むべきことである」といはれ、「例を以て喩を取らうならば」前掲の「民可使由之」云ゝの解釋の如きがそれであるとされる。

實際今日の如く濫りに讀み、濫りに、書き、濫りに論ずるの時代は過去にはあまりなかつたであらう。私の如き者ですら、月に一文を草さぬことはない。讀みたいと思ふもの、熟讀した

いと思ふ古典も、新書も、徒らに座右に堆く積まれてあるばかりで、熟讀玩味はさて置き、一讀する時間さへ容易に得られない。粗笨鹵莽みづから省ることの必要は十分に知りながら、大錯誤、大狂妄を敢てすることが多い。露伴氏の言は誠に頂門の金椎ともいふべきであらう。

露伴氏はいふ。「今の人の言を聞くに、或は此章の意をば、政治は民をしてたゞ爲政者を信賴させるので宜しい、知らせるには及ばない、といふやうに解してゐるのが多いやうである。そして此言の含むところの意味を非なりとして難じてゐる者さへ有るのを聞及ぶ。嗚呼何といふことであらう。これ皆妄解狂論、取るにも足らぬことであるが、其初は小學に通ぜずして、由の一字を誤解してゐるところから生じた、過失である。由も邦語の『よる』であり、賴も邦語は『よる』であり、據も邦語は『よる』であるが、由は賴でも據でも無い。」

由が賴でも據でもないことは、中學で漢文の一頁をも習つたほどの者は誰も知つてゐるところである。由は由來の由である。露伴氏が朱子並びに古註を擧げて說明するが如く、民之をして是理の當然に由らしむべしであり、又不可使知之の一句は、之をして其の然る所以を知らしむる能はざる也、の意である。故にこの句の正解は、「聖人の禮樂政敎を以て民を導いて化を

成す所以が、恰も平易坦廣の道路を設けて人をして自から其道路を步むに至らしむる如くである」といふにある。

そこでこの正解が、政治は民をしてただ爲政者を信賴させるので宜しい、知らせるには及ばない、といふ意味に解されるやうになつたか、問題はむしろそこにある。それが單に句讀訓話の「小學を足蹴にしたりするが如き麤心大膽、一味鹵莽の人は、由字を解して賴字と爲し、可からずを解して、宜しからずと爲し」たためのみであらうか。「今の人の漫りに高ぶつて、字義にも文法にも熟通せずに、漫讀漫解漫評」したがためのみであらうか。露伴氏の今人を訶詰すること至れりといふべきである。私は今人の一人として少しく今人のために辯ぜんと欲する者である。

二

この句を誤つて今日通用するが如く解釋するに至つたのは必ずしも今の日本人ばかりではないらしい。その證據は露伴氏自身が提供してゐて下さる。即ち程子の言を引用され、「聖人の

教を設くるや、人の家ごとに喩して戸ごとに曉らしめんことを欲せざるにあらざるなり、然れども之をして知らしむる能はず、但能く之をして之に由らしむるのみ。若し聖人は民をして知らしめずと曰はゞ、則ち是れ後世の朝四暮三の術なり、豈聖人の心ならん乎」と叮嚀心切に說いたといふ。して見ると程子の時代にすでに民をして知らしめずと解する者があつたと見える。なければかく懇々と說示する必要がない。要するに正解から誤解への途が紙一重の差に過ぎないからであらう。しかし支那のことはどうでもよい。日本で德川時代の儒者がどんな時に、この文章を援用してゐるか一つ二つ例を採つて見よう。

山鹿素行はその「語類」卷十一、君道の十一治談篇で漢の賈誼が文帝に奏した辭、「使二民日遷レ善遠レ罪不二自知一」の言を說明し、次ぎの如くいふ。

「禮をそむき制をはなれたるは、一事一物なりともいとなませざらんには、人人嗜欲の情自然にやみ、不レ知して自ら道に可レ入也、是不レ得レ已天理の準則也、天地の萬物にをける皆是なり、春の鶯夏のせみ、何事とはなけれど、不レ覺して己がさまざまの音を出し羽をつかい、草木のめぐみ葉落も、その事となく自然に感ずる處にして、力を設けて成るの處にあらざるな

り、孔子觀二上世之化一、喟然而歎曰、甚哉知之難也、雖二堯舜之民一、比屋可レ封、能使二之由一而已亦不レ能レ使二之知一也と、由しむると云は、禮を制し法を立て民を惡に陷らしめざること也」

これは勿論正解である。禮法を立て、それを民に守らしめ、民の惡に陷ることを防止すべきである。しかし民はその禮法の如何なるものかを知らない。恰も天地の萬物がその自然の法則の如何なるかを知らずして、しかもその天理の準則に從ふが如きである。その天理の準則を敎ゆる勿れとはいはない。唯敎ゆることの至難なることをいふのみである。出來れば禮法を民にも明かにすべきであり、又明かにするやうに努力すべきである。しかし堯舜の民と雖も知らすることが出來ないのである。況んや當代の民をや。

ここに支配的地位に立つ士と、支配さるる民との間に嚴然たる差別を設ける。民は無知なる者、導かるべき者とする。かの有名な孟子の「無二恒產一而有二恒心一者惟士爲レ能、若レ民則無二恒產一因無二恒心一、苟無二恒心一、放僻邪侈無レ不レ爲已」といふ言葉が全面的に肯定され、民は常に敎導することの頗る困難なものと考へられた。從つて民には「爲政者を信賴させるので宜しい、知らせるに及ばない」といふ俗解が生じ、又民の方からは、政治の善惡は一一知るに及ばない、唯

命令に柔順に服從すればよいといふことになる。從つてその典據として前述の「民可使由之」の句が、すでに德川時代から援用されてゐる。「文會雜記」卷六に太宰春臺の言として次ぎのやうなことが記してある。

「律ヲ今ノ世ニ行フ事ハ害アリ、日本ノ風俗ニテヤハリ無骨ナル事ノヤウナレドモ、切テ拾ルト云ニテスム事也、イラザル笞刑墨刑ナドノキハメアルユヱ、法ヲ下下ヨリ察知テ、此次ニカヤウカヤウノ刑、此次ハカヤウノ刑、何度マデハ赦ト云事アリト、高ヲククリテ一ツモ懲ル事ナシ、是法家ノ恥ナリ、語曰民可レ使レ由レ之云々」

果たして太宰春臺がこの言をなしたかどうか、今一寸明かにすることは出來ないが、少なくとも「文會雜記」の記者湯淺元禎はこの句をかく使用して、さして怪まなかつたものと見える。もし彼が今の人であつたなら、露伴氏から小學を足蹴りにする靈心大膽、一味鹵莽の徒として訶斥さるる一人であつたらう。

三

民可使由之、不可使知之、を俗解する者は德川時代にあつても必ずしも皆無ではなかつた。上述せるもの以外にも、なほ幾つかを擧ぐることに、さして困難を感じない。博搜すれば、相當の數に上るだらう。それらがすべて「字義にも文法にも熟通せずに」漫讀漫解したものとは思はれない。彼等の今人と違ふところは民をして禮法を知らしめず、唯これに從はしむるをよしとした點にある。封建的統治の理想と解した點が、却つて今人の非とするところとなつたのである。今人必ずしも漫評せるものともいへない。

しかし露伴氏のいふが如く、由は賴でもなく據でもない。唯民には知らしめ得ずとすることが、民は愚なりとする封建的民衆觀に一致し、民に知らせても致方がない、知らせずに從はせる、依賴せしむるに如かずとするに至つたのである。それが、本來の意義と異なり、特殊の色彩が附加されたとしても、それは大錯誤、大狂妄を敢てしたものとは思はれない。ある一つの言葉や文句の意味が時代に依つて異なつて來るところに、その時代時代の思想として、特別の意義があるのである。「笑止千萬」を昔の通りの意味を正しいとして、弔問の場合に用ひたなら、今日では多分攻擊を受けることであらう。否攻擊された實例もある。

民可使由之云云の句が德川時代以降、小學的誤りを冒して、俗解され始めたこと自體が思想史的に意味があるのである。私は今の人の句讀訓話などを輕視する弊風は、これを十分に認むる者である。唯露伴氏がその一例としてこの一句を採られ、今人を痛罵されたことにやや平かならざるものを感ずるのである。又他方この「一貫章義」はかつて文部省教學局版の「教學叢書」中に存したものであるとのことであるが、もしそこにこの民可使由之云云の句に、古い正し意義を復活させることに依つて、新しい意義を附加せんとする意圖が、多少なりとも含まれてゐたとしたならば、思想史的には甚だ興味の多いことになる。

（昭和十四年十一月）

「經濟隨筆」

『經濟隨筆』と題する著作が、德川時代に二つある。一つは著者不詳のもので、文化頃の作といはれる。瀧本博士の『日本經濟大典』第二十六卷に收められてある。他の一つは橋本敬簡の著作、序に文政八乙酉年仲春とある。小野博士の『近世地方經濟史料』第一卷に印行されてゐるから、何人も容易にこれを檢することが出來る。

この二つの『經濟隨筆』は題名は同じだが、內容はかなり隔りがある。前者は言葉の當時の意味で正しく經濟隨筆である。治國平天下の心得である。經國濟民に關して心づくままに書いたものである。「事に觸て感發することあるに任せて書つく、他日就二有道之人一而正レ之ば其

言の是非をも知て、進修の一助とせんと欲するのみ」と斷つてある。事に觸れて感ずることを筆に任せて書いたものだから隨筆である。

橋本氏の『經濟隨筆』は少し違ふ。書出しには「抑經濟の要は入を量り出をなす、是をなすは疾、是を用るもの舒なる時は財恒に足とは大學の教にして人の知る所なれども」といつてはゐるが、經國濟民を論ずるのではない。その序文に「夫經濟の道は其主人の心一つにて貧富自在なるべし」といつてゐるやうに、武士の分度生活を自分の實驗から說明したものである。一個の私經濟に過ぎない。隨筆と題してはゐるが、思出づるままに書きとめたものではない。上卷には武士の家計に關する一切、交際、祭祀から非常の備について心得べきことを記し、下卷には家家分限に應ずる金錢出納法を實例を以つて示し、日常經費について注意を與へてゐる。體系ある記述といふべきである。

かう見て來ると、この二つの書物は全く異なつたものである。もし前者が正しい經濟隨筆なら、後者は經濟隨筆ではない。しかし書物の題名は勝手につけるものではない。かく名づくべき理由があつてつける。橋本氏がその著書を經濟隨筆と名づけたのには、それだけの理由があ

る筈である。

經國濟民といふやうな天下國家を論ずることを經濟といつた書物は太宰春臺の『經濟錄』を始めとしてかなり澤山ある。幕末になつても正司考祺の『經濟問答秘錄』や佐藤信淵の『經濟要錄』古賀精里の『經濟文錄』などもこれに屬する。廣い經濟の中で狹い食貨——今日の經濟の部分が重要になつて來ると共に、經濟の意味は段々と變つて來る。經濟は一國一藩の財政を意味する。一國一藩の經濟をうまくやりくるためには儉約しなければいけない。それが入るを計つて出づるをなす財政の原則である。大にしては德川氏の大臺所か小にしては旗本御家人の懷勘定に至るまで、この經濟の範疇にはいる筈である。殊に經濟といふ言葉が儉約と同意語に使用さるるに至れば、橋本氏の著書に經濟といふ言葉を冠することは毫も差支ない。二百俵取であらうと六兩五人扶持であらうと、百姓町人に對しては支配者たる武士に相違ないのだから。しかし六兩五人扶持ぐらゐで經國濟民は少し大き過ぎる。政治的意義が全く形を消してしもう。唯武士の家計だといふだけである。

明治維新になつてから西洋の經濟書が飜譯されるやうになり、題名に經濟を冠する書物が澤

山出版された。多くは『ポリチカル・エコノミイ』のことだから適譯である。だが內容は治國平天下の經濟とは大分に違ふ。ペリィの著書の飜譯を『理財原論一名經濟學』としたのもこんなことからではないのか。慶應義塾では大正年代になつても、經濟學部といはずに理財科といつてゐた。明治初期の人達が經濟の譯字を使用した時の「經濟」の概念と今の人達のそれとには大分隔りがあるのではなからうか。しかし段々今のやうな意味に近づきつつあつたことは、この『經濟隨筆』の書名からも窺ひ知ることが出來よう。

次ぎに隨筆だが、どんなものを隨筆といつたかといふと、大部分は思ひ出るままに書き記したもの、讀書の傍ら氣のついたことを備忘旁々記して置いたもの、人から聞いたことを何くれとなく書きとめたもの、從つて一貫した筋もなく、斷片的なものを指す。ある江戸末期の文人の隨筆に、こんな意味のことが書いてあつたことを思ひ出す。この頃人に見せる目的で無責任に隨筆やうのものを書き記して板行する者があるが、それはいけない。隨筆といふのは人に讀ませんがために書くのではない。唯自分の心覺えに何とはなく書きたいと思ふことを書いて置くのが隨筆だといふのである。この定義からいくと、この頃書かれる隨筆はすべて隨筆でないことになる。

兎に角隨筆は人に見せんとして書くものではない。內々のものである。著者の死後知人が惜んで刊行するのは勝手だが、印行することを目的とするものではない。橋本氏の『經濟隨筆』は體系づけられてゐるといふ點では隨筆的ではないが、その書いた目的は序文に依れば兎に角隨筆的である。「此道に害ある者と益ある者と編出て、子孫に此道を得さしめ永く貧窮の爲めに忠孝のかけざるを要とするのみ」とあるから、全く私的のものである。又著者が刊行しなかつたことも事實である。私藏のものも嘉永六年の寫本である。從つてその著を經濟隨筆と呼んでもよいことになる。だが近頃の隨筆の意味は大分違つて來た。矢張り外國のエッセイやコントなどの影響からでもあらうか。

（昭和十三年八月）

書籍漫筆

一

この世の中から書物がなくなつてしまつたら、どんなに淋しいことだらう。一日も讀書せずにはゐられない人間もこの頃では少なくないだらう。二三日も讀書しないと頭が空虛になつたやうな氣がする者も多いだらう。そのくらゐ讀書が一般の人にもその生活から離し得ぬものとなつて來たのである。毎月毎月夥しい書物が作られ出版されてゐるが、それが多少なりとも誰かに讀まれてゐるのである。所謂「つん讀」も澤山あるだらうが、何千、何萬と市場に出る書物の幾分かは多くの人人の心の糧となつてゐるのであらう。

市場に出る書物の數から見ても、現代人は昔の人よりも、讀書といふ點については惠まれてゐる。しかし澤山あるために、現代人は昔の人のやうに書物の尊さを知らない。書物を大切に扱ふことをしない。偶〻カバーなどをかけて丁寧に取扱つてゐる者も見受けるが、その大部分が內容を人に知らせたくないためとか、不要になつた時に古本屋に高く賣れるためとか、あまり面白くない動機のものが多いやうである。却つて書物を亂暴に扱ふ人の方に眞面目な讀者がある。書物が汚くならぬと頭にはいつたやうな氣がしないといふ者さへある。だが何れにしても、書物の豐富なために、本當にしみじみと書物を有難いと思ふやうな氣持は現代人の味ひ得ぬものである。だがいくら書物があつても、これを買ふ資力がなければ書物がないと同じだ。ないよりも一層惡い。子供の頃、買ひたい本が買へなくつて、いくらでも本が買へるやうになればいいなと思つたことがある。兼〻買ひたいと思つてゐた本を買つてもらつて、一晩中抱いて寢た頃のことも憶ひ出す。だから個人個人について見れば、昔ほどでないにしても、書物に對するあこがれはあるわけである。

青年時代にある先輩を訪ねた。その机上に自分がかねて讀みたいと思つてゐながら、あまり

に高價なので買へなかつた書物が置いてあつた。私は何心なく、その本が實に讀みたいのだがといひかけると、その先輩は「買へばいいぢやないか」といつた。買へるくらゐなら買ふのだがと、少しくその先輩を經蔑するやうな氣持になつたことがある。書物を自由に買へるやうになると、買ふことが出來ずに、書物にあこがれてゐる心持を容易に察し得ないものである。自由に書物が買へるといふことは決してよいものではない。書物に對する愛惜の情がうすらぐやうに思はれる。

何かの必要から金にかへた自分の藏書が古本屋の棚に並んでゐるのを見つけた時には、わんぱく小僧の間に挾まつて、おづおづとして並んでゐる愛兒を見つけたやうな氣持がして、とてもたまらない。この頃のやうに古本が拂底になると、われわれのところまでも、不用の品を賣拂へと迫つて來る古本屋がかなりある。それが何か國策に適ふやうな口ぶりで勸誘して來る。確かに隨分つまらぬ本を、讀みもせず見もせず死藏してゐることは事實だし、狹い書齋や書庫が滿員になり、隨分に困ることもある。そんなことから賣り拂つたこともあつたのではあるが、永い間座右にあり、日頃目に觸れてゐた書物を人手に渡すことは決してよいことではない。

本屋にとつて書物は確かに商品に違ひないが、讀書人にとつては商品以上のあるものがある。書物に對して愛著の念のない人は、假令萬卷の書を藏してゐても、又それを讀破してゐても、彼は眞の讀書人ではない。

二

海保青陵は德川時代の學者のうちでは、頗る近世的合理觀念の發達してゐた人であるが、その著書のなかで屢〻書籍の多くなつたことを批難してゐる。昔は智賢才德通達藝能の士が澤山ゐたのに、今は甚だ少ないのはどういふわけかといふ疑問を出し、士が智を厭ふやうになつたからである。

「後の士は何とて智を厭ふぞと推て見るに、其病根は書籍あまり多きゆへなり、」

たとへば山が高くなつたやうなものであるといふ。昔の人は低い山へ早くのぼつて、嶺から四方を見て、それぞれ智惠を働かして地勢を判斷する。今の人は山は高くなり、路が幾筋も出來、その上途中で道草をくふ。

「先づ字の音韵・反切・句讀・發聲、山の裾野も淸人の隨筆ものより、明人の叢書もの、宋人・唐人の疏註、晉・魏・漢の文集史類、これは裾野の途草なり、」

だから書籍が殖えるにつれて、頂上に達しないうちに一生が終つてしもう。

「中古の人は九合め八合めまでに命數つきて死せり、近古の人は五六合めにて死す、今の人は山へかからぬうちにもはやはくはつおやぢになりて、老耄してたわいもなき一生を送る、故についぞ嶺へのぼりて、四方をながめ、利害を見たる人なし、」

青陵をして今日にあらしめたならば何といふことだらう。

「書籍多くなるほど儒者のすることふへたる故、一生かかりても手がまはらぬ故に、とふとふ眞の處へ手が屆かぬ也、」

この弊害は確かに今日でもないことではない。

「これを研究するにはあの書物を讀まなければならない。しかしあの書物を讀む前に、先づこのことを知らなければならない」といふ風に、それからそれへと讀書研究の豫定を作るが、結局何ものをも得ず、況んや眞の處は何が何やら解らぬといふ結果に墮する者がないではない。

實際今日出版さるる夥しい印刷物の山を見ると、假令自分の專門とするところに限定しても なほ讀了し切れるものではない。かつて私は寄贈された書籍は何によらず必ず讀む、味讀しないまでも目を通すだけは必ずしたい、寄贈して呉れるのは、何らかの意味で自分に關心をもち自分に讀ませたい心持から與へられたものであらう。出來れば讀後の感想でも書いて、お禮の心持を通じたいと思つてゐた。だから「つまらぬ本です、讀んでもらつちや困る」などといはれる方があるが、謙遜の辭であるとは思ひながらも、妙な氣がする。とにかく好意を以つて書物を贈られるのは、私にとつては大變有難いことである。さう澤山あるわけでもないが、讀書の時間が段々少なくなつたことも世の中のつきあいが多くなるにつれて致し方もないが、頂戴した書物に目を通すことも出來ぬことが多くなつて來た。況んや讀後の感想など書くことなどは殆ど出來ない。誠に申訣ないが、どうにも致方がない。

三

書物が多くなつたために、一つの本を精讀し、味讀することの出來ないのは最も悲しむべき

ことである。これは青陵のいふ弊害とは反對であるが、動もすれば一目散に小さな山へかけ上つて、何も見えずに、又何も見ずに終るの類である。讀んだといふ名だけで、血にも肉にもなつてゐないことに氣がつくと、誠にいやな氣がする。

どんな本でもよく讀むと、何か拾ひものがあるものだ。どんな名著でもいやいや義務的に讀んだのでは少しも身にならぬ。試驗勉强に嫌ひな學科を無理に詰めこんでも、跡に殆ど何ものこらず、身にもつかない。

ある人は「聖書だけ殘れば、世界中の書物を全部燒き棄てられて差支ない」といつたさうだが、私はさうは思はないが、讀まなければならない本といふものも、あまりないものと思つてゐる。唯どんな本でも讀み方の如何に依つて、その人の心の糧となる。讀む人に目がなければ、大抵の本がつまらぬ本で、役に立たぬものである。

（昭和十五年三月）

I

アジア文化の再檢討

一

一國にとつて大きな事件があれば、その國民に及ぼす影響は決して小なるものではない。その影響が如何なるものであるかを當時においては國民が自覺しないこともある。しかしその事件の意義を明確に把握して、これに處すると處せざるとでは、その國民的發展に大なる相違を來たす。われわれ日本人が過去に遭遇した幾つかの國家的事變について考へて見ても、それらが日本の歴史に與へた影響の少なくなかつたことを知る。例へば古くは大化改新にしても、近くは明治維新、又は日清、日露の兩役にしても、それらがわが國の運命に如何に多大なる影響

を與へたかは敢てここに縷說する必要はあるまい。

今回の日支事變の如きは、名は事變であるが、その實は戰爭であるばかりではなく、わが國の將來の運命と動向とを決定する一つの轉換期ともいふべき事件である。われわれ日本人たる者は十分の覺悟を以つてこの事實に對處すべきである。唯徒らに興奮してゐてはならない。不安と動搖とを以つて、その日その日を空費してはならない。一方事件の據つて起れる眞相を明かにすると共に、他方何萬といふ生靈を犧牲にしつつあるこの事件をして徒爾ならしめないだけの覺悟が必要である。

二

かつて世界大戰の終つた頃から一時盛んに西洋文明の沒落が唱へられたことがある。しかしわれわれが現在享有してゐる文化は西洋文化である。われわれの日常生活を形成する多くのものが西洋から舶來したものである。殊に日本においてはその日常の生活樣式までも西洋化されてゐる。われわれの學ぶ學問も西洋の學問である。西洋學でなければ學問でないやうに思はれ

てゐる。歐米で一つの學問としての體系が與へられれば、日本では容易に學問として承認される。もしそれが西洋にない學問であつたなら、日本では嘲笑される。否、學問としても認められない。一つの制度を改革するに當つても、先づ問題とされるのは歐米ではどうであるかといふことである。西洋人曰くといへば信じ、日本人曰くといへば嘲笑する。その點において誠に不思議な民族である。このことは德川時代にも見られる。當時の學者の著書には支那の書物に書いてさへあれば、それが如何に奇怪なことでも事實だと斷定してゐる。不思議なくらゐ自己の批判力を失つてゐる。

しかし私は獨斷的な固陋な日本主義がよいといふのではない。今後の學問的發展にはさうした獨りよがりな議論を以つてしては何らの貢獻をもなさるものではない。爆擊機や機關銃を排斥して、鎧や刀で身を堅め弓矢を以つて敵に向ふと主張する者があつたならば、誰もその愚を哀れまぬ者はないであらう。淺薄な西洋排斥は無批判的な西洋崇拜と同樣に有害無益である。今後の日本文化は人類文化發展の一段階を形成するものとして建設されなければならない。それは過去の文化を包攝し、それに基礎を置くと共に、さらにそれより一歩進んだものとならな

ければならない。西洋文化を排斥するものではなく、西洋文化を包攝するものである。

三

今日の世界を支配するものが西洋文化であることはすでに述べた通りである。しかし歐洲の文化が支配的な優秀さを示すやうになつたのは僅ゝ數百年來のことに過ぎない。中世以前の歐洲が如何なる狀態にあつたかを思へば、さらに人類文化の發祥が如何なる民族の手になつたかを思へば、われわれアジア民族はさう卑下する必要はないのである。かつて「アジア的」といふ言葉は西歐人の憧憬するところであつた。又時には畏怖の念を以つていはれたこともある。然るに今日では動もすれば輕蔑の意味を以つて使用される。時にはアジア民族である日本人の間にさへも輕侮の意味に使用されてゐることがある。驚くべきことではあるが實實である。

一體われわれはアジア文化についてどれだけのことを知つてゐるだらうか。果たしてアジア文化はそれほど輕蔑さるべきものであらうか。われわれはイギリスの學問、ドイツの學問、フランスの學問、イタリイのこと、アメリカのことにつき、かなり教へられもし、研究もしてゐ

る。しかし印度のこと、暹羅のこと、支那のこと、朝鮮のことについて、どれだけの知識をもつてゐるだらうか。否、日本の國、――自分の國についてさへ、どの程度の理解を有してゐるかさへ疑はれる。西洋の煩瑣哲學は知つてゐても、印度の因明哲學は知らぬ者が多いだらう。イギリスの發達に通じてゐる者と支那の變遷を知る者と何れが多いだらうか。

勿論現代青年にとつて德川時代の小說よりも、又時には現代の日本の小說よりも、西歐文學の方が訴へらるるところ多いに違ひない。それと同じやうに西洋に關する知識の方が、それが現代文化の直接の源泉であるだけ、より一層興味を牽きつけることであらう。又實際にも役に立つことが多い。しかしわれわれが日本人である限り、全然西洋化するといふことは困難である。若い時には西洋式の生活を喜んでゐた者が、年をとると日本式の生活に歸るといふことをよく聞くが、さうした古い慣習の取り去り難いといふやうなことだけではない。若い時に日本式に生活して、老年に及んで洋風生活をなしてゐる例もいくらもある。問題はさうした形態の上だけのことではない。今日の西洋文化の基潮とするところのものと相合はぬあるものが存する。西洋人はこれを時に東洋的神秘と呼ぶこともある。時には不可解なものとして嫌惡し、誤

解することも少なくない。現代人はある程度まで――それを相當に深い程度まで西洋思想を理解してゐる。又日本人はその點において、他の東洋民族よりもそれを理解する素質を持つてゐたやうである。それが又今日の日本を作り得た原因でもあつたらう。しかしそれは西洋を模倣することに依つて作り得た形態上のことに過ぎない。それが模倣である限り、例へばその學問にしても實踐からは遊離したものになる。日本の今日の文化が模倣以上に出ないことは、あらゆる判斷の基潮を彼に求めてゐる事實に依つても解る。

明治以來われわれは西洋學を通じて物事を見ることを敎へられて來た。恰も德川時代において儒敎――廣くいへば支那學を通じて見ることを敎へられたのと同じである。日本はアジアにおける最大の獨立國として列强に伍するものであるといふ。しかし文化的に果たして獨立國といへるであらうか。西洋のものといへば一も二もなく模倣して來たわが學界に學問的收穫の乏しいことは當然である。それは單に世間が學問的研究の意義を知らず、文化建設の努力に理解がなかつたばかりではない。さうした世人の學問への無理解が學者の生命を蠹食し、その努力を無爲ならしめたことは事實である。しかし他方學者自身にも罪がある。西洋學を模倣するこ

とを以つてわが事終れりとした學界もその責の一部を負はなければならない。後進國として他の優秀なる文化を攝取する必要があつたといふのがその唯一のいひわけにならう。しかし今日になつてもなほこの口實を利用してゐて差支へないであらうか。結局模倣は原物以上に出でることは出來ない。模倣に終始する限り、日本文化が眞の世界的意義を有することは困難である。今や日本もさうした模倣時代を脱却すべき時期に到達したのではなからうか。

四

わが歴史を回顧して見れば、常に大陸の優秀なる文化の影響を受け、その文化に接して次第に改革を行なつて來てゐる。隋唐文化の影響を受けて行なはれた大化改新や西洋文化の敎導になれる明治維新などを思ふと、殆ど外來文化を常に仰ぎ向へて來たともいへる。このことが舶來物を尊重する氣風を養成する重要な原因となつたことであらう。しかしわれわれの祖先は單に外來物を尊重し、模倣ばかりしてゐたわけではない。同時にこれらを同化し、日本化する能力をも有してゐた。從つて日本民族は模倣には秀でてゐるが、獨創性を全然缺いてゐるといふ

批評は當を得たものではない。あるものを同化するといふことは、自己固有のものを有してゐることである。そしてそれは又獨創的なものを作り上げる能力を有してゐることを意味する。

徳川時代にも儒者などの支那崇拜熱に對して反抗する運動は、かなり早くから生じてゐた。しかしそれは未だ學問的に儒敎以上のものを形成し得ないうちに、西洋學の渡來に依つて、却つて固陋なる反動思想と化し去つてしまつた。しかし日本人が日本人として物事を觀察し、批判する力を有してゐる以上、そこに新しき日本文化を建設し得るわけである。繰り返していふが、それは固陋なる日本主義をいふのでもなく、又所謂過去の「日本的なるもの」の單なる復活を意味するものではない。現在の文化を基礎として、さらにそれよりも一歩進んだものでなければならない。

勿論かかる事業が一朝一夕に成就し得ると考へてはならない。破壞は容易であるが、建設は困難である。又容易に建設出來るやうなものに大したものはない。さらに又その事業は多くの者の協力を必要とする。一二の個人が覺醒しただけでは未だ十分とはいへない。新しき日本文化の建設は日本民族の協同に依る綜合力に依つてのみ成就される。そして一歩一歩築かれてゆ

くべきものである。このことは今日の西洋文化が何が故に強き迫力を有するかを考へれば容易に理解し得ることである。例へば機械の發明や發見にしても、それは今日名を傳へられてゐる數名の手になつたものではない。無名の無數の人人の協力に依つてなされたものである。偶〻幸運な少數者がその名を今日に遺してゐるに過ぎない。一將功成りて萬骨枯るとは單に戰場ばかりのことではない。それら多數の犧牲に依つて、始めて一つの礎石が築かれるのである。われわれは將來の日本文化建設のために一つの棄石として甘んずべきである。

五

日本民族が何らの文化をも創造し得ない民族であつて、西洋文化を模倣し、これに追從することを以つて能事終れりと考へてゐる日本人があるとするならば、彼は白色人種の與へた課題に從つて、彼等の指示の下に巧みに模倣すればそれでよからう。しかしそれでは假令如何にその生活を西洋化し、文明人と稱するとしても、それは畢竟一個の奴隷に過ぎない。假令物質的に獨立してゐたとしても、精神的には西洋人の奴隷である。自ら奴隷たることを甘受する者は

敢て論ずる必要はない。苟も日本人が彼等に優るとも劣らぬ民族性を有することを自覺せる者は、自ら自身の眼を以つて物事を見なければならない。

今回の日支事變がわれわれに何を語つてゐるか。日本は支那と戰つてゐる。しかしそれは表面のことであることは、すでに多くの人人の論じてゐることであるから、敢てここに繰り返す必要がない。日本が單に支那を侵略するといふのなら、この事變は無意味である。日本民族の經濟的發展が支那大陸に何らかの影響を及ぼすことは必然であり、これを拒否せんとするあらゆる勢力と衝突することは免れ難い。殊に支那がイギリスを始め歐米各國の權益の下にある今日の狀態にあつて、日本がそれに入り込まんとする時、それらの諸國と衝突の勢ひにあることは免れ難いことである。

ある者はいふ。歐米諸國は支那に侵略した。しかも彼等は支那に文明を與へたと。しかし果たして彼等は支那に文明を與へたらうか。否、支那ばかりではなく、東洋全體に文明を齎らしたといふだらう。即ち東洋的な專制國家の代りに、民主的な西洋文明を扶植したといふであらう。事實われわれは西洋文明の恩惠を享けてゐる。鐵道、電燈、電話等等、數〻の施設が、エ

ジプトに、印度に、支那に近代都市を建設した。しかしそれに依つてそれらの民族の幸福は果たして增進されたらうか。これらの地方を旅行した者が常に目擊する白人の横暴なる態度は何を語るのであらうか。又それらの東洋民族の卑屈な態度は何を語るのであらうか。さらに又各地における民族運動は何を語るのであらうか。第十七世紀以降東洋における白色人種の行動の歷史は、もし赤裸々に叙述するならば、われらアジア民族として汚辱を感せずに聞き得るものではない。そして與へられたものは屈辱と忍從とである。幸ひにして日本は今日漸くその屈從を免れることを得た。日本に與へられた使命は明白ではないか。おのれだけ免れれば他はどうでもよいと考ふるならば、さらにおのれの優位を利用して他を虐げんとするならば、日本は自らその生命を絕たんとするものである。今爾の事變に際し、かのビスマルクがオースタリィとの講和に際してなしたやうな、ビスマルク的轉向が要望されるのは、かうした事實が暗默の中に認められてゐるからである。日支兩國民は一日も早く提携しなければならないのである。そして新しき東洋文化の建設に努力すべきである。そして今回の事變が單なる日本の侵略でないことを世界に實證する必要がある。

かつ又今回の事變を契機として、われわれは新しくわれわれの眼を以つて東洋の事物を見直す必要があらう。東洋とは何か。東洋文化とは何か。從來甚だ怠慢であつたがために、それらのことは一切西洋人の眼を通じてわれらに傳へられたといつても過言ではない。バビロニア、アッシリア、エジプトの古代文化はいふまでもない。印度、支那、蒙古等何れも、主として西洋學者の研究に委ねられてゐる。他方僅かな資料、不徹底な研究を基礎としたヘェゲルの「東洋的」、又轉じてマルクスの「アジア的」なる言葉を金科玉條として、それをすべての東洋觀察の基準として毫も怪しまない狀態である。もし日本民族が東洋民族の盟首たることを以つて自負するならば、これら西洋諸學者の成就したアジア研究を再檢討し、われわれの眼を以つてその本質を明かにし、さらにもし、なほ探訪すべき資料が遺されてゐるならば、自らその蒐集に努力すべきであらう。而して所謂「東洋的」「アジア的」と稱せらるるものが、果たして妥當であるかどうかを考察すべきである。

勿論前述した通り、それは一日にして出來上るものでもなく、又一人にして成就されるものでもない。宣傳用としては不適當であらう。しかしすべての者がサンドウィッチマンで滿足し

てゐては、その國の學問は發達し得ない。もし今回の事變を契機として、日本が東洋に何らかの建設的運動を起さんとするならば、先づ日本人の獨立人たることを自覺し、眞の東洋を鮮明にする必要がある。東洋文化は過去のものであるかどうか。それとも新しき文化の礎石たり得るかどうか。私はアジア民族の一人として、その眞摯なる研究の必要を痛感する者である。そしてそれは又今回の事變を有意義ならしむるものであると信ずる。

（昭和十二年十二月）

矛盾せる日本

ヘレン・ブラットの著「日本・古代の忠順（loyalties）の遺れるところ」に日本の矛盾としていくつかの箇條を擧げてゐる。必ずしも嚴密には矛盾とはいへないが、他山の石として敎へらるるところもあるから、ここに紹介しよう。

（一）着物と洋服、（二）日本式家屋と洋館、（三）歌舞伎・能・傳統的音樂とレビュー・オーケストラ、（四）茶湯・生花と西洋式戯戯・スポーツ、（五）昔ながらの儀式・禮儀作法と新しき禮法の經驗、（六）自然美に富める土地と耕地の缺乏・農村問題・農村貧困化の增大、（七）自然美に對する愛と工業都市の不潔、（八）傳統的諸道具における美術的才能と新來の

諸物に對する惡趣味、（九）國内における禮儀正しきことと國外における勇猛さ、（一〇）家に對する忠順さと狡い盲目的攘夷思想、（一一）生活の單純さと國費の浪費、（一二）骨の折れる手工業制製造業・近世的大工場・勞働統制の諸法律・滿足せる勞働者と家内製造業における勞働法の缺如・大産業における親權主義・警察及び政府の勞働組織支配・低賃銀、（一三）成男子普選・議會政治とファシスト的傾向・財閥の政黨支配・議會の無勢力、（一四）商工業の增大・世界市場における鬪爭と國内市場の貧弱。

この種の矛盾が世界至るところに存在してゐることはプラットも認めてゐる。しかし特に日本において甚だしく、上述のやうな表は、殆ど無限につづけることが出來るくらゐであるといふ。その原因はどこにあるか。日本は西洋の技術、方法を適用した殆ど唯一のアジア民族である。然るに日本には古くからの傳統がある。日本が如何に近代化しても、依然として古い思想、古い行動からは脱却し得ない。この二つのものが相併行して行なはれてゐるところに、上述したやうな幾多の矛盾を生ぜしめたのであると答へてゐる。

かくの如き矛盾はわれわれ日本人にとつて今日始まつたことではない。プラットを俟つまで

もなく、われわれの痛切に感じてゐることである。日常生活における二重生活の負擔から、思想上における種々なる對立に至るまで、幾多の解決すべき問題がわれわれに遺されてゐるのである。明治初年から今日に至るまで、この二つの對立は弱まるどころか、漸次に深くなりつつあるといつてよい。しかし何時かはわれわれ自身がこの矛盾を克服して、綜合へ進まなければならないのである。

プラットは現下の日本の傾向を批評して次ぎの如くいふ。急進的な觀念は、相爭ふ勢力のために屈服し、反動的勢力に道を讓らざるを得なかつた。しかし思想と行動との古い傳統へ歸ることが、今日日本において相爭へる二潮流のはけ口として役に立つだらうか。又はこれらの勢力がある他のはけ口を見つけるだらうか。勿論これに對する答へは未來に遺されてゐる。敢てなされるあらゆる豫言は、その人人の哲學と歴史觀に基づいてなさるるに過ぎないと。

私はここに敢て日本の將來について豫言せんとする者ではない。しかしこれだけはいひ得る。現在日本人が一つの大なる試煉期に遭遇してゐること、そして從來もさうした危機に遭遇したことがあり、それを十分乘り切るだけの國民性を有してゐることである。從つて今日の場合も

十分克服し得ると信ずる。唯これを乗り切るに當つて、現在われわれがさうした機會にあることを十分自覺し、反省することが先づ第一に緊要事であると考へる。

（昭和十三年三月）

白色人種の天下

一

ポルトガルの東洋進出以來、世界は白色人種の天下であつた。殊に先進資本主義國たるイギリスはその優秀な技術と絶大な覇權とを以つて後進國に向つた。そして自由主義の理論的正當さを堂々と主張した。勿論國際貿易における自由主義は、一部の一時的現象として以外には、他の國國においては殆ど全く行なはれなかつた。しかし資本主義生産組織はその理論的基礎として自由主義を原則としてゐた。市場においては自由競爭が行なはれ、優勝劣敗に依る自然必然的進化が出現するものと見做されてゐた。劣等なる生産組織が競爭場裡から落伍し、沒落す

るのは、人類進化の當然の經過であると見做された。

歐米各國はイギリスの例に倣つて產業革命を行なつた。そしてその生產品の市場を後進農業國に求めた。その多くは有色人種の國國であつた。國際分業の有利なことが高唱された。世界はその生產品を輸出する商工國とその原料を產出する農業國とに分かたれる。農業國は商工國へ原料を輸出するその代償として、安價に製造品を獲得出來る。この國際的分業は兩者にとつて共に有利であると主張した。しかし商工國と農業國との住民の生活程度を比較する時、その欺瞞性は極めて明かである。農業國はかくして商工國から少なからず搾取されてゐた。この意味において近世は、白色人種の有色人種搾取の時代であつた。

しかし農業國と雖も、何時までもこの不利益な地位に甘んじてゐるわけにはゆかない。殊に資本の有する國際性は、漸次に後進國に投資され、その工業を發達せしめつつあつた。この狀態は資本主義發展の當然の結果ではあるが、先進工業國にとつては、最も面白からざる結果である。彼等にとつてはそれらの國國が恆に原料供給國であり、その生產品の有利なる市場として置きたかつたのである。故に、もしそれらの國國に對して、政治上支配的地位に立つ場合に

は極力その自然的發達を阻止せんと企ててゐたのである。イギリスの印度に對する場合の如きは、その好適例である。機械工業に對し重稅を賦課してその發達を阻止せんとしたるが如きがその一例である。

要するに歐米諸國は東洋その他の後進國を一方その商品の市場として利用し、他方資本投下の形態において搾取してゐたのである。即ちこれら後進國に對する投資は、結局該投資國の生產物の需要となつて現はれ、單に資本に對する利子のみならず、その購入さるる商品に對する利潤も、該投資國の手に歸するのである。かくして歐米諸國は國內における餘剩資本を利用して、その對外市場を確保せんとしたのである。

この過程を辿る時、結局世界の資本の大部分は西歐諸國の掌握するところとならざるを得ない。そしてその限りにおいて白色人種の天下であつた。彼等は世界を橫行して憚るところなかつた。文明といへば、それは白色人種の文明であつた。試みに明治維新以後今日に至る日本の狀態を見るがよい。日本は確かに獨立國である。幸ひにして印度、又は支那の狀態に陷らずしてすんだ。しかし日本が今日まで努力して來たことは殆どすべて白色人種の模倣であつた。模

倣必ずしも批難すべきものではない。人間の進歩發達はすべて模倣から生ずる。しかし今日は甲を模倣し、明日は乙を模倣するが如き、無定見の模倣は終に模倣以上に出づることが出來ない。模倣に次いで來たるべきは、それ以上の創見でなければならない。日本は歐米を模倣して今日に至つた。白色人種を尊敬し、これに追從すること、時に卑屈の程度に墮した。しかしとに角その模倣において成功した。

最近日本においても、日本精神を高唱すること頗る急である。何故に今日になつて急激に日本精神を必要とするに至つたのか。何故に國家の團結を緊切ならしむることを力說しなければならなくなつたのか。それらは今までも必要であり、力說しなければならないものであつた。それが特に必要とされる所以は何處にあるのか。

二

白色人種は天下を取つた。資本主義社會における優越せる地位を占むる者は彼等であつた。然るに資本主義制度は漸次にその形態を變更せざるを得なくなつた。資本主義は資本の增大に

より生產力を著しく高めた。これは明かに資本主義の功績であつた。しかしそれと共に固定資本が著しく多くなつて來た。固定資本の增大は市場爭奪の自由競爭から生ずる危險を著しく高め、何らかの方法に依つてこれを統制する必要を感ぜしむるに至つた。市場における自由放任主義は理論通りの好結果を生まなかつたのである。經營が擴大され、組織が複雜になるにつれて、ある一企業の沒落を優勝劣敗の必然的結果であると、見做し難くなつて來たのである。それほど產業相互の關係が複雜となり、社會との關係が密接となつたのである。かくして資本家間の合同又は聯合が促進され始めた。

他方後進農業國における產業革命は、種々なる壓迫にも拘らず、徐々にその歩を進めて來た。利潤獲得を目的として投下された資本は當然それらの地方を產業的開發に導いたのであつた。先進國は輕工業から重工業へ轉化することに依つて、それらの地方を依然自國の有利なる市場としてゐた。彼等はこれらの地方に鐵道や機械を輸出した。彼等はこれを以つて、これら未開地を文明開化に導くものとして誇示したのである。しかしそれらがやがてその有力なる競爭者となることを恐れて絕えず壓迫を加へてゐた。資本主義は次第に生產力を增大して行つた。し

かしその市場に對する無統制——需要供給の自然的作用を除いて——は經濟的不安を增大せしめた。生產力が增大すればするほど、この不安は增大せざるを得なかつたのである。

需要供給の自然法則が純粹に行なはれたならば、勿論その恐慌は頗る大であらうが、兎に角一時的破綻の後、再び調和が取れる筈である。古い舊式の機械を採用せる劣惡な組織の企業はより優秀なる企業に依つて一掃される筈である。然るに今や前述の如くその猛烈な破壞力を有する自由競爭を中止することに依つて生產の統制を行なふやうになり、この法則は部分的にのみ行なはれるに過ぎなくなつた。その結果大資本家にとつてのみ有利となつた。何故ならば、かかる統制を行ない得るものは大資本に依る企業だけであつたからである。

この傾向は世界大戰前においてすでに頗る濃厚であつた。恐らく世界大戰が起らなかつたとしても、かくして資本主義が漸次自由主義を排除して、統制主義に向つたことであらう。然るに世界大戰は一層この傾向を促進せしめたのであつた。何故世界大戰はこれを促進せしめたか。

世界大戰は西歐先進諸國を戰禍の最中に引き込んだ。それらの國國の經濟的機能は戰爭のために全く變更されざるを得なかつた。單に從來有してゐた市場を放棄せざるを得なかつたのみ

ならず、自國の必需品さへも他に仰がなければならないやうな狀態になつたのである。かかる事情はアジア及びアメリカの經濟狀態を一變せしめた。即ち西歐資本の勢力は著しく減退した。日本及び北米合衆國の例はあまりにも顯著であるから、ここには他の例を採らう。

前にも指摘したやうに、印度はイギリス資本の壓迫を蒙ることが最も大なる國であつた。然るに世界大戰中、イギリスは印度の工業を壓迫するよりも、むしろこれを奬勵せざるを得なかつたのである。印度における資本主義の成長はこの間に頗る顯著なものがあつた。ここに一二數字を引用して、その一般を推測することにしよう。

印度の主要產業たる綿業は如何。戰前一九一三年において紡錘數六百三十九萬七千、その消費綿花量百七十六萬二千俵であつたのが、一九二四年には紡錘數九百三萬三千、消費綿花量二百九十六萬五千俵になつた。從つて印度は最早ランカシャア資本家の手から離れんと欲してゐる。ガンヂィの所謂スワデシィ運動——印度人のための印度——の經濟的基礎が築かれた。見よ、一九一四年以後イギリスからの綿布輸入量は次ぎの如き數字を示してゐる。

一九一四年に三、一〇〇、〇〇〇、〇〇〇ヤード。一九一八年に一、四四〇、〇〇〇、〇〇〇ヤー

ド。一九二二年に一、〇一〇、〇〇〇、〇〇〇ヤード。一九二四年に一、四一〇、〇〇〇、〇〇〇ヤード。

そればかりでなくイギリスは印度を世界大戰に參戰せしむる條件として、將來の自治を約束したのであつた。イギリスの對印度政策はその方針を變更せざるを得なかつたのである。

大戰は終局を告げた。歐洲諸國はその經濟的立て直しをしなければならなかつた。そのために先づ生產力の復活を計つた。生產力は復活した。むしろ戰前以上に復活し得た。しかし戰前の好顧客たるアジアの市場は、以前の如く歐洲の生產品を受け容れなくなつてゐた。西歐資本家、又延いてその復活に依つて打擊を受けたその他の國國の資本家の惱みとなつた。生產組織は改善された。所謂合理化された。自由競爭に依つて生ずる多くの無駄——それは全體の五割から十割に上るといふ——は極力除かれた。自由主義は事實上排除されざるを得なかつた。浪費、無駄の排除は生產品を低廉にした。しかし失業者は增加した。一般の購買力は一向に增進しない。世界は經濟的不安の中に動搖し始めたのであつた。

各國は自國の產業にとつて有利ならしめんとして、極力關稅壁を築き始めた。あれほど自由

主義と人類の幸福との結合を信じてゐたイギリスも目前自國の產業的危機に際しては、その主張を放棄せざるを得なかつた。印度の勃興、日本の進出、それに反して高賃銀と不完全なる設備とに依つて不振の狀態にあるランカシャア地方、——唯一つその救濟策として賴るところのものは關稅壁を作ることにあつた。日印通商條約破棄の如きはそのあらはれの一つに過ぎない。

三

西歐文明沒落の聲は世界大戰後、間もなく起つた。大戰が終局を告げてから、すでに十數年を經たが、その痛手は未だに療えない。大戰の生んだ經濟的混亂は益ゝ自由主義的資本主義を沒落せしめた。勿論この經濟的危機は自由主義そのものの罪でないと主張する學者——ミーゼス氏の如き者もなくはない。しかし實際において自由主義は殆ど完全に排除されたといつてよい。それに代つて何らかの形態に依る拘束主義が勢力を得て來た。所謂統制經濟、計畫經濟の聲を到るところに聞くやうになつた。西歐、否世界は極めて不安な狀態に置かれた。西洋文明がこれを救ひ得るかどうかの疑問も生じた。かくしてここに世界は再び混沌たる戰爭狀態に陷

つたのである。

日本は白色人種の天下が最も華々しい時に國を開いた。白色人種のなすところを見れば、何れも光輝燦爛たるものであつた。その將來は誠に洋々たるものの如くであつた。しかしその西洋文明の結果は、却つて幾多の不安を齎らすものに外ならなかつた。今日の世界の情勢は再び東洋を、日本を回顧せしむるに役立つた。加ふるに日本資本主義の躍進振りは、その點においても白色人種に劣らぬといふ自信を與へた。かつて崇拜せる光輝の沒落は反動的に作用し始めた。勿論今日でもなほ白色人種に對する尊敬畏怖の感を一掃してしまつたわけではない。徒らに日本主義を高唱する者のあることは、その存在を暗示するものである。實力ある者は徒らに吠える必要を認めない。日本人が自尊心をもち、單なる西洋模倣から脱却し、白色人種の天下において、獨り有色人種のために氣焰をあげることは最も喜ばしいことである。唯それが淺薄なる反動主義に陷ることのないやうに用心する必要がある。

かかる狀態に進んだ日本が白色人種の天下にあつて、孤獨の地位に陷ることは止むを得ない。しかし日本をして國際上孤立せしむるに至つた——孤立的地位を敢て受けるやうにさせた勇氣

は、單に上述の覺醒にのみ基づくものとは思はれない。前述したやうな國際的情勢が各國の國民主義を著しく高揚したことも、その原因の一つであらう。イタリイにおけるファッショの、又ドイツにおけるナチスの運動が日本の民族性を刺戟するところ頗る大であつたらう。元來模倣性に富む日本人がそれらの獨裁的政治に多大の關心をもつことは甚だ明瞭である。流行から流行へと追ふて、これ日も足らぬのが、從來の日本であつた。世界の潮流に順應するといへば體裁はよい。しかしそれでは終に實を結ぶことがない。所謂うき草の境涯である。依然として白色人種の天下に屈服從屬する日本に過ぎない。

日本が精神的にも、物質的にも、白色人種の支配下から脱却するためには、現在の世界的潮流を洞察して、その社會的經濟的不安を除去する上に指導的地位に立たなければならない。單に淺薄なる反動主義に依る西洋文化の排斥や模倣的日本主義の專制獨裁に依つては成就し得るものではない。今日の日本の最も要求するところは根づよい不斷の努力に基づく指導的精神である。それは急激に生ずるものではない。國民の絶えざる努力から生み出されるものである。多くの人人の實質的な努力の結果、必然的に生ずるものである。實質的な努力といふのは社會

的不安を生み出す現存社會の諸缺陷を十分認識し、將來社會の建設を基礎づけるために全力を盡す努力である。その努力は單なる聲明書や宣傳に依るべきものではなく、自然科學者の研究實驗におけるが如く、最密周到の注意を伴ふ努力でなければならない。しかも自然科學者のそれよりも、より大なる困難が附隨する。現存社會には幾多の傳統があり、複雜極まる相關關係が存するからである。故に一二の者に依つて急激に成就さるるものではないのである。將來の成功には多くの知られざる棄て石が必要なのである。しかしかかる努力から生み出さるるものでなかつたならば、日本は世界に誇るべき本質的なるものを有さず、結局白色人種の支配下から完全に脱し得たとはいへない。

（昭和八年十月）

印度論

一

印度ほど西洋資本主義の犠牲となつた國はない。資本主義發展の基本となり、そしてその發展せる資本主義のために絶えず自國の產業發展が犠牲となつた國、そのために自國の健全な社會發達をなし得なかつた國、それは印度である。印度がかく資本主義發展の途上において、大なる犠牲とならざるを得ず、又今日なほその羈絆から脱し得ないのは、一つは印度そのものの國情に依存するものである。凡そある國の經濟的發展を知るためには、その國の傳統に依る特殊事情を十分に理解しなければならない。單に概括論的な發展說を以つてすべてを一つの型に

はめることは、ある程度まで可能であり、容易ではあるが、決してその發展の眞相を十分に把握し得るものではない。印度の如き場合においては特に然りである。

一口に印度といふが、印度は決して一國ではない。あらゆる點において一國を形成し得ない多くの事情が存してゐる。印度全體を統一するがためには、それら多くの分裂的要素を一掃する必要がある。然らば如何なる分裂的要素があるか。先づ第一に印度の尨大なる自然狀態から來る分裂がある。普通印度は三つの部分から成るといはれてゐる。即ち北部のヒマラヤ山脈の地方と中央のインダス・ガンジス兩河の平原地方と南方のデッキャン半島とである。これらの三地方はその自然的狀態を甚だしく異にしてゐる。印度文明の中心は勿論インダス・ガンジス兩河に依つて育まれた豐沃な中央の平原にあつた。その豐饒なる物産は常に印度以西の諸民族の羨望するところとなり、絶えず他民族の侵略を來たしてゐた。かくしてそこに數個の異種民族の占居を生ぜざるを得なかつたのである。

印度をして今日その統一に困難を感ぜしむる最大の原因は、それら異人種が十分に融合一致し得ないことにある。約三億二千萬と稱せらるる印度人口は實に多種多樣なる人種からなる。

印度の原住民族が何であつたかといふやうな歷史的問題は別とするも、相次いで侵略せる諸民族及びそれらの混淆に依つて生ぜる雜種が印度の人種問題を頗る複雜化し、これを理解する上に甚だしき困難を感ぜしむるものである。

紀元前二千年頃、アリアン民族がその先住民たるドラヴィダ族を驅逐し、古代印度文化を建設した頃から、すでにこの人種問題は始まる。所謂インド・アリアンと稱せらるる民族は印度人の中核を形成する者であり、ドラヴィダは勞働人口として有用な地位を占めてゐる。その他北境及びビルマのモンゴリアンは、前二者と共に印度における人種の三大類型をなすものである。しかし實際はかく簡單ではない。それらより派生せる雜種がそれぞれ又一民族を形成してゐる。全印度において使用さるる言葉が二百種以上であるといふ一事を以つてしても、これを推察するに難くないであらう。

かく人種を異にし、言語を異にすれば、當然風俗も違ふ。しかし印度民族の統一を最も困難ならしむるものは宗教の相違である。近世文明の洗禮を受けた現代人にとつて、宗教は重要問題と考へない者もあるかも知れないが、多數の人類にとつて、宗教は依然として生命であり、

生活の問題である。殊に印度人は宗教的民族である。印度の問題を正當に理解する上に、宗教は無視し得ない。宗教は信仰に基づく。そこに極めて強い力を有してゐる。從つてそれが有効に作用する時は、民族的團結に役立つ。しかしもしそれに反すれば、強力なる分裂的要素となる。印度の宗教は多種多様である。印度教、シィク教、回教、基督教、佛教、ジャイナ教、ユダヤ教、パァシイ教、その他原始教等がある。しかしこの場合宗教の種類の多いことは問題とならない。如何なる種類の宗教が最も勢力を有してゐるかが問題である。

印度において最も勢力ある宗教は、全人口の約七割を占めてゐるといふ印度教である。これに次いで回教が全人口の二割の信者を有してゐる。從つて他の宗教は數においては殆どいふに足りないものである。然らば最も勢力ある印度教とは如何なる宗教であるか。印度教（Hinduism）は古き婆羅門教（Brahmanism）から出たものである。しかし婆羅門教は一神教である。印度教は多神教である。その三位一體（Trimurti）説は創造神としてのブラァマ、守成神としてのヴィシュヌ、破壞神としてのシヴァを認めてゐる。しかし教義においてこの三神は認められてゐるが、實際の慣習においてはそれらの中の何れか一つの神を崇拜してゐるやうである。

今日純粹の婆羅門教に歸らんとする一派を除いて、ブラァマを崇拜する者は比較的限られてゐる。むしろ第三のシヴァがマハ・デヴァ（大神）として崇拜されてゐる。シヴァは破壞する。しかしその破壞の中に再生又は轉生がある。その中に希望がある。故に彼は破壞の神であると共に、生殖の神でもある。その意味でシヴァの崇拜者は多い。しかし彼は最も恐怖すべき神である。あまりにも苛酷な神である。そこで印度人間に人望ある神としてヴィシュヌがある。ヴィシュヌは穩和であり、親切である。概言すればシヴアの中に義務に對する獻身と峻嚴とを、ヴィシュヌの中に人生の仁愛を見出すのである。この二個の對立が近世印度教中にヴィシュヌ教徒とシヴァ教徒との對立を齎らしたのである。それらの兩者は信條において相對立するものではない。しかし全く違つた宗教思想を有するものであつた。恰もキリスト教における新教と舊教との對立に似てゐた。しかし三位の神神の力は對當なものと考へられてゐたから、そこに展ゝ混淆が起り、複雜化されてゐたことは止むを得ない。さらに印度教を複雜化せるものは女性的要素の導入である。各神神はサクチ（女性部分又は妻）を有する。ブラァマの妻はサラスヴァチで、音樂、藝術、文學の女神である。ヴィシュヌの妻はラクシミィであり、シヴァの妻

はパルバチ、ドルガ、カリの三神である。この男女兩性の存在することが、ここに二種の信者群を生じた。男神を崇拜する「右手信者」と、女神を拜する「左手信者」とである。

上述の如き信仰がその本質において中世的であり、傳說的であるのは勿論である。彼等の祭禮が所謂お祭り騷ぎを演ずるのも、さうした信仰の常である。そのブゥジャと稱する祭日に際しては、印度教徒は全く昂奮熱狂する。その結果平常相反目せる回教徒と衝突することも珍らいことではない。印度教徒は回教徒を以つて他國の宗教を奉ずる者として、全く別個のカスト（種姓）に屬する者と見、これを蔑視してゐる。ここに印度教におけるカストの問題が惹起される。

婆羅門教において、婆羅門、刹帝利、吠舍、首陀羅の四姓があつたことは多くの人の知るところである。即ち一種の宗教的社會組織であり、神に對する自然的恐怖の强い、比較的原始的な民族の常に採用する形式である。僧侶階級たる最上級の婆羅門は武士階級たる刹帝利の中から國王を任命する。吠舍は庶民であり、首陀羅は奴隷である。勿論この原始的な形態がそのまま今日も行なはれてゐるわけではない。しかし印度においては今なほこのカスト即ちサマジが

存してゐる。サマジはその結婚の範圍を同姓間に限定するのみならず、その職業をもある範圍に限定する。

元來印度教徒において經濟生活は個人を單位とするものではない。一つの血族からなる。家族を以つて經濟單位とする。その點においてカスト制度の如き社會組織がなほ殘續し得る餘地がある。又經濟的にも一つの意義を有し、これを基礎として印度の經濟狀態を改善せんとする論者さへある。しかしかかる社會組織は本來單純なる地方的經濟組織の下においてのみ可能である。現に今日のカストが異種族を取り容れ、甚だ多種多樣になつてゐるといふ事實からも、それらは到底今後永く維持し得る制度でないことが明瞭である。唯前述せる如く印度人のその宗教を信ずることの頗る强いこと、又印度內地における諸地方の生活が依然として古い經濟形態の下に營まれてゐること等が、今なほカストの慣習を支持し得るのであらう。かかる狀態はそれだけをもつてしても經濟生活の向上を計ることを甚だ困難にする。況んやそれ以外に、外部的に抑壓されてゐる場合、その發展は益ゝ困難にならざるを得ない。そこで先づ印度人自身の經濟狀態を概觀して置かう。

あらゆる後進國と同樣に、印度も古くから傳はる產業組織と歐米諸國から渡來した新產業組織との相錯綜して存在せる國である。否前述の如く古い產業組織の最も頑强に支持されつつある國の一つである。加ふるに印度は先進資本主義國たるイギリスの强力なる壓迫を受け、自由に自國の經濟的發展を行なひ得ぬ國である。かくの如く背進的要素を多分に有する國として、印度の經濟狀態が甚だ惠まれざる狀態にあることは、全く止むを得ない傾向である。

印度の一般大衆が極度の貧窮狀態にあることは、勿論種々なる理由に基づくものであるが、上述せる二個の點——即ち古い種々なる社會制度が一般に社會生活の向上を妨げてゐること、及びイギリスが經濟的に搾取してゐることに基づくこと大である。マッカジィがその著、「印度經濟の基礎」に揭ぐる一般生計費の消費割合を見ると、次ぎの如くである。

	月給勞働者	農夫	大工	鍛冶匠	店員	下級中產階級
食費	九五・四	九四・〇	八三・五	七九・〇	七七・七	七四・〇
被服費	四・〇	三・〇	一二・〇	一一・〇	九・〇	四・七
藥費	—	一・〇	一・五	五・〇	五・九	八・〇
教育費	—	—	—	—	—	一・〇
宗教及び社會的典禮費	〇・六	二・〇	四・〇	四・〇	五・〇	八・〇
娛樂費	—	—	一・〇	一・〇	一・四	二・〇
合計	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇

右表に依つても明白なるが如く、印度の一般民衆の生活は文字通りに手から口への生活である。勞働者、農夫の如きは實に全收入の九割五步を食料に捧げて、僅かに生活し得る狀態にある。假りにこれをわが國の勞働者階級と比較して見ると、その家計調査に依れば、勞働者世帶中五十圓未滿の月收ある者はその四割四步を飲食費に使用してゐる。かなり甚だしい生活程度の差を見出し得る。

然るに右表について最も注意すべきことは、宗教及び社會的儀式典禮のために、多くの費用を出してゐることである。藥費も、教育費も、娛樂費も出し得ぬ極貧者すらも、この方面にはなほ幾分の費用を獻じてゐるのである。これは全く印度特有の社會組織の結果に外ならない。彼等の宗教及びカスト制度の勢力は今なほ印度大衆を支配してゐるのである。

印度の一般民の生活程度が、かく著しく低いといふ事實は、勿論印度全體にとつて、甚だ不

幸であるといはなければならない。しかしそれよりも印度にとつてより重大なことは、上述の諸事情が印度全體の統一を不可能ならしむる分裂的要素として、強い力を有してゐることである。それらの分裂的要素の多くは、多くの國においてその封建時代には印度と同じく存在してゐた。しかし近世國家の發生と共に、それらの內部的分裂は融合統一された。印度が今日に至るまで、その統一を完成し得なかつたことは、益々イギリスの侵略を容易にしたのであつた。イギリスはこの分裂的要素を利用して、印度を併呑したのであつた。

二

マルクスはその「印度支那論」において、「イギリスは印度において果たすべき二重の使命をもつてゐる。一つは破壞的使命、二には創造的使命である。一面、舊來のアジア的社會秩序の破壞、他面アジアにおける西歐の社會秩序の物質的前提の創設である」といふ。イギリスは印度において明かにこの二使命を大體において果たしたといひ得るであらう。假令それが「個人のみならず全國民を鮮血と汚物とにより、又貧困と屈辱とを以つて蹂躙すること」に依つて

なされたとしても、印度がイギリスに依つて、その資本主義化の第一歩を進めたことは事實である。しかし印度の資本主義化は決して順調に進んで來たものではなかつた。少なくともこれを妨げる一要因たる古き印度の傳統は容易に破り得なかつた。このことは換言すれば印度の分裂的要素を簡單に打破し得なかつたことを意味する。

印度においても西洋資本主義の侵略の甚だしくなると共に、これに對抗するために、微力ではあつたが、反抗運動は起つた。印度に侵略せるイギリス資本主義は印度の中世的村落の自給自足の孤立的經濟を破壞し、社會機構內部の同化作用を著しく高めた。この事實は必然的に印度人社會における民族的意識を强めざるを得なかつた。殊に日本がロシアを打破した後、その運動は一層高められた。勿論印度における反抗運動はその以前に始まる。殊に一八五七年の印度兵暴動（Indian Mutiny）の如きはその著しい事件である。しかしそれはイギリスの軍律の印度傭兵に對する苛酷なる態度にその端を發せるもので、その結果は東印度會社に代つて王室をして、支配的地位に置かしむるに止まつた。唯かかる一部軍隊の反抗が印度全體に大なる不安を齎らした點に一つの意義を認め得る。要するに印度の民族運動は日露戰爭の結果に依つて

大なる刺戟を與へられ、それに依つて漸次に具體的運動に導かれたのであつた。故に日露戰爭の翌年、一九〇六年から一九一八年に至るまで、印度全般に絶えず暴動が繰り返されてゐた。

印度における民族運動が漸次に擴大さるると共に、イギリス本國に對する反感は露骨になつて來た。歐洲大戰中を除いて、印度政府の採つた態度は甚だしく壓迫的であつた。何處までも武力を以つて抑壓しようとした。かの一九一九年二月に制定された治安維持法ともいふべきロオラット法はその代表的なものである。イギリスは一八八五年に印度國民會議（Indian National Congress）を設けてゐる。しかしそれは印度を印度人のために改善せんがために創設されたものではなかつた。イギリスのために作られたものであつた。從つて眞の民族運動のためには何ら貢獻するところがなかつた。單にイギリスの抑壓的政策から生じた反抗運動の惡化を恐れ、その安全瓣として、又印度指導の自家辯護策として設けられたに過ぎなかつたのである。從つて初期の國民會議議員は穩健なる啓蒙的自由主義者に過ぎなかつた。イギリスの對印度政策は何處までも武力的抑壓政策であつたのである。故に屢〻官憲と民衆との間に流血の慘事を見ざるを得なかつたのである。

かかる壓迫の中にも、印度の民族運動は進展して行つた。そして印度民衆の敵愾心は昂まり排英熱は强烈となつた。殊に印度教徒において最も烈しい。しかしそれらの運動の中に二個の潮流がある。一つは印度をして印度人の印度たらしめ、イギリスの政治的覆絆を脱せんとするもの、他の一つは英帝國の治下にあつて、カナダの如き自治領たらんとするものである。勿論完全な民族運動としては前者でなければならない。かく印度人の印度を要求するやうになつた直接の動機は、前述せる如く排英思想からであつた。かのスワデシィ運動がその端緒である。イギリス製品を使用せずして、假令高價であつても、自國産の商品を購入する。この運動は一九〇五年頃よりすでに盛になつてゐる。かのマハトマ・ガンディに依ればこの運動を印度人の生活の三つの方面より基礎づけんとしてゐる。第一は宗教的方面で、印度自身の祖先の宗教に限定せんとしてゐる。第二は政治的生活で、同じく印度固有の制度を利用せんことを主張してゐる。第三は經濟的方面で、彼自身の言葉に從へば、「私は私の直接の隣人によつて生産されるもののみを使用し、もしそれに不足を感ずる場合には、その能率を增加し、それを完全なものに改良することによつて、その産業に奉仕しなければならない」といふ。

このスワデシィの運動は、要するに外國文化の急激なる流入と、その壓迫とに對する烈しい反感の結果生じた祖國愛の運動である。かくの如き運動は如何なる國においても、外國文化が極端に模倣さるる場合、必ず起つて來る反動的現象である。宗教に、政治に、經濟に、自國の傳統を支持せんとする愛國的運動である。わが國の明治初期にも多く見られるところである。唯印度においては、それがイギリス政府の壓迫に依つて特に激烈になつてゐただけである。この祖國愛の運動がかかる場合、獨立運動の形態に進んだことも又當然なことである。從つて又印度における獨立運動が今なほその初期の特徴を持續してゐることも止むを得ない。

他方ここに注意すべきは、印度國民會議の本質に著しき變化を來たしたことである。前述せる如く、印度國民會議はその設立の當初においては、一つのイギリス政府の御用機關に過ぎなかつた。然るに今日においては印度の民族運動と切離して考へることの出來ないほど密接な關係を有するに至つた。初期における會議に勢力を有してゐたのは、所謂中央派であり、印度政府に抗議する者も、印度人ではなくして、イギリス人議員であつた。進歩的思想を有するイギリス人は、本國政府指導に依る印度の惡政を漸次に改革して行つた。從つてそれらは本國政府

から見る時は多少過激と思はるるものでも、印度自體から見れば極めて穏和なものであつた。勿論われわれは英人議員のこれらの改革の價値を無視せんとする者ではない。その立憲政治的改革運動が印度人に對する智的刺戟となり、又印度全體の統一的要素として、大なる貢獻をなしたことは疑ひない。しかしイギリス人のこれらの行動は第十八世紀以來の人道主義的博愛主義に基づき、又當時の世界主義的理想と自由主義的理想の結果に外ならないものであり、印度人にとつては極めて不滿足なものであつた。勿論當時にあつては、無條件に西歐文化を謳歌し西歐の諸制度を模倣することに依つて印度自身を救濟し得ると考へてゐた者も多かつたから、イギリスのこれらの行動を眞底から讃美する者も少なくなかつた。しかしイギリス政府の認容するこれらの模倣的改革には自ら限度がある。本國との利害關係が常に顧慮されてゐる。從つて一般歐化主義者にとつても決して滿足し得るものではなかつた。況んや印度固有文明の優越性を信じ、印度人中心の政治を理想とする人人にとつて默認し得るものではない。チラック、ゴクハレ等の印度人中心主義が國民會議においても勢力を得て來たのは當然である。ゴクハレの指導に依る中央派の如きも、依然穏健ではあるが、從來の態度を變更せざるを得なかつたの

である。ここにおいて印度國民會議の本質は今までと變つて來た。民族運動の一つの中心とならざるを得なかつたのである。

以上私は政治的方面から見て、印度における統一作用の一端を論じたのであつた。次ぎに私はその根柢にある印度の經濟的發展について一瞥しなければならない。

三

印度は依然として農業國である。世界大戰前においては人口の大部分が農業又は牧畜を以つて生計を立ててゐた。一九一一年の統計に依れば、二億二千四百萬以上を算へてゐる。全人口の七割二歩である。米の耕作地が八千萬エカァに近く、それに次いで小麥の三千萬エカァ、棉花の二千三百萬エカァである。かうした農業が未だ改良の餘地の多い粗雜な耕作法の下に行なはれてゐる。あらゆる方面において他の進歩せる農業國よりも生產能率が低い。例へば印度における砂糖の收穫高は同一面積について、キュバの三分の一、ジャヴァの六分の一、ハワイの七分の一に過ぎない。米、小麥、棉花等についても同樣なことがいはれる。それは印度の地質

に基づくものではなく、耕作法の拙劣粗雜に歸すべきものである。しかしそれらの生產額は十分國內人口を維持するに足る食料を提供し、平作においても多少の餘剩を輸出し得る。棉花は國內において消費さるるはその半に過ぎず、殘餘の半分は輸出されてゐる。

以上の如くその生產技術の不十分なるに拘らず、印度はその低度の農民生活を維持するに十分であつた。かくの如き農業社會において過去の封建的慣習が强く維持さるることは當然である。印度人の大部分を支配する思想が中世的思想であり、その傳統の宗教的精神であることは當然である。今この點を論ずる前にその工業方面について、一瞥する必要がある。何故ならばそれらの過去の傳統を破るものは、鐵道その他の交通機關の發達と、近代的工場組織の發展とであるからである。

印度において近世的發展をなした工業は綿業と麻（Jute）業とである。一九一九年に綿紡績及び織物工場は二百七十七を算へ、織工、紡績工三十萬六千三百十人を使用し、又仕上工場千九百四十においては十四萬七百八十六人を雇傭してゐる。麻業においては七十六紡織工場においては二十七萬六千七十九人、二百十一仕上工場において三萬三千三百十六人を使用してゐ

る。これらは何れも近代的組織に依る新經濟生活を提供するものである。そして印度の古き經濟生活を打破せんとするものである。

この新工場組織の發展については、二個の重要なる妨害がある。一つはイギリス本國のランカシャアにおける綿業であり他の一つは國内における手織工の大群である。イギリスがその本國の綿業を保護せんがために、關税政策に依つて他の國國の競爭を阻止すると共に、印度綿業の發達を阻止せんとしてゐたことは著名の事實である。他方印度人の保守的傾向はその村落自給自足の慣習を維持し、一部人口の相對的過剰を生じてゐるにも拘らず、常に勞働人口の不足を告げてゐたのである。

しかしこれらの事情は結局印度産業革命の發展過程の一現象に過ぎない。勿論、それが貧民問題その他甚多の重要なる社會問題を生む原因とはなつたが、又今日においてもなほ大なる問題を惹起してはゐるが、結局印度における資本の活動と共に、その犠牲とならざるを得ないものである。唯前述せるが如き印度の封建的慣習が——金銀の印度的死藏もその一つであるが——資本の活動を妨げてゐる間の問題に過ぎない。イギリスの傳統的印度搾取も結局は破綻を生

ぜざるを得ない。印度がイギリスにとつて重要であればあるほど、この結果は急速に到來せざるを得ないであらう。

しかし當時、又現在においても、上述の二個の點は印度綿業の産業革命化を妨げてゐる。一九二一—二年の政府委員の報告は次ぎの如く述べてゐる。

「勞働に關しては、この國の大部分において、耕作に要する勞働者數以上の過剰農業勞働者が存してゐる。しかし一部工業地方における住宅設備の不完全から、又一部印度人の傳統的保守主義から、現在では工業勞働生活に轉化することを嫌惡する傾向がある。その一つの結果として、工業における勞働は屢々不足し又一般に移動的である。かかる源泉から生ずる勞働供給は必然的に不熟練であり、從つて熟練工は甚だしく缺乏してゐる。」

この報告は明かに印度における産業革命の困難であつた一面を示してゐるものである。又それと共に印度が一つの過渡的狀態から未だ脱却してゐないことを示すものである。農業勞働者の工業勞働者に轉化し得ないところに、印度特有の事情が存することを觀察しなければならない。

四

印度における民族運動が一躍進をなしたのも、又印度における産業革命が促進されたのも、共に世界大戰に影響さるるところ大である。勿論世界大戰がなかつたとしても、印度における資本の活動は漸次に同一傾向に向はしめたであらう。しかし大戰に依つてこれが促進されたことは明かである。何が故に促進されたか。一つは戰時中におけるイギリスの政策の緩和であり他は戰後における世界の國民主義的潮流である。

世界大戰中、印度は忠實なるイギリスの協力者であつた。一九一五年ラホォル、その他において、獨立運動が起つたとはいへ、全體としてイギリスに協力した。印度が大戰に派遣した兵數は百二十一萬五千人を越え、その財政的援助は三億五百萬磅であるといはれてゐる。勿論それには多少の代償はあつた。イギリスはそれらの援助を絶對的に必要としたので、印度の自治的運動に多少の好意を有するが如く裝ふた。實際としてはかの一九一八年四月に發表された所謂モンタギュ・チェルムスフォド報告なるものがその貧弱なる代償である。それは一片の紙片

にも過ぎぬ代償であつた。前述せるロォラット條令と相俟つて英國の不誠意を如實に物語るものである。

しかし印度は最早昔日の印度ではなかつた。大戰に依つて經驗せる經濟的自信、ロシア革命の成功、大戰後の民族自決主義の思潮、これらは印度人に多大の影響を與へざるを得なかつた。印度における民族運動は强化された。これに反してイギリスも亦昔日のイギリスではなかつた。その經濟上の勢力は漸く後進新興國の蠶食するところとなり、大戰の負擔は少なからざる重荷となつてゐた。そして印度はイギリスにとつて經濟上、政治上、頗る重要なる地位を占むるやうになつた。

この兩者の狀態の變化はイギリスをして歩一歩讓歩せざるを餘儀なくした。かのサイモン委員會も、ロンドンの圓卓會議も、かかる狀勢の下においても、なほイギリスを出來る限り優位に置かんとする苦心の努力に外ならない。それらの政策は益ゝ印度の民族的運動を强烈ならしめた。かつてはイギリスと平和的協定に入らんと欲してゐたガンディをして全く反對の態度を採らしむるに至つた。イギリスは印度をして無智無力ならしめんと欲してゐた。少なくとも政

治的に覺醒することを欲しなかつた。そして印度内部における階級的分裂、宗教的分裂を利用することに依つて、完全に自己藥籠中のものたらしめんとした。その傳統的政策は所謂「分割而して統治」にあつた。經濟上においても同樣であつた。イギリス產業の印度市場獨占がその理想である。

しかしイギリスのこの態度は却つて印度をして大なる反感を抱かしめ、印度民衆の自覺を促がす契機とならざるを得ない。要するにイギリスが印度に對して如何なる政策を採るとしても、その根本においてイギリスのための印度といふ態度を捨てざる限り、反英運動は抑止し得ないであらう。少なくとも今日までなされた印度統一の民族的運動は、排英主義を現實の對象としてなされたものに過ぎない。イギリスといふ對象を失つた時、その民族運動は甚だしく違つた形態を採るであらう。果たして統一的要素として作用するかどうかも疑問である。この意味において勞頭に指摘したやうに印度は單一なる國民ではない。統一的要素よりも分裂的要素の方がより强き力を有してゐる。加ふるに印度特有の事情が一層分裂的作用を强力にする。從つてある點よりいへば、現在印度においてなされつつある民族運動はイギリスを對象とする外面的

運動に過ぎない。感情的愛國主義に基づく表面的運動に過ぎない。この點においてその民族運動は一つの轉換を要求される。少なくとも内部の諸事情を清算することが必要である。然らざる限り、印度は何らかの程度において、イギリスに對し從屬的地位を强制されざるを得ないであらう。何故ならば内部的諸事情を清算せざる限り、その分裂的傾向を除去し得ず、その民族運動は外部に對しても薄弱ならざるを得ないからである。

五

再び問題を以前に歸さう。印度特有の事情とは何か。印度の農業大衆がその過剩にも拘らず容易に工業勞働者に轉化しないのは何故か。その原因として私は二個の點を指摘し得ると思ふ。一つは印度人の經濟生活であり、他の一つはその指導的思想である。

本論の勞頭に指摘して置いたやうに、印度人の生活程度は極度に低い。印度人は世界一の貧乏人であるといはれるくらゐ低度の生活に甘んじてゐる。印度大衆の貧乏化の原因として、イギリスの搾取や近世工業組織の發展を擧げることは必ずしも適當であるとはいへない。勿論そ

れらが彼等の貧乏を助成したことは事實である。しかし印度人の大部分は昔から貧乏である。イギリスの征服せざる以前、近世的工業の發展しない以前から、印度大衆は貧乏である。印度の自然的環境が彼等の貧乏生活を可能にしたのである。又彼等の村落制度、又そのカスト制度が極貧生活を可能にしたのである。その農業に基礎を置く社會生活は、その自然的環境と相俟つて、彼等特有の指導觀念を生じた。

これに伴なつて印度人獨特の忍從的精神には驚くべきものがある。かのガンディの斷食抵抗の如きはその顯著なる一例である。惡に對しては受動的であり、消極的ではあるが、常に終局における勝利を信じ、頑固に自己を把持し續ける。これがよき方面においては高遠なる哲學思想を生み、宗教思想を育てて來た。しかし惡い方面においては、卑屈となり、狡猾となる。同一印度人中に兩個の著しい對照を發見することすら必ずしも困難ではない。

かかる思想は動もすれば利己的になる。獨善的になる。印度の大衆が古き生活を脱却することを欲せず、その極貧生活に甘じて忍從する態度はこの點から理解されよう。その意味において彼等は新生活を欲してゐない。ガンディが、印度人の貧乏を救濟するためには、手繰車（チャルカ）を復活普及せしむる以外に良法なしとして、所謂チャルカ運動を起したことは、かかる點から見て多くの意義を有するものである。即ちそれが印度農民の浪費せる時間を有利に費消せしむる點において、又手織機に依る粗布を纏ふ簡易生活に、哲學との新しき一致を見出さんとする點において、印度の如き自然及び社會狀態にある場合、特殊の意義を生ずるのである。

しかし印度と雖も、世界の一國として、世界の經濟的發展の大勢からは例外たり得ない。然らば印度は永久にチャルカの國として止まることは困難である。印度の經濟的發展は早晩何らかの形式において現在の分裂的要素を清算しなければならない。前述の如き種類の宗教的信念を有する印度人は彼等自身に依つて、新しき解決策を求むることを餘儀なくされつつある。印度人が今日の如き境遇に墮した罪の大半は印度人自身にある。その獨善主義的排他主義が彼等自身を弱めたのであつた。印度における分裂的要素が餘りにも強力であるが故に、終に一國民として活動し得るかどうかについてもかなりの疑問を抱かせる。これらの分裂的要素を打破して、印度全民衆を統一し、その經濟生活を高度に進めるためには、かなりに強大なる力を必要とする。それが何らかの獨裁的政治形態を採るに至るか。それらも亦大なる問題であらう。印

度の歴史を通じて、分裂狀態が一般的であつたことを考へれば、終にイギリスの羈絆を脱することが困難なのではないかといふ疑ひも抱かせる。又よし民族的獨立を獲得し得るとしても、今後未だ多くの時間と努力とを必要とする。あらゆる點において印度は過渡的狀態にある。

（昭和八年十二月）

日本と支那

——その關係史的考察

一

島國である日本が支那大陸の狀態に無關心であり得ないことは極めて自明の理である。それにも拘らず從來多くの日本人はこれを對岸の火災視してゐた。唇齒輔車の關係にあることは屢屢人の口に上つてゐたことは事實であるが、それらは單に觀念的に唱えられたに過ぎず、少しも具體的に意識してなされてゐなかつた。そのことは現代におけるわが支那研究の貧弱さに依つて證明出來よう。勿論よき支那研究が皆無だといふのではない。しかしこれを歐米諸國に關する研究に比較する時、著しく劣つてゐるといはざるを得ない。

明治以後、わが國は歐米資本主義制度を移植するに急であつた。同時に西洋文化の吸收に努めて、他を顧みなかつた。英文學、獨文學、佛文學、さてはロシア文學についてさへ多大の關心を以つて沒頭する多くの青年を有してゐた。これに反して東洋文化を研究せんとする優秀な青年は極めて寥々たるものである。自國の運命に最も密接な關係がある隣國について無知でありながら、遠國の文化を知ることに汲々たる有樣は甚だ奇怪ではあるが、事實であつた。蓋しその一つの理由は西洋文明の攝取を焦眉の急としたがためであつたらう。

わが國の文化が支那文化の影響に基づくこと大であることは、何人もこれを承認するに躊躇しない。初め支那の文化は朝鮮を經由して移植された。そしてその進歩せる先進國の文化はわが國の制度、思想、文藝から、日常生活にまで多大の影響を與へた。支那崇拜は「からころも」の尊重に及んだ。それにも拘らずそれを攝取して出來上つた日本文化は支那文化とはかなりの相違があつた。殊に民族精神の點においては異質的であるといつてもよいくらゐの相違があつた。その差異はわが國人が支那を崇拜してゐた時代には問題とならなかつた。異質的な點をむしろ大國の風として重んずる傾向さへあつた。然るにわが國が西洋文化を攝取し、異常な發展

をなしつつあつたのに對し、支那が舊態依然たるものがあり、しかも歐米諸國の植民地に化せんとする有樣であつたため、昔日の崇拜は化して輕蔑となつた。その異質的な特徴は一一輕侮の的となり、少しもこれに同情もなく、理解もなくなつてしまつた。殊に日清戰役後においてこの傾向は甚だしい。恐らく明治中期以後、大正昭和にかけての日本人ほど支那に同情がなく、理解の乏しい者はかつてなかつたであらう。卑近の例を採れば、漢文が教育制度上如何に取扱はれ、教師にも學生にも如何に無理解であつたかに依つても推測し得ることである。

その國の文化に同情もなく、理解もないところに、眞の國交は成立し得ない。這般の支那事變を勃發せしめた原因は、直接に、間接に、多くの理由を擧げることが出來るであらう。しかし根本において日本人が支那を理解せず、むしろ反動的に徒らに輕侮した理由によることも少なくないと思ふ。先づわれわれは支那を理解しなければならない。わが國の運命と密接に關係づけられてゐる支那を知る必要がある。われわれは最も支那に對して理解のなかつた時代に教育を受けた。「ちやんちやん坊主」といふやうな輕侮の言葉を不斷に耳にし口にした時代に育つた。「ちやんちやん坊主」が「東洋鬼」を生むことに不思議はない。われわれはさうした一

切の相互の無理解から離脱して、新しい東洋文化の設立に相提携する必要がある。

二

わが國に對する支那の影響が大であることは、單にその思想や制度の表面的な模倣だけに止まらず、民族的發展と常に相關聯してゐることにある。このことはわが國史を繙く者の直ちに氣がつく筈のものであつた。古い神功皇后の三韓征伐は暫く置くとしても、後の明治維新にも比すべき大化改新の事業とその大陸政策との關係は先づ注意さるべきである。

大化改新前において、朝鮮北部に勢力を得て來た高麗は漸次に南下して、新羅、百濟を從へ、わが任那の日本府を亡したのは繼體天皇の二十三年であつた。大伴金村の失敗以來、わが軍に不利であつた。後に聖德太子が御弟來目皇子を擊新羅將軍に任じ、出征の軍を興されんとしたが、皇子が筑前で薨去され、終に實現せずして止んだ。當時國內の事情はさらに兵を興すに適してゐなかつたのである。南朝鮮にわが地歩を占めて置くことは、支那との國交から見ても、非常に重要であり、又わが獨立を安固ならしむる上から見ても必要であつた。然るに他方國內

には豪族が勢力を張つて對立してゐた。蘇我・物部の對立の如きはその顯著なるものであつた。

かかる狀態は齊明天皇の時に至つて、益ゝ切迫して來た。隨を亡した新興唐の勢力は高麗を壓迫し、新羅と結んで百濟を亡した。皇太子中大兄皇子は援軍を出された。ここに計らずも南朝鮮の地に、日支兩軍の衝突を見た。不幸にしてわが軍が白村江の一戰に敗れるや、皇太子は直ちに兵を引擧げ、朝鮮は終にわが手から離れることになつた。それには多くの理由もあらうが、前にも指摘したやうに、先づ國家を統成し、國力を充實し、支那に匹敵する文化建設の必要があつたからである。即ち國內問題の方が重要であつたからである。故に皇太子は唐の南下に備へるために、對馬・壹岐の兩島、讃岐の屋島、大和の高安山などに築城した。又筑紫には特に太宰府を設置し、國防を嚴にすると共に、唐との國交調節に努力されたのである。

かくして唐の優秀な文化を攝取し、國內の統一を計つた。唐留學生の歸朝に依つて、新しい政治體制を整へ、先進國たる唐に對しては外交的にも、文化的にも、相讓らざる地歩を占めんと努力されたのであつた。この大化改新の礎石の上に樹てられたのが、奈良・平安のわが文化であつた。この事業はわが大陸發展政策から見れば、確かにそれは退守の計であつた。しかし

他面から見れば、それは民族的國家の樹立であつた。それが支那における統一國家たる唐文化の刺戟に依ることが大であつたことを思へば、大陸のわれ等に與へた影響の少なかざることを思はなければならない。そしてそれは退守であつたとはいへ、やがて勃興すべき發展への準備としての退守であつた。唯その後暫くは大陸から受ける脅威を感じなかつたがために、對外的發展はやや忘れられてゐたのである。

宇多天皇の寛平六年に菅原道眞が上表して遣唐使を廢止して以來、表面上日支間の交渉は絶えた。僅かに支那商船の來往するものがあるのみであつた。それは唐末期の大陸の狀態が混亂し、唐滅亡後、强力な政權が樹立されず、加ふるに契丹の侵入があつた。又所謂「通俗三國志」や「漢楚軍談」でわれわれには馴染の多い群雄割據の時代であつた。五代を終つて宋の天下となつたが、微力であり、常に叛亂が絶えなかつた。それでも北宋、南宋の時代には宋船のわが國に來航するもの漸く多く、又わが僧侶の入宋する者も亦少なくなかつた。北宋の支那全土を統一したのは、わが村上天皇の天德四年、平安朝文化の爛熟せる頃であつた。

宋の勢力も發展的でなく、平安朝政府も唯國内において權勢と戀愛との爭奪に急がしく、對

外的には極めて消極的であつたから、兩國の間には何ら問題も起らなかつた。しかし支那にあつて契丹その他の外寇があつたやうに、わが國にも外寇があつた。一條天皇の長保元年に高麗の賊の來寇があり、さらに後一條天皇の寛仁三年には女眞族で、當時契丹に屬してゐた刀伊人が對馬を侵し、壹岐を掠め、筑前に寇した事件があつた。この刀伊入寇は幸ひにしてこれを擊退し得たが、わが國が常に大陸における民族的移動の影響を受けることを示すものである。

三

かかる民族移動の最も大なる餘波は元寇の役であつた。この蒙古來襲に際しても、積極、消極の兩策が考へられたやうである。進んで討たんとする外征策と退いて守らんとする防備策とであつた。結局この時も退守政策が採用され、博多灣の沿岸に石築地を築造したのは有名な事實である。元寇のわが國に與へた影響は頗る大である。鎌倉幕府の運命や軍事組織に與へた影響は暫く置く。蒙古の大軍を二度まで退け得たことは、わが國民の自信を高め、大陸發展の精神を再起せしめるに與つて力があつた。しかしそれは戰後疲弊せる幕府の經營に俟つことは出

來ない。個個の連絡なき行動とならざるを得なかつた。即ち支那人の呼んで倭寇と稱するものになつたのである。元寇以來、瀬戸内海を中心として活動し始めた海賊衆は、南北朝時代に南朝に屬し大いに活躍した。序でながら海賊とはいふが、それは今日いふ意味とは少しく異なる。一種の海軍であり、又時に商人でもある。一度間違へば掠奪行爲もする。彼等がその志を得ずして、朝鮮の南海岸や支那沿岸に發達して行つたのが倭寇である。倭寇の活動については支那事變以來、新聞紙上などで盛んに紹介されたから、多くの人人の知るところであらう。

倭寇の發展はやがて足利末期におけるわが海外發展となり、そこに近世的商業發展の萠芽さへ現はれてゐたのである。勿論この現象は北條時代の末期に始まり、南北朝時代、足利時代終末に及ぶ永い期間に亙るものではあるが、そこに一つの脈絡を辿り得るところに多大の興味を覺へる。元寇の役に依つて目ざめたわが國民の海外發展熱が、漸次に高められ、國内における動亂兵亂にも拘らず、支那朝鮮はいふまでもなく、南洋・暹羅・安南の方面へも積極的に發展して行つた民族的力には驚くべきものがある。結局それは秀吉の大明征伐といふ積極的政策となつたともいへよう。天皇を奉じて渡海せんとする秀吉の大野心は終に實現し得なかつたが、

民族的發展の一表現としてこの一擧は意義がある。

四

文祿・慶長の役が秀吉の薨去と共に終り、大陸政策は一轉して消極的となつた。對外的活動より國内の統制を重要視した德川氏の政策は出來る限り對外交渉から生ずる煩雜混亂を避けようとした。その結果所謂鎖國と呼ばるる狀態になつたことは人のよく知れるところである。尤も島原の亂前後においても、積極的に切支丹の根源を絶つべしとして、外征策を主張する者がなくはなかつたが、結局消極政策が勝を占めたものであつた。又明が清のために亡ぼされんとして、援兵をわれに乞ふた時も、堀田正信のやうな出兵論者もあつたのではあるが、この時も又外國と事を構へることを喜ばず、消極策を固持した。

かくてここに二百數十年に亙る天下泰平の代が出現したのである。わが民族は既往に起つた大陸との交渉を忘れ去つたかの如き觀を呈するに至つた。又その間に大陸から受けた刺戟も極めて微々たるものであつた。もし强いてこの時代に似た狀態を過去に求むれば、遣唐使廢絶後

の平安朝末期がそれに近いであらう。その時もわが國人の私に渡宋することを禁じてゐた。朝鮮の通交を求むるのさへも拒絶したほどである。しかし間もなく對外關係は私貿易の發展から漸次に高められ、元寇の役が一大刺戟となつたことは前述の如くである。德川時代も明かに對外政策は消極的であり、貿易は極度に制限されてゐた。しかし幕府後半には密貿易が盛んになり、寶曆・明和以後は一層甚だしく、錢屋五兵衞、高田屋嘉兵衞のやうな種類の人物をかなりに生じてゐたやうである。從つて海外の知識が漸次に入り込むにつれて、再び民族的意識が覺醒し始めたのであつた。

幕末の刺戟は支那から得たものではなかつた。わが國民は支那を崇拜してゐた。支那から得た知識は常に權威（ナーソリナイ）をもつてゐた。その支那がイギリスに破れた。阿片戰爭はわが國民に一大刺戟を與へた。權威が動搖し出したのである。大陸における多くの變動に對して頗る敏感になると共に、多くの積極論と消極論とが現はれて來た。國防の不安が、戰器の發達と共に、昔日の比でないことが判明した。防備を嚴にするために一時開國すべしといふ論者も又遮二無二に打拂へといふ攘夷論者も何れも消極論者である。これに反して早くは本多利明のやうな、又後

には佐藤信淵のやうな海外植民發展の積極的大陸政策を主張する者もあつたのである。

五

しかしこの時も結局、中大兄皇子が大化政策の際に採られたやうに、先づ國內の完全な統制が第一著手として必要であつたのである。明治維新はそのために行なはれ、西洋の制度や文化の模倣的移植はそのために必要であつたのである。しかし再び覺醒した民族的意識が極めて熾烈であつたことは、明治初年に活動した、われわれの先輩の行動がこれを證明する。各自の意見にはかなりに懸隔があつた。しかし國を愛する點においては何れも變りがなかつた。兎に角わが國を歐米列强に伍し得るだけのものに育て上げなければならないといふ强い信念を有してゐた。そこにこれらの人人の行動が國民全體に作（はたら）きかける强い力を有してゐたのである。

明治以後、大陸との關係は昔日の比ではない。昔は越え難かつた日本海の荒浪も今は問題ではない。大陸に起つた出來事は最早對岸の火災視出來ない狀態に置かれてしまつた。あらゆる點において消極策を採用することは困難になつた。征韓論を抑へても、日淸戰爭は避け得なか

つた。「騎虎の勢、亦之を如何ともする能はざる」ものがあつた。民族的發展を廢棄すれば兎に角、朝鮮に他國の勢力の進出して來ることは、神功皇后時代の昔でさへ傍觀することが出來なかつた。況んや明治以後距離の著しく短縮さるるに及んでは、到底退守の策を墨守することは不可能であつた。

かくして日清戰戰爭は起り、日露戰爭も避け得なかつた。そして結局多大の生命を犧牲にした後、明治四十三年の日韓合邦に依つて一段落を告げたやうに見えた。又當時においては一段落を告げたのであつた。かくの如き事業を成就し得たのは、西洋文化の利器を十分に攝取し得たからであると一般に考へた。そして西洋文明を十分に利用し得ず歐米列强の半植民地となつてゆく支那を輕視した。時には敢て歐米諸國の採用した狡猾手段を模倣するの愚さへ演じた。

今や日支關係は新しき出發點に立つべき段階に到達した。昔の支那は遠い國であつた。今は文字通りの一葦帶水である。そこに抗日を目標とする政權を許容して置くことは到底忍び得ざることである。しかしかかる政權を生ぜしめた原因については、確かに熟慮三省する必要があらう。上述せる如く歷史上から見ても、日支兩國の關係は極めて密接である。殊にわが國にあ

つては、常に支那からの刺戟に依つて、——その刺戟の善惡を問はず——啓發されて來たのである。われわれは支那を理解し、これと相携へて新しき東亞の天地を建設すべき責務がある。

（昭和十四年一月）

支那に關する斷章

かなり以前から、支那事變の始まるずつと前から支那について研究したい――否しなければならないと思ひながら、それにあてるだけの時間の餘裕がなく、唯遺憾に思つてゐるばかりであつた。徳川時代の經濟思想を研究してゐる間でも、絶えずこのことが氣になつてゐたのであるが、支那事變以後、急に支那に關する研究が旺んになり、これに關する出版物が多くなつたことは、支那研究の上からいへば大變結構なことではある。しかし中には全く時勢の波に乘つて、急に東亞とか支那とか銘を打つた際物も少なくない。後れ馳せながらこの暑中休暇を利用して、支那關係の書籍を濫讀し始めた。といつても私のことだから現代の目前の事實に關する

ものではなく、むかしの支那を標準としてゐるのであるが、それらの讀書の際に思ひついたことを筆の赴くままに少しばかり書いて見ようと思ふ。何を書くのか自分にもはつきりしないが、書いてゐるうちに何か纏まるかも知れない。字義通りの意味での隨筆である。讀者はそのつもりで讀んで戴きたい。

× × ×

西洋人が支那は謎の國だといひ出してから、支那はむかしから解らぬ國となつてゐる。しかし謎なら解らぬ筈もあるまい。自分達の考へと違つてゐたり、違つた物の見方をすると直ちに解らぬものとするのは不當である。自分達の物の見方だけ正しくて、他の見方は間違ひだと獨斷する人間が世間には隨分多い。金錢だけを目當にして生きて來たやうな人間は、金錢に執着をもたぬ人間を理解し得ない。假令金錢はいらぬといつても、それは表面だけで實際はさうではないのだらうなどと、自分達の標準で勝手に推測し、徒らに世の中を煩雜化するものである。支那が謎の國だといふが、それは西洋式の合理主義では割り切れない何ものかをもつてゐるか

らであらう。支那人にとつて見れば、支那は謎でも何でもなく、彼等自身の實體としての生活體である。それを謎だなどいはれるのは迷惑な話でもあるし、又人生は謎だといふのと同義語(シノニム)である。

× ×

支那を謎と見るから眠れる獅子ともなり、豚の死骸ともなる。何れも解らぬ正體を己が勝手に描いて解いたつもりでゐるのである。佐藤信淵は次ぎのやうにいふ。

「彼大清國の強大にして密邇なる、萬一狡猾の王の出ることありて兼併の志を興さば、其の患の大なることただに魯西亞の比すべき者ならんや、故に此大清國は卑辭厚聘を費しても、與國となして交易を通じ、以て互市の大利を收めんこと、今の世の要務なり。」

イギリスの哲學者バァトランド・ラッセルは青年支那に期待して、次ぎの如く述べてゐる。

「もし支那の改革者が支那をして自衛の途を開かしめ、その近代化を防止することが出來たなら、そしてこれ以上外國の侵略を防止し得たなら、又もし彼等が故國を安全ならしめて、列

強に依つて押しつけられた物質的活動から方向を一轉し、彼等の自由を科學と藝術とよりよき經濟制度の開發とに貢獻せしめたならば、――その時こそ支那は世界におけるその最も適せる役割を演ずることになり、又全體として人類にそれが最も緊要とさるる際に全く新しい希望を與へるであらう。」

歴史は支那にこれらの前提條件を許さなかつた。從つてその豫言が當つてゐるかどうか誰もそれを知ることは出來ない。支那は列强に依つて物質的文明を强要されたかも知れないが、それにも拘らず支那は支那自身の途を進みつつあるといつてよからう。

× ×

支那に來た耶蘇會の宣教師達がヨォロッパにおける支那學の礎石を置いたのである。メンドオサやセメドオの著作が與へた學問的影響は少なくなかつたらう。マルチニの支那地圖の刊行は特に支那學の進歩に貢獻するところ大であつたといふ。

マルチニ(一六一四―六一)が支那から歸つて來ることになつたのは宗教上の問題が起つた

からである。耶蘇會士達は儒教の教義とは大體において妥協することが出來た。彼等は孔子の道德的教義とキリスト教の倫理思想とは一致し得るものと見た。しかし孝を以つて道德の基本となし、祖先崇拜を儀禮とする支那思想は唯一神の崇拜を以つて中心とするキリスト教と相容れないものをもつてゐた。しかしもし祖先崇拜を否定せんか、それは從來の社會的秩序を亂すものといふ批難を免れないであらう。そこでここに外國宣教師達の間に二派を生じた。一つは耶蘇會士の一派で支那人キリスト教徒の祖先崇拜を認め、唯死後は偶像的なものではなく、精神的なものであると說教せんとした。他の一派は頑强にこれに反對し、論爭は第十七世紀から第十八世紀の前半まで續いでゐたのである。マルチニはこの論爭に關聯して一六五一年に歸歐したのであつたが、むしろ前記の地圖刊行の方が重要であつた。

彼がアムステルダムで地圖の刊行に夢中になつてゐた時、アラビヤ語の教授で、後にライデン大學の數學の教授になつたゴリュス（一五九六―一六六七年）といふ者がゐた。彼は支那語の知識はなかつたが、支那の書籍を相當集めてゐた。ゴリュスはマルチニが支那から歸つたと聞いて、しきりに逢ひたがつてゐた。ライデンではほんの僅かの時間面會しただけであつたが、

マルチニがロォマに例の問題で出かける直前にアントワァプで幾度か逢ふことが出來た。この會見でこの有能なアラビア學者は支那の年代記に興味を持ち、古くからカテェと呼ばれてゐる國が支那のことであることを、中世のペルシャの年代記と對照して實證したのであつた。彼は又マルチニから支那の書籍や原稿をもらつたが、ライデンに歸つてから、これらを材料としてマルチニの支那地圖に附錄を書いた。そしてその文章の中に支那文字を挿入した。これがオランダにおいて漢字の印刷された最初であるといふが、同時にヨォロッパにおける最初のものであらう。

× × ×

耶蘇會士に依つて紹介された支那、殊に支那思想がヨォロッパの社會狀態の變革期に遭遇しつつあつた思想家達に影響を與へたことはむしろ當然であつた。殊にそれらの支那紹介の文章がその文明を賞讃する精神に滿ちてゐたから、現存するすべてのヨォロッパの制度に極端に批判的であつた第十八世紀のフランス哲學者に强い影響を與へたのであつた。

重農學派のケネェが支那思想の影響を受けたことは、經濟學史上有名な話である。ケネェが若くしてパリに出て、哲學殊にマルブランシュの哲學に興味をもつた。マルブランシュは『基督哲學者と支那哲學者との對話』の著者であり、支那に關する知識を多くもつてゐた。ケネェは彼を通じて支那思想の影響を受けたといふ。又支那思想は第十八世紀フランス倫理思想に享樂主義的傳統を復活させたともいふ。

支那思想の影響を受けたのはフランスの哲學者ばかりではない。イギリスの思想家も耶蘇會士の著書や旅行記に依つて支那を知り、その影響を受けた。サア・ウィリアム・テムプル、マシュ・ティンダル、ジョセフ・アディソン、アレクサンダァ・ポォプ、ダニエル・デフォなどが擧げられる。シャフツベリィが享樂主義になつたのも、支那思想の影響だといひ、それが又間接にケネェに影響したと論ずる者もある。

ヨォロッパ人とは違つた原則に立つ社會秩序が彼等の文明よりもよき文明を生じたとすれば、彼等がその原則を知らんと欲したことは尤もである。しかしそれは支那人及びその生活を正しく理解して、然る後に生じたものではなく、單に耶蘇會士の主觀的評價と孔子や孟子、又は老

子のやうな古典的教義の研究とに依つて形ち作られたものに過ぎない。しかしこの古い時代における支那文明に對する評價が今日なほヨォロッパ人の支那觀の根柢に殘存してゐないとはいへない。支那は古い文明を有する、尊ぶべき文化國であるといふ觀念が現實の支那を正當に理解することを困難ならしめ、これがために日本の如き立場にある國が不利益を蒙ることはあり得る。

× × ×

日本人は西洋人が支那に對して一知半解であることを批難する資格がない。日本は誰も知るやうに、昔から支那に接觸し、支那の文化を輸入してゐたにも拘らず、支那についての知識は極めて乏しい。成程支那の古典に對する知識は支那人以上であるかも知れない。又その研究も彼以上のものがあるかも知れない。支那人と同じやうな詩形を以つてある種の感情を表現さへしてゐる。文學的作品のやうな感情の表現を外國語に依つてその約束に拘束されつつ發表するといふことは、兩者の間にかなりの密接な共通の情緒がなければ出來ない筈である。しかし日

本人が漢詩に依つて自分の感慨を表現する場合には、漢詩といふ特別の形式から生ずるある特殊の調子を喜ぶのであつて、本當の意味で自己の感情を現はす最も適當な形式ではない。だから賴山陽の詩のやうな日本化された、日本の俗言さへ取入れた漢詩が一般の日本人には喜ばれるのである。そして日本式の讀み方でこれを朗詠するのであつて、形態こそ似たれ、その本質は異なつた文學的作品である。

日本人は支那思想の影響を多分に受けてゐながら、動もすれば漢詩の場合と同樣に日本化してしまつてゐる。支那の古典を通じて理想化された支那を見てゐたのが、德川時代の日本人である。その點において第十七・八世紀のヨォロッパの思想家と大差なく、自分の勝手な幻想のうちに支那を描いて尊重してゐたのである。日淸戰爭後の日本人は西洋人の眼を通じて支那を見てゐる。支那におけるあらゆる現實を直接に把握しようとしない。このことは明治以後今日に至るまでの支那に關する日本人の學問的業績が如何に貧しいものであつたかに依つて窺はれる。われわれが少しく支那のことを知らんと欲すれば、常に西洋人の研究にこれを探らなければならないといふことは甚だ殘念なことである。

× × ×

日本と支那とがかなり異質的なものを多くもつてゐるにも拘らず、從來動もすればそれを無視して一致協同を計らんとする嫌ひがあつた。しかしそれは非科學的であり、無理である。お互に異質的なものを認めないために、思ひも依らぬ誤解が相互に生ずることが多かつた。一口に支那といつても、北支と南支とでは、これを同一視することは出來ない。漢字を使用する點において、日本人も支那人も同じであるが、言語の性質が全く異なるやうに、北支と南支とでは同じでないといつてもよからう。

異質的なものを一つに結合せんとする場合、單に異質的なものを排除するのであつてはならぬ。異質的なものを包含して、より高き結合に進まなければいけない。あるアメリカ人がこんなことをいつてゐる。

「日本の支那に對する政策の一つの効果は、支那人に意識的な國民精神を發生せしめたことである。この精神が如何に强くなつたかは、彼等が未だかつて經驗しなかつたやうな、いはば

國民主義的感情に基づく一種の政治的結合を生ぜしめたのを以つてしても解る。」

この言は一つは以前に日本が西歐的な侵略主義的政策を模倣した結果として、そして又一つに支那を西歐諸國と同一視する見方として、典型的な判斷である。その意味では歐米人の支那觀であり、日本人觀である。しかし日本にも、支那にも、西洋人の眼を通じてのみ現象を判斷する者があるから、この種の觀察がかなり有力に行なはれてゐるのではないかと思ふ。日本が支那を征服するのではなく、相互にその民族性を理解し、異質的なものを包擁する新體制を建設することが、その種の判斷を一掃する唯一の途であらう。それはイギリスを模倣するのではなく、又ドイツの眞似をするのであつてもいけない。日本が自ら創生するものでなければならぬ。そして始めて東洋における指導的國家の面目を立て得るのである。

（昭和十五年九月）

III

古代文化

古代の文化に關する叙述を讀んで見ると、先づ二つの事實に氣がつくだらう。一つはその事業の馬鹿げて大基模なことであり、他の一つは人命の頗る輕視されてゐたことである。

エヂプトのピラミッドや支那の萬里の長城はさて置き、古代ロオマやギリシァ、乃至はそれ以前の諸都市の文化設備、たとへば劇場とか公の集會所とか宴會の場所とかいふやうなものが、非常に規模が廣大であり組織も大きい。殊に當時においては、外敵の侵入が何時あるかわからず、多くの都市がむしろ交通不便の場所に建設されたにしては、實に驚くべき大事業であるといはなければならない。

今日遺つてゐるロオマやギリシァの廢墟にある圓柱や長押や切妻等から想像して見ると、その建物の藝術的なること、また壯麗なること、中世並びに近世の比ではない。況んや現代の鐵筋コンクリィトのアメリカ式建築物とは、美人と醜婦との差より甚だしい。どうしてかういふ結構雄大なる工事が古代において可能であつたか。私達現代人の藝術的技術が古代人のそれよりも劣等であるとは考へられない。唯かくの如き工事をなすのに社會的條件が不適當なのである。即ち第一に現代人はたとへ表面的であつても人命を尊重する。第二に悠久なる閑事業をなすのには現代人は餘りに多忙過ぎる。第三に營利的觀念が餘りに發達し過ぎてゐる。まだまだ多くの原因を擧げることが出來るであらうが、一言にしていへば奴隷經濟と資本經濟との差異である。

古代においても奴隷使用の發達する以前までは餘り見るべき營造物はなかつた。然るに多數の奴隷を使用して盛んに經營を行なふやうになつてからは俄に宮殿、神殿、城塞、都市その他の工事が大規模のものとなつたのである。勿論かくの如き社會狀態は假令その所產の文化が優秀なものであつたとしても好ましいものではない。唯最進科學の進歩に伴つて私達の生活は一

般に著しく便利になり、また廣汎なものになつた。換言すれば昔より地球が狹くなつた。いろいろの出來事が直ちに耳に入る。その外多くの刺戟が絶えず襲つて來る。この點において新聞紙の如きは善惡ともに影響の大なるものである。その結果一般に人類の生活が神經衰弱的にならざるを得ない。

現代の資本主義的社會生活の一つの缺陷は確に神經衰弱促進の弊害であらう。この點において私達は古代人に劣るものがある。實際古代文化を調べれば調べるほど、その動力利用といふ點においてこそ現代に劣つてはゐるが、生活そのものについて果たして現代がどれだけ古代より進歩してゐるか疑はしくなる。

勿論人間は兎もすれば懐古的になり、過去を感傷的に讃美しがちのものである。しかし近世の文明が餘りに機械化され、徒らに形式的にのみ煩雜になり、人類生活の本道を逸してゐるかの如く考へられ、もし出來るならば古代文化における奴隷による動力を現代の諸動力と代へ、古代の優れた點を採用しもつと悠々として住みよい世界を實現したいと思ふやうになる。現在のやうに人人がそれぞれに問題を作り、互に喧騒に議論し合ふのは、ことの善惡は兎も角も住

みよい世界であるとはいへないだらう。

だがこの點は程度の差こそあれ、むかしも今も同じことかも知れない。して見ると人世は悲觀哲學者のいふが如く永久苦の世界であるかも知れず、また樣々に苦しみあつて却つて生き甲斐あるのかも知れない。しかしそれにしても現在生きてゐるわれわれが、現在及び將來の世界を出來るだけ住みよくしようと心掛けるのは當然であり、また子孫に對する義務でもあらう。

（大正十五年八月）

チュリップの投機

人間のする行爲はそれが對社會的である時は多少とも投機的性質を帶びてゐる。ある事業が成功するのも失敗するのも——勿論その人達の努力や先見に依ること甚だ大ではあるが——一種のやまである。人間が完全無缺であるならいざ知らず、むしろ萬能ならざるが、人間の性であるならば、投機的傾向があるのは萬已むを得ないことであらう。從つてすべてのものが投機の對象となり得る。そして一度投機の對象物となれば、物そのものの本質を離れて投機のための投機となつてゆく。その昔といつても第十七世紀の話である。和蘭が歐洲における經濟的全盛の狀態にあつた頃、殆ど和蘭全國を擧げて上下共にチュリップの投機的取引に熱中したこと

がある。

アムステルダムの近くにハァアレムといふ所がある。そこの一商人は唯友人に誇らんがために一つの球根を得んとして、その資產の半を提供したといふことである。その頃次ぎのやうな面白い話があつた。ある富有な商人がある時レバント地方から莫大な商品を購求した。ある朝一人の水夫がそれらの商品の無事著荷の旨を報じて來た。そこでその水夫にうまい赤鯡の朝飯を御馳走してやつたが、水夫がフト卓上を見ると大好物の玉葱のやうな野菜が置いてある。これは鯡の添物には持つて來いであると思つて、そつと著服して、ゆつくり船で賞翫せんものと港に歸つて行つた。水夫が歸ると間も無く金持の家では大騷動が起つた。何しろ、少なくとも三千フロリンもする大事なチュリップの球根が紛失したのであるから上を下への騷ぎである。その時思ひ出したのは使に來たさつきの水夫である。早速港に追馳けて行つて見ると、無邪氣な水夫は埠場の卷綱の上に座を占めて日向ぼつこをしながら悠々と朝飯を——恐らくその船の全員の一ケ年の食料にも價ひするやうな朝飯を翫味してゐたといふことである。

これは昔の話である。そして昔昔の話をすることは今の時世には適せぬことのやうである。

もつと直接現在の經濟に關する有益なことを書きたいことは山山であるが、生憎くと持ち合せがない。致し方がないから二百年も前の、しかも他國の話を持ち出して見たのである。

しかし考へて見るとこれから後何百年か經つて今の世界を眺めるとすると、このチュリップの話に似たことが案外われわれの目の前にぶら下つてゐるのかも知れない。今日の經濟界に通曉し敏腕家と稱せられ才子と賞へらるる人達は、案外チュリップの球根を追馳けて連日齷齪してゐるのかも知れない。前に述べた通り投機的性質は殆どすべてに存してゐるといつてもよいのであるから、一片の紙も十分にその對象となり得る。誰が迂遠であり、誰が賢明であるか渦卷の中にゐては解らない。唯時時昔を振りかへつて見ると大いに反省の資料となる。迂遠なりと思ふ者案外迂遠ならず、賢明なりと思ふ者案外賢明ならず、迂遠なる歴史研究者の言論も亦時には聞かれるがよい。と望まるるに任せて敢て自家の辯護をする。

（大正十五年）

インフレェション史話

近頃インフレェションといふ言葉が一般の人達の間にも盛んに口にされるやうになり、殊に悪性インフレと稱し、大變おそろしいものと考へられてゐるやうですが、インフレェションにもいろいろあつて一概にはいへません。元來インフレェションといふものは通貨が膨脹し、そのために貨幣の購買力が減退し、物價が騰貴する現象をいふのですが、今夕は難しい議論は止めて、二三歴史に現はれた違つたインフレェションの實際の例についてお話し致しませう。

今申上げたやうにインフレェションは貨幣に關係あるものですから、貨幣經濟論が相當發達して來なければ起りません。ヨォロッパで貨幣經濟の發達して來たのは中世の中頃以後のこと

ですが、特にインフレェション的現象が顯著に現はれましたのは第十六世紀においてスペインに起つたものです。御存じの通りコロンバスがアメリカを發見しましたが、このコロンバスを援助したのがスペインで、從つてスペインは新大陸を占有し、新大陸から金銀を採掘してどんどん本國に輸入しました。「銀船隊」と呼ばれる王室所屬の船隊を以つて毎年巨額の金銀を獲らしたのであります。一體どのくらゐ金銀を輸入したか正確なことは勿論解りませんが、一五〇三年から一六六〇年までに、金が一億八千百三十三萬三千百八十グラム、銀百六十八億八千六百八十一萬五千三百三グラム。これはあちらの學者がスペインの王室の記錄に依つて計算したものでありますが、實際輸入された金銀はこれだけではありません。密輸入されたのもあり、又イギリスやオランダがスペインの眼を盜んで掠奪して來たものもあり、全體では大變な數字になります。

こんなに金銀が流入し、それをもととして貨幣を鑄造し流通させたのですから、勿論物價が騰貴して、景氣がよくなりました。スペインの產業もそのために少しは發展しましたが、御存じの如くスペインは農業・牧畜を主とする國であり、大部分の商品を外國から購入するより外

ありません。殊にインフレェションで賃金も高くなりましたから、勢ひ品物の生產費が外國より高くつく。從つてスペインは新大陸から金銀をもつて來ては安い外國の商品を輸入した。金銀はスペインを通じて、ヨォロッパ諸國に流出しました。

他のヨォロッパ諸國も金銀は欲しい。しかし新大陸はスペインに獨占されてゐますから、そこから持つて來るわけにはいかない。强ひて取らんとすれば力づくでいくより外にない。しかしスペインは當時「無敵艦隊」と呼ばれるヨォロッパ第一の海軍力を作り上げてゐた。そこでスペインの金銀を取るためには貿易に據るより致し方がないので、商品を盛んに製造して賣り始めた。當時オランダの領分であつたアントワァプは、その商業の中心地として隆盛を極めた。何しろ金銀はどんどんはいつて來るのですから、今までのやうな手工業的生產方法では間に合はない。職人を大勢一つ所に集めて生產するマニュファクチュアといふやうな組織や、家內工業と呼ばれる問屋を中心とする副業生產の新しい組織が發展しました。そのおかげで西ヨォロッパの生產組織は急激に發展し、やがて後の經濟的發展の基礎を作りましたが、肝腎のスペインは金銀をどんどん遣つてしまひましたから、これはいけないと氣がついた時にはもうおそく、

國内の產業は他の國國に比較してずつと後れてしまつたのです。

この金銀インフレェションはも一つ大きな効果を擧げてゐます。それは貨幣制度の改革が出來たことであります。それまで貨幣は國王は勿論、大司敎、諸侯のある者、又都市などでも作ることが出來たのであります。ですからいろいろな通貨が出來、よいものもあれば惡いものもある。實に亂雜を極めてゐたのであります。それが金銀が澤山にはいつて來ましたから、根本的に立て直すことが出來たのであります。そしてそこに近世的貨幣制度が確立されたのである。これはインフレェションがよい影響を生じた例でありますが、次ぎにこれと反對に大變わるい結果を生じた實例をお話し致しませう。

第一次世界大戰に御存じの如くドイツは敗北し、その賠償として巨額の支拂ひを要求されました。一九二一年のパリ會議において、實に二千二百六十億金マルクといふ莫大な金額を課せられたのであります。勿論ドイツにこんな澤山の金があるわけはありません。國民が生產に從事し、出來た品物で支拂ふより外にありません。しかし戰後疲弊し切つた、ドイツは如何に努力しても急に返濟出來るわけはありません。國家の經費は多くなり、不換紙幣の發行が段々と

多くなりました。殊に賠償金不拂ひからフランスは一九二三年一月にルウル地方を占領しました。御承知のやうにルウル地方はドイツにとつて最も重要な重工業地帶であります。ドイツはフランスの申出に全面的に屈服せざるを得なかつたのであります。この政治的、外交的失敗は政府の信用を全く失はせ、その年の六月頃からドイツの紙幣マルクは急激に暴落を始めました。

丁度私はその頃ベルリンに居りました。六月頃はまだ電車賃が三千マルクぐらゐでした。高い電車賃ですが、未だ計算し得ないやうな數字ではありません。七月、八月、九月と時のたつにつれて、マルクは加速度をもつて下つていきました。紙幣に對する信用がなくなつたため、人は紙幣を喜ばず、はいると直ぐ遣ひますから、一層紙幣の回轉が速になり、その上政府が物價の騰貴するにつれて、紙幣の發行を餘儀なくされ、どんどん印刷して出しましたから、紙幣の價値は急速に下落しました。最早百萬マルク以下は零にも等しくなりましたから、勘定する時にはそれを取去つてミリオネン・マルクの頭文字をとつてMMを單位としました。そして百萬の百萬倍、ビリオネンといふやうなお札さへ出來、しまひにはお札の印刷が間に合はないので、古い札の上に新しい數字を捺した札さへ出ました。

私達は外國人ですから、外國の紙幣を持つてゐます。しかし外國紙幣を使用することは禁ぜられてゐますから、毎日これをマルク紙幣に兩替しなければなりません。兩替したらその紙幣をその日のうちに遣はなければ大變に損をします。翌日になるとその價値は半分になつてしまひます。しかし買ひたくとも物がありません。商店の飾窓などにも殆ど何もならんでゐません。百貨店の如きも一日に四時間ぐらゐより營業しません。あまり物を賣れば損ですから、その日に必要な限度で賣ります。

外國人のわれわれは不愉快だくらゐで濟みますが、その國の人にとつて、その生活は實に慘めなものになります。勿論中には物と通貨とを巧みに操つて大變なもの持になつたスチンネスのやうな人もありますが、大部分の民衆は、その日の生活にも事を缺き、勢ひ人間も大變卑しくなります。所謂惡性インフレェションと呼ばれる所以で、その經濟生活に及ぼす惡影響は甚大なるものがあるといはねばなりません。この種のインフレェションは生産を刺戟せず、却つて萎縮させることになります。

最後に日本のことについて一つお話し致しませう。日本で貨幣經濟が起り始めたのは足利末

期ですが、その一般化されたのは大體德川時代と見てよろしい。德川幕府の財政はすでに元祿時代に窮乏を告げてゐたので、時の勘定奉行荻原重秀の獻策を容れて惡幣を鑄造しました。つまり慶長の時に定めた金銀の品質を劣惡化して、その純金の含量をほぼ半分にし、五兩の慶長判で十兩の元祿判を作つたのであります。そして品質はわるくなつても十兩は十兩として撰り嫌ひなく通用すべしと命じたのであります。しかし實際にはさういきません。荻生徂徠などは金銀を金付石に試してよいのわるいのといふのは兩替屋のやうな町人のすることだとけなしてゐますが、誰でも惡い品よりよい品の方がよい。紙幣の五十錢より銀貨の五十錢の方がよい。況んや、金の實質的價値が慶長判の方がずつとよいのですから、よい貨幣がなかなか出て來ない。幕府がやつ氣になつて嚴しく慶長判の取立てをやつたのですが出て來ない。從つて實際の數量は倍にはならなかつた。通貨の數はさう增加しなかつたかも知れませんが、物價は高くなつた。それは慶長判のつもりで値段をつけて置いて元祿判で拂はれては損をしますから、價格を始めから元祿判でつけて置くからです。

その上幕府がこの貨幣改鑄で得た利益を以つていろいろなことをしてゐます。丁度五代綱吉

の時ですが、多くの造營事業をやつてゐます。先年の大震火災で燒失した湯島の聖堂――尤もその建物は一度燒けて寛政の時のものでしたが、この元祿時代に創設されたものです。かうした造營事業でお金が民間にばらまかれましたから、所謂成金が出ました。御存じの紀國屋文左衞門や奈良屋茂左衞門がそれであります。これも矢張り一種のインフレェションの產物であります。

人間の心理といふのは理窟通りにいかぬもので、例へば物價が倍になつた時、百圓の月給取りが五十圓增俸されて百五十圓になつても實際は減俸されたと同じことになりますが、矢張り五十圓增した心持になり、氣が大きくなつて、金遣ひが荒くなります。元祿判で貨幣の品質は大變わるくはなつたが金廻りはよくなり、景氣がよくなつた。紀文や奈良茂のやうな成金が惜し氣もなく金を遣ふから、貨幣の廻轉度數も早くなる。かうした狀態からそこに華やかな元祿文化が生み出され、一般の生活も著しく向上してゐます。

しかし幕府はどうであつたか。幕府の財政はそれで一時は凌ぐことが出來ましたが、根本から救濟することは出來ませんでした。その上わるいことは信用を失ひました。正德・享保に一

時慶長の昔に返したことはありましたが、又直ぐ元文になつて惡幣を出さなければならなくなり、その後ずつと幕末に至るまで段々貨幣の品質を惡くし、終に瓦解するに至つたのであります。未だこの外にも歷史上に現はれたインフレェションは澤山ありますが、以上の三つの場合を見ても、インフレェションそのものは必ずしも恐れるに足りません。唯惡性インフレに陷ると、前述したドイツのやうな恐るべき結果を生じます。どうして惡性インフレになるか。金銀を通貨の基礎とする場合はよく、紙幣を基礎とする場合はわるいかと申しますと、必ずしもさうはいへない。勿論金銀の場合はいくら低落しても、金銀の實質だけのものは殘る。不換紙幣の場合は全く一片の紙となり、鼻紙とするにも足りない。しかし紙幣でも十分信用が維持されてゐればよいのであります。

昔の人が政治に缺くべからざる三條件として、食足り、兵足り、民これを信ずといつてゐます。つまり第一に必要なことは人民に十分食を與へることである。民をしてひもじい思ひをさせるのは最もよくない。第二兵を强くすること、軍備の充實である。しかしそれよりも、もつともつと重要なことは政府を信用せしむることであるといふのであります。信用なくしてよい

政治は行なはれません。貨幣の場合も同様であります。人民が貨幣を信用しなくなり、貨幣より物を欲しがるやうになれば、それは悪性インフレの始まりであります。貨幣を信用してゐれば、これを貯蓄もするし、又得ようとして働きもしますから、生産も増加し、通貨と物資の調節も可能であります。私はこの信用を失つたために生ずる悪性インフレが國民の經濟生活に及ぼす悪影響を頗る恐れるものであります。特に爲政者の愼重な態度を希望して止みません。

（昭和十五年八月）

V

社會組織の變革

ある一國の社會組織に何らかの變革が惹起されるのには、二種の作用がある。一つはその國の內部における現社會組織の成熟から必然的に——自然的必然性のみを意味するのではない——發生するものであり、他の一つは外部からの影響に依つて惹起されるものである。勿論各國間の相互の交渉を全然皆無にすることは——假令鎖國のやうな場合でも——不可能に屬するから、全然外部からの影響が皆無であるといふことは出來ない。しかしその國民自體の內部の成長から必然的に社會組織にある變化を齎らす時には、その變革は比較的に順當であり、次いで來たる社會組織が一般に受納され、消化される。これに反してもし內部における成熟が未だ十

分ならざる中に外部からの影響に依つて急激に社會組織に變革を生ずる時には、所謂早熟であつて、その國民の生活は甚だしく不調和に陷り、かなり長い間均衡を得られず、生活の矛盾に苦しむ。又多くの場合その反動が甚だしい。さらに內部において新しい社會組織に對する豫備階梯が殆ど成熟してゐなかつたやうな國が、外部からの影響に依つてのみ、何らかの改革が行なはるる場合には、その新社會組織はその國民に依つて全く受け容れ得ぬものとなる。即ち全く消化されずに、外界の勢力、又はその國の支配者の勢力に依つて模倣さるるに止まる。全般として國民は新社會組織に對し、永い間無關心である。その國民生活は容易にその新しい社會組織に融和し得ないで、古き社會組織に固執する。

社會組織の變化はその社會の經濟組織の變化に依つて導かれる。しかし人類はその經濟組織が完全に新しい形式に遷移しない以前に、漸次に新經濟組織に適應せんとする意識的行動を起す。しかしその初期においては多くの場合古い社會組織を基準とする社會目的が標準となるからして、新しい運動を阻止せんとする傾向が强い。それらは明白な形式としては種々なる法制となつて現はれるが、むしろそれらの法制はそれらの背後に存し、それらの逆行的法制を有力

ならしむるところの一般の保守的精神の反映である。然るにそれらの法制は舊經濟組織の統制に役立つたものに過ぎないから、多くの場合新經濟組織を制御することは出來ない。從つてそれらは假令如何なる努力を以つてするも結局支持し得なくなる。自然に消滅せざるを得ない。これに反して新しい傾向はその運動を是認する理論を攝取して、漸次に體系づけられ、新しい社會目的を形成する。この新しい理論に基づく社會目的は新しい法制又は政策を構成する。そしてそれらの法律は新經濟組織の發達を促進する。かく相互に作用及び反作用して一つの社會形態を完成するに至る。

かくの如き發展が一國の內部に惹起さるる場合には極めて徐ゝたるものである。從つてこれを表面的に觀察する場合には、新組織の外部に表現さるるに至るまでは甚だ平靜なるが如く思はれる。殊に精神的方面においては、個人的には例外が存するが、全般としては保守的傾向が强く、經濟組織が一變された後においても依然として舊指導觀念に基づくことが少なくない。しかし經濟組織がその國の內部的要求に基づいて必然的に變更される場合には、その國民の指導觀念たる社會目的と相互作用をなし、漸次に推移する。然るに外部的影響に依つて變化を要

求された場合、殊に社會組織、又はその基礎をなす經濟組織に急激な變化を與へられた時には、その社會目的との間に著しい矛盾を生じ、從つてその經濟組織の發展も甚だしく變態的にならざるを得ない。

封建制度が破壞されて、所謂資本主義制度が樹立さるるに至つたのは、封建社會治下における貨幣經濟の發展が舊制度の維持を困難ならしめたことに據るが、それと共に封建社會を成立せしめた勢力がその制度自體に存する矛盾——統治關係と經濟組織との間に存する矛盾——に依つて、新勢力を勃興せしめ、それらの新勢力は意識的又は無意識的にその社會目的を變化せしむる。かくして新勢力階級の自覺に依つて社會組織の變化が成就される。即ち貨幣經濟の發展は當然商人階級の擡頭となるべきである。換言すれば商業資本の優勢が漸次に舊統治關係の中に喰込み、これを內部から變更して、商人階級をして新しい支配階級としての自信と自覺とを獲得せしむる。かくしてそこに初期資本主義制度を樹立させるに至る。しかしこれはその國の內部において十分に成熟した時に限る。もしその成熟が未だ十分ならざる場合には違つた現象を見る。例へばわが國における場合の如きである。德川時代を通じてわが國商人階級の發展

は目覺ましいものである。次第に當時の統治關係の中に勢力を得てゐた。しかし未だ彼等は新經濟制度を遂行するに足る十分の勇氣と自覺とを缺いてゐた。換言すれば彼等は依然として封建的觀念の下にその上から下への統治に甘んじてゐた。だがその統治がすでに如何に不安定なものになりつつあつたかは幕末以前に現はれた奢侈禁止令、その他の多くの現象に依つて推知することが出來る。即ちわが國の町人階級はすでにある程度の勢力を意識してゐたし、又封建的統治はすでにその矛盾を暴露してゐた。しかし外部からの影響はそれらの成熟を待たずして經濟組織を變更せしめた。そこでその改革の任に當つたのは當然なすべき筈の町人階級ではなくして、向ふ見ずの勇氣を有する下流士族階級であつた。從つてそこに生じた社會的變化は決して順當なものではなく、變態的なものであつた。この點は獨逸においても同じやうにいへるだらうが、わが國の明治年間における經濟狀態はこれを明示するものと思ふ。これらに反して最も自然な成長を遂げたのはイギリスであらう。ここで、それらについて詳論するつもりはない。唯私は社會組織の變革が內部からの成熟と、外部からの影響とに據つて差違を生ずることをいはんとしたに過ぎない

（昭和四月一月）

法律生活

徳川時代のやうな封建的社會生活においては——徳川時代が嚴密なる意味において封建制度であつたかどうかといふやうな議論は別として——すべての民衆は勿論、各階級悉くその一段上級に位する者に善かれ惡かれ服從するを以つて道徳としてゐる。從つて法律的生活の如きも上より下されたる命令を遵守する以外に何もない。法律は民をして據らしむべきものではあつたが、知らしむべきものではなかつたのである。身分の相違、上下の間隔は嚴重に守ることを必要とした。ある商家の奉公人が武家の下僕と爭ひ、却つて武家の下僕を打擲し打勝つたので大いに自慢してゐると、その主人の曰く、「家ゝ云ひつけ置きしに、人といさかひするのみな

らず、下僕たりとも、武家奉公の人は、世を治め給ふかたがたの召仕るる天下の役びとなり。おのれ商人の手代、私渡世の奉公する身分をもて、武家の召仕るる人といさかふこと、不屈なり。わが家風にかなはざる者なれば只今いとまをつかはすなり。」といつて宿へ引渡したとのことである。かくの如き道徳思想の一般に普及してゐた時代には法律を一般人が十分に知る必要もなく、又知ることを許されもしなかつた。従つて一般人の地位は法律的にも極めて不安定なものといはなければならない。何時如何なることに依つて一命をも召され、又家産をも没收されるか解らない。然るに當時の人人の心の狀態は恐らく今日よりももつと安定であつたらうと思はれる。今日から考へれば生命財産が不安定なのであるから、殆ど生活するに耐へないと思ふ者もあるかも知れないが、その時代の人人は常にすぐ上の地位にある者からの命令に從ひ、安じてその法的行爲を行なつてゐるのである。恰も單純なる軍隊組織、又は今日の工業組織で系統組織（the line organization）と呼ばるるものに似てゐる。各自はそれぞれの上長に對して責任を負ふ。そしてそれらの直接の上下間を結合するに儒教的道德を以つてする。さらに佛教的宿命觀は各人をして運命に甘んずる消極的安心を得させてゐた。當時の一般人の心持は消

極的ではあるが安慰であつた。

然るに現代はこれに反する。もし前者を法律なき安定といひ得れば、後者は法律的不安である。前者は消極的であるが、後者は積極的である。現代においては法律を知らざるが故に罰を逃れるといふことはない。法律として存在する以上何人も、これを知ると知らざるとに論なくその適用を受けなければならない。然るに德川時代の法令と違つて今日の法令は無數である。何人も現行法全體を知つてゐる者はないといつても過言ではあるまい。そのためにそれぞれの專門家を生ずる。しかし往々にしてそれら專門家の説明を以つてしても、なほ一般人に明瞭に了解せしむることが困難なことが少なくないらしい。例へばどうも理窟はよく解らないが、有名な法律家もさういふのだから致し方がないのだらう、といふやうな言を聞くことがある。現在の社會生活は法律生活である。われわれの行動、言語は法律に依つて保護されてゐると共に、法律に依つて束縛されてゐる。時に一私人の日記類をも没收されることすらある。萬事が法律に依つて決定される。われわれは知らない間に法律に依つて保護されると共に、同じく知らぬ間に法律に依つて干渉される。時には一般人にとつて法律が脅威になることも少なくないらし

い。善良なる市民のある者は彼等の知らぬ法律に觸るることを恐れてゐる。現代は封建の時代と違つて職業を異にすることに依つて身分が違ひ、そのために威嚇されることはない。所謂四民平等である。その代り繁雜極まりなき法律、門外漢の窺ひ知るべからざる法律に依つて支配されてゐる。われわれの社會生活は大小多少の差はあるけれども、法律に依つて煩雜にされてゐる。時には禍を蒙ることもある。われわれの生活をもつと安定なものにするためには、もつと理解し易き、複雜ならざる法律の制定を必要とする。われわれの法律生活はもつと簡單でいい筈である。しかし現在の法律制度を維持繼續する限り法律は益ゝ複雜なものになつてゆくであらう。法律制度の改善と經濟制度の改革と何れが先立つべきものであるかについては、人人それぞれの議論があることと思ふ。しかしその何れたるを問はず、法律に依つて保護され、生活の安定を得べき筈の一般人が法律に脅威されるやうな法律制度は、何らかの方法に依つて改良する必要があると思ふ。

（昭和三年十二月）

計畫と實行

一

人類の意思の力を十分に發揮することがあらゆる場合に必要である。意思の力を十分に發揮するためには、知識を完全にする必要がある。不十分な知識に依つては、假令何らかの意思を有するも、その力を十分に働かせることが出來ない。人類の知識を一層高める必要がある所以である。

個人の場合、不完全なる知識に基づく意思は頑迷となる。意思が強ければ強いほど、危險は大であり、弊害は多い。意思の力を十分に發揮する途ではない。無知は屢ゝ自己の力を誇大さ

せる。自己の力の限界を知らぬことから屢ゝ自己を破滅させる。人類の力には限度がある。社會の發展、自然力の推移に存する自然必然的傾向に對して、如何に努力するも無益である。唯人類はその必然性を十分に理解し、人類全體の生活にこれを順應させなければならない。そしてその生活をより高き文化に向上させる必要がある。故に吾人はそれらの自然的必然性に對し先づ十分の知識を有たねばならぬ。然らざれば徒に人類の勞力を徒費するに過ぎぬ。

二

自然放任主義の時代にあつては、所謂自由の名の下に生活の發展を自然力に一任した。しかし自然程浪費家はない。一本の草を成長させるために、數知れぬ種を犧牲に供して止まぬ。自由競爭は結局大なる浪費となる。自然は浪費に依つて調和を作り出す。自由放任の經濟政策は結局調和點に達せざる中に放棄せざるを得なかつたくらゐ、その犧牲が大であつたのである。

勞働者間の自由競爭は賃金を低下せしめ、勞働者の生活を悲慘なものとする。工場法、勞働組合はそれに對應する手段として案出された。資本家の自由競爭はその商品の價格を下落せし

め、利潤を低下する。企業合同――カルテル、トラスト、シンヂケートはその對應策である。しかしそれらは未だ單なる應急策に過ぎぬ。人類全體の經濟生活――生產者として、又消費者として――を全般的に考察してこれが根本的解決を求むることをなさない。現在の資本主義社會における生產力と購買力との不一致は、經濟現象に關する全體的計畫と統制とを缺けるが故である。

三

計畫なき生活は日和見主義である。どうかなるだらう主義である。時間を以つて最良の解決法と見るのである。又時間はある種の問題の解決に役立つことは事實である。自然力の運行は人類の意思如何に係りないからである。しかしどうにもならぬ問題もある。しかもこれを時に任すことは自由放任主義と同じことであるから多くの弊害を伴ふ。多くの場合問題の眞の解決とはなり得ない。又計畫なき者の常として一時逃れである。その場しのぎである。結局最後の破綻の生ずるまで、何らの解決をも考へてゐない。人類の意思に對する大なる侮蔑と云ふべき

である。

計畫に必要なのは十分なる知識である。何故ならば計畫は意思の力を發揮させる基本だからである。從つて一定の計畫を樹つる前に自己の力を知り、又その計畫の實行性を知らなければならぬ。實行不可能な計畫は空想に過ぎぬ。しかしその實行不可能の問題はその計畫に關する種々なる事柄に關する完全な知識を獲得する必要がある。

しかし前述せる如く人類の能力は萬能ではない。誤りあることは人間らしきこととさへいはれる。故に一つの計畫を有し、それに關する現在出來得る限りの知識を獲得し得たならば、後は唯これを行なふにある。かくして始めて人類の意思力は實現せられる。實行を伴はざる計畫は如何なる大計畫と雖も無用である。遊戯に過ぎない。そこに意思の鞏固なる力が要求される。知識の不十分から生ずる計畫の實現困難は、もしその知識の缺如が計畫當初如何ともなし難いものであつたなら、許容さるべきものである。かかる失敗はより新しき知識の獲得に依つて再び發展すべき基礎となる。現在の人類經濟生活が全般的に無統制であり、無方針である。早晩計畫的な經濟社會の建設に向ふべきものである。

（昭和七年二月）

理想と現實

一

個人にしても、集團にしても、一つの行動をなす時は、その程度の差はあるにしても、何らかの行動の基準がある。その基準が低く利己的な限界以上に出でない時には、その行動は淺薄であり、不純であり、時には暴行である。行動の基準は常に理想を包含するものでなければならない。

理想は實現し得るものでなければならない。實現し得ざるものは空想であつて、理想ではない。しかし理想は現在にあつては實現されてゐないものである。何時かは實現し得るかも知れ

ないが、現實には存在せざるものである。唯現實に作らきかけて、現實をより一歩高める推進力である。

理想を有する者が現實に對する時、その理想と現實との差のあまりに大なることに氣がつくであらう。その理想が大であれば大であるほど、現實との差は大である。かかる差異を克服せんとするところに理想の實行性が現はれ、又その理想を有する者の人間的苦しみが存する。

理想と現實との相剋は單に、自己と他との問題のみではない。現實社會の諸現象が自己の理想と相剋することは勿論、自分自身の生活行動との矛盾はさらに痛切なる自家の問題となる。かかる矛盾をそのままに是認して、何らの矛盾をも感じない者は幸福人ではあるが、その理想は空虛なものに過ぎない。理想ではなくして空想、又は單なる思想的遊戯に過ぎない。

理想はその實現を期待するところに意義がある。そしてその實現のためには、理想と現實との差を克服しなければならない。しかしその差異を克服するためには、先づ現實の醜惡を十分に認識し、それに當面してもたじろかないだけの勇氣が必要である。現實が理想とかけ離れてゐるばかりでなく、時に醜惡な現狀が動もすればその理想を打碎いてしまふほど甚だしいことがある。

現實の醜惡さから目をそむけてゐることは苟且の慰安を得ることは出來るかも知れないが、それは單に理想に依る行動を回避する者の態度に過ぎない。現實の醜惡をあるがままに是認せんとするのは生活に對する反省を缺き、理想を拒否する者である。

理想と現實との差異を克服せんとする力は不斷に自己を反省し、その生活の是正に努力することに依つてのみ生ずる。それは內的には自己の力を十分に認識することに依つて生ずる自信となり、外的にはこれを外界へ發露せしむる行動となる。

二

民族的發展の場合にも同樣なことがいへよう。理想なき民族は民族としての發展力を有さぬものである。民族の現狀に對して何らの反省をもなさず、そこに存在する現實を直視することなくして、徒らに民族的理想を高唱することは、時に理想なき民族よりもさらに大なる危險に陷るものである。理想と現實との差異があまりに甚だしいからである。

民族的理想に基づかざる民族の行動は空しきものとなる。しかしその理想は滿たされざる現實の諸相を十分に認識し、これを反省することに依つて自ら生ずるところの實力に基礎を置くものでなければならぬ。反省は努力を生む。その努力に依つてその民族の内部から必然的に生み出された理想は強い力となつてその民族全體を指導する。

かかる實力をもつことは、一二の指導者の掛聲に依つて出來るものではない。又法律や制度の制定に依つて出來るものでもない。民族自身が現實を明確に認識することに依つてのみ成就されるものである。もしその現實がその民族にとつて、あまりにも不幸なものであつたとしても、それに依つて萎縮してしまうやうな民族であるならば、それは終に眞の理想をもつことの出來ない民族である。如何なる不幸な現實に當面しても、これを端的に考察して、少しもたじろかざる民族こそ、眞に理想を有する資格のある民族である。悲境に面して落膽狼狽する民族は順調にあれば安佚傲然たる民族である。民族として大をなし得る資格なきものである。

われわれ日本人としても理想をもつ民族でなければならぬ。しかしそれは作られた理想であつてはならぬ。生み出された理想でなければならない。かくしてその理想は實現し得るもので

あり、眞の理想である。然らざればそれは單なる空想か、又は言葉の遊戯に過ぎない。民族全體が一つになつて動く強い迫力がなく、歴史上に大きな足跡を遺すことは出來ない。現實の眞相を直視し、自ら反省して以つて自信ある理想を樹立すべきである。

（昭和十五年七月）

社會と個人

一

「全體」は「個」の總合から成る。社會は個人の總合である。個個の「個」が「全體」から脱落して行つても全體には變りがない。個個の個人の死滅が社會の存在には影響を與へない。だが「個」なくして「全體」が存在しないが如く、個人なくして社會は形成されない。唯所謂ロビンソン・クルゥソォ式の絶對的な個人生活は意義をなさない。又クルゥソォの生活と雖も矢張りその過去及び當時の社會の一派生に過ぎない。「個」は全體を離れて存續し得ない。

昔から世に四恩ありといつてゐる。四恩といふのは、天地の恩、君の恩、父母の恩、衆生の

恩の四つである。人間が獨りで生活出來ないことは明かなことである。一つの集團の中に入込んで生活せざるを得ない。よく「己は己の儲けた金で、好むところをするのだ。他人の知つたことではない」と考へる人間がある。これは甚だしき誤りである。「個」が「全體」の中にある時、「個」は恆に「全體」に依つて制約され、「個」の勝手な行動は許されないのである。「全體」が完全なものであればある程、「個」はその「全體」の目的に制約される。然らされば、その調和は破れることになる。即ち「個」は常に「全體」の一分子に過ぎない。個人は社會の一分子であるが故に、個人の如何なる行動もそれが構成せる社會に影響せずして止まない。從つて個人の行動は如何なる場合にあつても、又多少の程度の差はあつても、羈絆されざるを得ない。この意味では絶對の自由主義はあり得ない。

最も完全な「全體」にあつては、「個」は「全體」の存續に寄與するのみで、「個」の獨立的意義は認められない。換言すれば「全體」が「個」に依つて制約さるることはない。もし「個」がその「全體」の調和を破るやうなことがあれば、その「個」は直ちにその「全體」から自動的に排除される。これを「全體」の自律性と呼ばう。從つて「個」は「全體」に對しては從屬

以外の何ものでもないのである。しかしその從屬は屈服でもなければ、服從でもない。「個」の諧調的統制に依る「全體」の完成を意味する。

個人の社會における關係はかく單純にゆかない。個人が社會から制約され、又社會から離れて存在し得ないことは明瞭である。しかし人類にあつては社會の存續といふことだけが唯一の目的ではない。即ち「全體」といふ生活態の持續を目的とせず、――その持續が前提として絶對に必要であることはいふまでもないが、それを單に前提條件として認むるに止める。そこに人間の社會生活の複雜な諸關係が生まれて來るのである。

二

蟻や蜂のやうに、「個」が「全體」の中に沒入してしまつて、唯全體の社會の繁榮持續のために、一切の「個」が機械的に活動する場合は、「全體」としては一つの理想的な型ではあるが、そこには進歩が現はれて來ない。人間の社會も原始型においては恐らくこれに近いものであつたかも知れない。一つの民族――同一血族の構成する社會が絶對なものであり、その社會

を構成する各員については何らの價値をも認められない。「個」は唯「全體」の維持についてその存在を許されてゐるばかりである。

彼等の感情も個個の感情ではない。同一社會内のすべての者が、同一感情の下に行動する。一つの血のつながりに依る感情移入は容易に、かつ普遍的に行なはれる。血族の長の感情が、その部下のすべての者に普及するのではない。血族の長と雖もその點においては矢張り一つの「個」に過ぎない。「全體」の感情が血族の長に依つて特に表現さるることはある。しかしそれはその血族の長といふ個人の感情ではない。そしてそれはやがて全體を貫く宗教的神秘にまで高められる。

その感情移入は、人間だけに止まらない。あらゆる物、あらゆる現象にまで及ぼされる。物を支配するものは「全體」であつて、個ではない。物に對する意義は「全體」を通じてのみ附與される。「全體」と何らかの關聯を有する物だけが價値がある。然らざる物は何らの價値もない。原始人が現代人から見て全く無意味のものと思はれるものに特殊の價値を認めるのもそのためである。從つて彼等の間には所謂「利益社會」は發生しない。「協同社會」のみである。

「利益社會」といふのは、何らかの利益を目的として人間の間に作られた集團をいふ。その利益の如何に依つては、各員が勝手に出入出來るものである。政黨とか、會社とか、その他多くの團體はこれに屬する。原始人の間にはこの種の融合離散し得る集團はない。彼等の社會は始めからその一員たるべく運命づけられた社會のみである。その社會から離れる時は、死滅か又は物となる。異種族の者が奴隷として一つの物と考へられてゐたことに、何らの不思議もない。この社會、即ち「協同社會」である。家族とか、民族的國家とかはそれである。それは血に依つて運命づけられた一つの集團である。

この意味で、原始人は「全體」としては最も完全に近い社會を有してゐたといへる。從つてもしそこに物との關係、及び異れる血との關係が起らなかつたならば、換言すれば生活の擴張が無限に行なへるほど土地が廣かつたならば、永くこの狀態は續け得たかも知れない。「個」が機械的に「全體」へ沒入し得る時は、その社會だけについて見れば、最も平和的であり、能率的である。しかしそこには個個についての利害もなく、欲求もなく、刺戟もない。「個」にとつては與へられた運命に停滯するより外になく、進歩は見られない。人類が一つの群生的動

物として生活するのであつたならば、これでよかつたのである。社會が生命の持續だけを目的とするものであるのならば、この程度に止まつてゐる方がよかつたのである。個人の自我の覺醒は、その發生原因の如何を問はず有害無益である。

三

機械的な「個」は「全體」に對して有害又は不調和である時は、自動的に「全體」から排除される。その排除される理由について說明されることはない。況んや批判されることはない。人間の社會に對する關係は機械的「個」の「全體」に對する場合と著しく異なる。個人も亦社會に對し有害又は不調和と見られる時は排除される。しかしそれは自動的に行なはれるほど完全に機械化されてゐない。社會の自律性は未完成である。社會にはさうした個人を排除して出來るだけ完全な統制を保つために、何らかの制度を必要とする。そこに法律や刑罰が生まれる。

文化が進むにつれて社會の統制には複雜な制度が必要になつた。統制の基本となるものは力である。しかし力の單純なる表現では不十分である。個人の活動が盲目的從屬に耐へられなく

なつた時、それを一定の型の内に押込めようとする社會を生じた。その場合個人をして一つの運命づけられたもの、人力以上のものに屈從せしむるのが最良の方法である。各個人の生命が運命的であるだけに、このことは頗る有効である。

何人もその生まるる時、生まるる處を選擇し得ない。その有する才能も亦かなり運命的である。一粒の種がその落つるところの土地に依つてその生涯が定めらるるが如く、人間もその生まれ出た地位に依つて運命づけられる。その與へられたままに安住せしめ、そのうちに滿足を見出さしむるやうにすることが一つの安定せる社會を實現する上に好都合である。中世の社會はその一つの型である。「身分」「家格」「家職」「分限」などといふ言葉が一般に支配的になる。「傳統」が尊ばれる。個人は獨立として認められず、その屬する「家」の一員としてのみ意義を有する。

かかる社會においてすべてが特殊の關係に依つて相傳される。親は子に、子は孫にその有する技術を相傳する。「家傳」である。師は選ばれたる弟子にのみその奥儀を許す。「秘傳」である。一切が他見を許さぬ。秘密である。極少數者にのみ傳へられることを許される。許された

る者のみが、その業を營むことが出來る。許されざる者は、假令その技術が彼等と同一、又はそれ以上であつても、これを行なふことを認められない。社會はこれを異端として排除する。

しかし一定の技術は傳へられなければならない。親は子に、師は弟子にその技術を教へる社會的義務がある。子は親の、弟子は師の教ゆるところを忠實に遵守し、それを後に來たる者に傳へなければならない。かくして技術は幾代かの間忠實に傳承されて行つた。傳統の美、忠順の德は賞讃さるべきものではあつたが、創意の見るべきものはなかつた。社會の何處にも個性の輝きは見えず、傳統の强き力が支配してゐた。

「個」が與へられた地位に、與へられた職分を甘受し、生滅してゐる限り、そこに「全體」の完全な調和が生ずる。市民は市民の生活を、農民は農民の生活を、武士は武士の生活を、すべてが以前のままに傳承されてゆくのなら、進歩はないが平和はある。各人の經濟生活を嚴重に規定し、一歩もそれ以上に出づることなからしめんとした中世生活は、かかる種類の平和的生活を目標としたのである。だが人間はその平和に滿足してゐなかつた。さうした統制に反逆の聲を擧げた。否擧げざるを得なかつたのである。

四

近世の社會はそれらの玄秘を打破し、一切の束縛制限から脱却せんとする個人の活動に始まる。「全體」に中心を求めずして、「個」の完成に力點を置く。「全體」は單に「個」の完成のために存するとする。個人の活動を十分ならしめんがために、これに害があるやうな個人に對する一切の障害を除去することに努める。個人間に存する一切の身分的差別を無意味なものとする。「自由」とか、「平等」とかいふ言葉が絶對に神聖なものとされる。

「家」は個人のために存する。個人が「家」のために存するのではない。各個人は平等である。「我」の自覺が叫ばれる。「家」とか、「國家」とかの活動は最小限度に局限される。教育、軍事、警察といふやうな個人の活動を十分ならしむるに必要と思はるる事項にのみに限定される。「個」はそれ自體一つの「全體」であることを發見したのである。個人がその有する才能を十分に發揮し、これを完成することを目的とする。その最善の途は自己のみが知る。自己の充實のためには各人の行動に自由を與へねばならぬ。「個性」の尊重、「自由」の要求は

あらゆる方面に起つて來た。

神聖なるものが通俗化され、英雄は凡人と變らぬものとなつた。各「個」が平等にその權利を主張せんとする。「權利」は主張されたが、「義務」は放棄された。個人の社會に對する一切の義務は自然法則の彼方に埋沒されんとした。各人がその欲するところを、その利益とするところを遂行すれば、後は自然がこれらを自ら調節する。勝手氣儘な行動をすれば、自然はこれを處罰する。從つて放恣は制限される。かくして神に對する敬虔を棄てて、自然に對する信仰を採つた。そして一切の義務を「自然」に一任した。

「自然」は明かに處罰した。しかしそれは必ずしも「人間」の欲求するところと同じくなかつた。自然的調節は人間の社會に必ずしも諧調を與へるものではなかつた。「自然」は人間の意思と調和しなかつた。「自我」の覺醒により個性を充實し、目ざましい發展を遂げてゐた社會は暫くその不調和に氣がつかなかつた。もしくは止むを得ざるものとして許してゐた。しかし間もなくその點に氣がつき出した。

「個」の擴充を計ることが、「全體」の完成に最もよいに違ひない。しかしある特殊の「個」

だけが擴充され、他が無視されるのでは、「全體」は畸形化する。「全體」の發展のためには時には「個」を抑止する必要が起る。近世社會における個性の尊重、自我の覺醒は一面において個人的意思の勝利であるといへるが、他面において人間の全體的意思の自然への屈服と見ることが出來よう。全體的社會の存在は認められず、個人的利益が尊重され、所謂「利益社會」の隆盛が見られる。各人が利益を追及する以外に、他への影響を顧慮せぬ我利主義が各個人の生活の基礎をなす。自己を中心とするが故に、すべてのものが自己のために存するが如く考へ、敬虔、謙讓、信賴は舊道德として退けられ、奴隷道德と呼ばれる。自己を主張し、他に優越することを欲求し、不斷に敵手を倒さんことのみを心がける。進取、奮鬪の攻擊的精神を高め、宣傳、自家廣告が絶對に必要とされる。生活は常時動搖し、不安である。唯時勢に適應することのみを考へ、人後に落つることを怖れる。

中世の如き技術の玄秘は失なはれた。技術は一般に公開された。より多くの利益を擧ぐるために、常によりよき技術を考案した。技術は進歩し、生產は增加した。競爭は敵手を倒し、自己の利益を擴大するにも役立つた。だが個人の利益は必ずしも社會の利益と一致しない。人間

が自然に叛き、自然と鬪つて、自然を克服したと考へた時に、却つて自然から手痛い復讐を受けざるを得なかつた。個人主義的自由主義に基礎を置く社會があらゆる方面に破綻を生じた。「個」の偏れる發展が「全體」を畸形的なものとしたのである。人人は改めて社會と個人とを注視した。

五

實際に「個」が完全な自由を獲得すれば、それは最早「個」ではない。個人が絶對的な自由を得ることは觀念的以外にはない。個人は種々なるものに束縛されてゐる。しかしその束縛制限が必然的な場合には問題とならない。生理的な束縛の如きは不可避のものとする。人間が人間を拘束する場合、後者が前者に反抗する。社會は人間が形成せるものである。人間が人間を束縛する必要が起る。然らざれば秩序を維持し得なくなる。經濟社會の依存性が擴大すると共に、個人の生活は益々より大なる經濟社會の束縛を受ける。かつては一つの家族の内で獨立の經濟が營まれた。今では如何なる家族もそれだけでは生活出來ない。經濟社會は單なる家族よ

り、より大なるものに依存するに至つた。「國民經濟」なる名稱がそれらの經濟社會に與へられる。

その全國民經濟内における個人の活動はその全體の構成に束縛される。觀念論的に個人は全人間社會の一分子として考へられた。「人類平等」などといふ觀念がそれである。しかし未だかつてすべての人類が平等の立場に置かれたことはない。英國人を濠洲の土人と同列に取扱ふことをしない。民族的差異は打勝ち難き境界を設ける。加ふるに各民族の經濟社會は均等ではない。不均等な經濟社會は相互に流通することを危險にする。先進國に對し後進國が保護關稅を設定すると同樣に、先進國は後進國の移民を排除する。個人はその意味で全人類社會の一員ではない。ある特定の經濟社會に屬する一員に過ぎない。從つてその屬する經濟社會の社會的構成に依つて束縛されざるを得ない。

殊にある有力なる民族が一つの經濟社會を構成する際、その資源が不十分である場合、その社會の一員は經濟的に幾多の統制を受けざるを得ない。さらにもしその經濟社會の孤立性が顯著である場合、即ち封鎖的經濟社會に近い場合、個人の經濟生活は著しく束縛される。生產も

消費も、その經濟社會の獨立、維持、擴張に適應するために制限される。そこに外形上中世の封鎖的經濟社會に類似せる形態を示す。最早個人は自己の利益のためにのみ、生產し、消費することは出來ない。

しかし中世社會の如く個性を無視せる統一に歸ることは出來ない。一度目ざめた自我を抑壓し、運命的な身分關係に押込めることは不可能である。各個人が自ら一つの協同社會の一員として、その經濟社會の圈内に生活する者たることを自覺することに依つて、その統制下に服さなければならぬことを認識する必要がある。その社會の存立のために個人がその意欲を自意識的に抑制するにある。徒らに「個」を盲從的に沒却し、「全體」の一部として機械化するのではない。各「個」の作用を十分に活躍せしめ、「全體」の完成を計るやうに組織化するにある。個人が有する天賦の技能を十分に發揮せしむると共に、その成果を社會的に有効ならしむる新組織の樹立、新道德の建設を必要とする。それは「勿れ主義」の消極的なものではなく、積極的なものでなければならない。「個」が「全體」に沒入するのではなく、「個」が「全體」と共に生成し、より大なるものへの發展を意味する。

（昭和十年十月）

VI

現代人の精神生活

啓蒙運動の華かなりし頃、人間の思索は頗る活氣を帶びてゐた。事物の眞相を極めんとする勇敢な努力がつぎつぎに幾つもなされてゐた。そして人間は自然を克服し、世界を支配するに至つたと考へるやうになつた。すべてのものはこれを合理的に觀察する時に、打開されざるものなしと信ずるやうになつた。やがてすべてのものは社會的に考察すべきものと信ずるやうになつた。そしてその結果として、現代の世界觀が生まれたのである。

合理的にものを見るといふのは、現代人にとつては科學的にものを見ることである。すべてのものが科學的に實證さるるにあらざれば、現代人は滿足しない。彼等は科學的發達だけを進

歩といふ。從つて進歩は常に實證さるることについてのみいはれる。一時間に一里歩ける者が二里歩けるやうになれば進歩だといふ。感官に依る證明にのみ信賴を置く者は、最も幼稚な科學主義者である。上空を飛ぶ火山灰の速力が地上の急行列車より速いといつても容易に信じない。しかしそれが「科學的」に說明されれば直ちに信ずる。現代人にとつては「科學的」であることが何より必要なのである。

合理的であるといふのは不合理でないといふことである。しかし合理的でないものはすべて不合理であるといふのは正しくない。合理的でもなく、不合理でもないものがある。非合理である。非合理は合理的に說明し得ざるものである。かかるものの存在は人間の合理的能力が發達しないからだといふ者もある。人間の科學が進歩すれば、非合理的なものは存在しなくなるといふ。

彼等が非合理性を十分に會得し得ないのは、それが實證し得ないものだからである。殊に科學的に實證し得るといふことが絕對に必要であるのに、それをなし得ないものだからである。從つて現代人にとつては非合理的なものはその思索から排除される。

彼等の思索の内には彼等自身の科學的能力に依つて合理的なりと考へ得るものだけが殘る。その科學的能力は小學生程度のものである。淺薄であり、低劣である。唯科學の力に依つて創られた物質的なものを享受して、そこに進歩を體驗して、科學の偉大さを賞へる。かかる「物」に表現し得ざる科學の本質については何ものをも知らぬ。又知らうともしない。從つて彼等の精神的生活は甚だしく貧弱ならざるを得ない。

社會的にものを見ることは正しいことである。個個のものは常により大なる社會の潮流の内に卷き込まれ、それから出ることは出來ない。ある個人が如何に努力したとしても、社會の動きは如何ともなし難いことは歴史の明かに證明するところである。現代人はこの點についても頗る怜悧である。

彼等は科學的であり、合理的であらんと欲する結果、功利的となり、個人主義的となつた。しかし個人の本質を究極までつきつめることはしない。社會的の動きに對しては敏感ではあるが、その本質には無關心である。現實に存する社會的動向を知らんとすることには、相當の熱心さを示す。そしてその社會的動向に順應せんとする。依然として功利的なるものをもちつつ。

そこに附和雷同の傾向が頗る強くなる。一つの事實の本質が何であるかは問題とならない。それが眞理の如何も又問ふところではない。況んやそれが自己の精神生活に如何なる關係があるかも問題ではない。唯それが一般的であるかどうかが問題である。もしそれが一般に客觀的事實たることが證明されさへすれば、何らの躊躇することなく、贊意を表する。それが社會的動向であれば、自己の思索を十分に納得させ得なくとも、諦める。社會的事實は如何ともなし難しとする。その結果として精神生活の墮落は甚だしくならざるを得ない。

現代人の精神生活は社會的不安の起るごとに動搖する。唯幸か不幸か彼等は社會の科學的進歩を信じてゐる。そしてその進歩に貢獻することに多少の希望を有してゐる。數字に表現出來る「記錄」がその具體的な目標である。しかし本質的なものを顧慮する勞を採らない。それは具體的な目標がないからである。客觀的に表現し得ぬからである。一般に理解し得る程度の數字に表現し得る「記錄」が、精神生活にとつて如何に低級なものであるかは明かであらう。

かかる狀態から生ずるものは、精神的獨自性の喪失である。無批判的雷同である。そして各人の精神生活の貧困化である。諦命から生ずる安逸は望み得らるるかも知れないが、精進努力

に依つてのみ得らるる創造への欣びはこれを味ふことは出來ない。從つてそこには低級な精神生活があるばかりだ。この點において現代人は新しい角度からものを見直す必要があらう。近世における所謂文明の進歩を再檢討して見ることが必要だらう。

（昭和十五年五月）

スピード・刺戟

現代人がその生活に要求する一つの要素は迅速といふことである。自動車、飛行機、ラヂオいづれもその欲求を滿たしてくれる。ベルリン東京間が百時間足らずの距離に短縮されると、人人は子供らしい歡喜の聲を擧げる。しかし迅速といふのは相對的のことである。何時かはベルリン東京間に百時間近くもかかつたといつて、そのおそきに驚く日がくるかも知れない。

私が滯英中ハロォに住んでロンドンに通つたことがある。ロンドンの大英博物館の圖書室まで二三十分でゆける。それだのにアシュリィ教授から何故もつと近くに下宿しないのかと批難らしい言葉を受けた。その時はむしろあまり齷齪する態度を厭はしくさへ思つたが、學問す

る身としては當然受くべき批難であつたかも知れない。わが國よりも一歩進んでゐる英國においては時間の觀念は一層逼迫してゐたのは當然である。現に私自身がロンドンへ一時間で到達し得るケムブリッヂに住んでゐながら、ロンドンにゆくことを多くの時間を浪費するやうに思つた。それが日本へ歸ると、一時間あまりを要する土地から通つてゐるのである。

しかしわが國においてもすべてに對し迅速を要求しつつあることは變りがないから、當然いつかは一時間も乘物に乘つて通ふことは多數の人にとつて耐へられぬものとなるであらう。現代人が迅速を要求するのは單に迅速なるが故によしとする場合もある。今までおそかつた汽車が急に早くなると、當分の間はその迅速さに快適を感ずる。しかし他面においては迅速といふのは變化の要求である。單時間の内に多くの刺戟を受けんと欲することである。從つて現代人には永い、變化の少ないものは喜ばれない。

× × ×

このことはその原因を現代生活の機械化に求めることが出來る。現代の社會生活は人間を一

定の型にはめんとする傾向がある。多くの人の生活がきちんと定められんとしてゐる。買はんとする品物にも型がある。勤める仕事も一定である。個人は社會生活といふ大きな機械のうちで、一つの齒車のやうに動いてゐるに過ぎない。從つて生活は單調である。その平凡な單調な生活に甘んじ得る者は、それが聖者であると腰辨であるとを問はず、無事である。しかし大多數の者、殊に若き血にもゆる者はその單調に我慢することが出來ない。どこかにこれと全く異なる變化多き刺戟を求める。

現代の學校生活は、他の多くの社會制度と同じく單調である。標準化されてゐる。秀才も鈍才も同じ標準の教育を受け同じ試驗を受けて同じ型に作りあげられる。又彼等が社會に出てもその社會の型から出るわけにゆかない。從つて學生も、會社員も、又その外あらゆる階級の社會人が變化を求め、刺戟を欲して、そこに快樂を發見する。カフエー、音樂、ダンスホール、芝居、スポーツ等等、假令警察の權威をもつて學生のカフエー入を禁ずるとしても、そこに快樂を滿たす變化があるとすれば、これを防止することは出來ないであらう。又カフエーやダンスホールが異常なる裝飾をなすことも、それが現代人の單調に反抗する要求の一つである。い

はゆる現代人にとつては腹藝と稱する歌舞伎劇のあるものの如きは到底觀賞し得ない。羽左衛門の首實檢が何分かかつた等といつて喜んでゐたのは十數年前の芝居好きである。變化と迅速とはあらゆる方面に現はれてゐる。高速度喜劇、バラエティ、レビュー等、單時間にどんどん變るものでなければ一般には喜ばれない。現代人には退屈がもつとも禁物である。

× × ×

この現代の世相を代表するものは新聞紙である。ところが新聞紙は他方現代生活を機械化せる方面の機關の一つである。朝起きると新聞紙を讀むのが現代人の習慣である。これを失つたら一日中の行程が狂ふ人もあるかも知れない。日曜日に夕刊がなくてさへもさびしいのだから。從つて各記事が必ずあるべき所にあることを要求する。新聞紙を全部讀む者はまづあるまい。又第一に讀むところも各人それぞれ定まつてゐよう。そこであるはずのところにないと甚だ不愉快である。だから大抵の新聞紙が型にはまつたやうになつてゐる。これは多くの讀者が新聞紙を讀むことを、その機械化せる日課表の一部に入れてゐるからである。

しかし現代人は我ままである。その新聞紙から常に變化と迅速（これは勿論だが）とを求めてゐる。新聞編輯者の苦心は單に事實を迅速に正確に報道するだけでは足りない。常に變化を多くして讀者の注意を喚起しなければならない。事件の報道が潤飾され誇張さるることも、又時には面白をかしく一個人の私事を發くことも起り得るのである。

社會生活が機械化され、標準化され、單調になればなるほど、又恐らく大産業組織が發達するにつれて、さうならなければならないであらうが、人人は短時間に相當複雜なる刺戟を與へるものを要求してくる。この傾向が又上にも少し述べたやうな現代社會の幾多の缺陷を生む原因となる。爲政者は徒らにそれらの欲望を阻止することばかりに努めずに、（阻止することはむしろ不可能であらうから）健全な、しかも現代人の上述の欲求を滿足せしむやうな方面を發達するやうに援助する必要があらう。

（昭和四年九月）

專門家

人間にはすべて物事を簡單にしようとする要求がある。即ち單純化せんとする傾向である。あらゆる哲學上の議論——一元論でも、多元論でも——さういふ要求から生じたものである。科學も同樣である。

「つまりそれはどうなるのだ。」「要するにかうだ。」結局。畢竟。すべてわれわれの單純化の要求から發する言葉である。

分類する。區別する。黨派を立てる。「あの男は社會主義者だ」といふ。「あなたの主義は何ですか」と尋ねる。簡單な符牒を好んでつける。それが最も明瞭であると考へる。

單純化の功績は決して少なくない。自然科學において最も明瞭に效果を擧げてゐる。だが社會現象はさう簡單ではない。現象と現象との相互作用が甚だ複雜になつてゐる。（勿論自然現象も複雜ではある。しかし單純化する可能性が甚だ大である。）

そこで社會現象を取扱ふ場合に種々なるトリックを用ひる。經濟學において最も多く用ひられたものは caeteris paribus である。「價格は他の事情が等しければ、需要と供給とに依つて定まる。」しかし事實他の事情は等しくない。

さらに同じやうな方法が他の形式で、かなり行なはれてゐる。「もしダイヤモンドが多く發見されるれば、その價格は安くなるだらう。」しかしダイヤモンドは多く發見されてゐない限りナンセンスである。假設に依つて caeteris paribus と同じ效果を擧げんとするのである。

さらに最も危險なるトリックは自然科學の單純性を利用せんとするものである。最も有名なる例を擧げれば、「社會の變革は、恰も水が氷點に對し突如としてその質を變ずるが如く、急激に來る。」比喩として使用するならばよい。比喩以上に何らかの確實らしさを與ふるならば甚だ危險である。社會は水ではない。

「甲の國は君主國である。そこにかくの如き革命が起つた。乙の國も君主國である。同じく革命が起るべきである。」これも複雜なる社會現象を單純化せんとして生ずる誤謬である。

それならば社會現象を對象とする限り、單純化は不可能であるのか。結局どうにもならないのか。それは一種の不可知論である。

二つの方法がある。

一つの社會現象を如實に描くことである。描かれたる社會現象を通じて、讀者をしてその實體を會得せしむる方法である。藝術はその優なるものである。想像力の大なる援助を待たなければならぬ。科學にはならぬ。

科學は實際から遊離されたる眞理である。思惟である。それが現實的なりや、非現實的なりやのスコラ哲學的問題はここでは問題にならない。

初期の經濟學が社會現象の單純化に成功して學となつた。單純なるほど容易に世に行なはれやすい。經濟學は流行の學問となつた。この意味においてスミスは大なる成功者である。

マルクスは社會主義を科學化することに依つて單純化に成功した。同樣の意味において流行

の學問たり得る。

昔、といつても第十九世紀の中頃、アメリカの大學總長は僧侶の長老がなつた。その就職演說の題目は大部分經濟學であつたといふ。何故ならばそれが一番容易な題目であつたからである。

しかし對象たる社會現象は複雜である。caeteris paribus からは離れなければならない。完全なる捨象を行なひ、しかも現象と現象との相互關係を明確にするには高等數學の援助を求めなければならぬ。

植物學に、花法式といふのがある。花部の形態を示すものである。例へば五枚の萼片、同數の花瓣があり、次ぎに十個の雄蕊が二輪に排列し、中央部に五雌蕊が合一して複子房を成してゐる花があるとする。これを花法式に現はせば K5 C5 A5+5 G(5) となる。この程度の式はかなり早くから經濟に現はれてゐる。今日ではより一層遙かに進んでゐる。

簡單なる一例を擧げる。

ある資源に課した租稅の價格に及ぼす式

$$\Delta P = \frac{e_1 S_1 T - e_2 S_2 V}{e_1 S_1 + e_2 S_2 - \eta (S_1 + S_2)}$$

この程度の式でも素人を驚かすには十分である。しかし未だ實際現象の説明としてはなほ不十分である。

かくて經濟學は素人の常識の學問から離れてゆく。特殊の專門家のみが理解し得る科學となる。

化學者が化學方程式の記號のうちに複雜な化學變化を如實に理解するやうに、經濟學者は數字と記號とに依つて複雜なる經濟現象を會得する。少なくとも科學としての經濟學の進み得る一つの途がここに存する。

人類の單純化の要求は複雜なる實際現象に遭遇するや、ここに專門家を生むに至る。

（昭和五年十一月）

矛盾の興味

社會は矛盾に滿ちてゐる。改めていふ必要のないくらゐ矛盾だらけである。個人として性格の矛盾があり、行動の矛盾がある。さういふ矛盾した人間の集まりである團體生活に、矛盾のあることは當然であらう。歴史現象にも少なからぬ矛盾がある。毎日讀む新聞を少し注意すれば直ぐ矛盾に氣がつくだらう。先日の新聞に大藏省で將門の死靈を怖れて、お祭騒ぎをやつた寫眞が出てゐた。大臣始め高官とおぼしき人人が恭ゝしく頭をたれ神妙に控へてゐた。もしこの人達にたたるものがあるとしたら、千年も前の死靈より、もつと手近にありさうな氣がする。國定教科書で迷信を排斥してゐる今日、社會生活の一つの矛盾である。報道してゐる新聞紙も

幾分茶化し氣味に見えた。しかしかういふ社會生活の矛盾がある程度に止まつてゐる時には、社會はそれらの矛盾を包含して、兎に角調和してゆく。しかしその矛盾があまり甚だしくなれば、その社會は住みにくくなる。何らかの危機を含む。全般として社會の覺醒を促すべき運動が起らざるを得ない。社會の進歩を生ずる。社會生活の矛盾は幾分緩和される。しかし矛盾なき社會は過去にもなく、現在にもなく、恐らく將來にもないだらう。

社會生活の矛盾を口にする者は、個人的行動の矛盾を自覺する者より多い。自己の言行の矛盾を知ることはかなり困難である。しかし第三者からは容易に指摘することが出來る。私が中學生の時であつた。陸軍記念日の講話に某聯隊長が見えた。講演の內容は忘れたが、最後に模範的將校として某中尉が紹介された。その時聯隊長は「これは見本だ。こんなのは聯隊にゆけば澤山ある」といつた。われわれは思はず笑つた。「何がをかしい」と大變に恐られた。

聯隊長は尊重すべき模範的人士を瀨戸物扱ひにした矛盾に氣がつかぬのである。かういふことは澤山ある。「ならぬ堪忍するが堪忍」の掛物の前で、夫婦喧嘩をするやうな例はざらにある。そんな喜劇的事件でなくとも、少し注意して人と話をしてゐると、その人が相當高い教養

のある人でも、平氣で矛盾したことをいふのを發見するのは困難なことではない。それほど當事者は自己の言行の矛盾に鈍感である。

それらの社會の矛盾や個人の矛盾に敏感な人はこの世の生活が耐へ難いほど苦痛になる。終には自殺以外に途のないやうにさへ感じさせられる。殊にさういふ敏感の士が矛盾せる行動を餘儀なくさせられた時、自殺するに至るのは十分に想像出來る。しかしさういふ人人を自己の矛盾に鈍感な人間が批評することは潛越である。ただあらゆる矛盾は當事者たらざる時には語弊はあるが甚だ興味の多いものである。自己の矛盾を自覺せぬ者は論外であるが、これを知る者はさらにこれを批判し、止揚して、より高き生活を求めんと努力すべきであらう。社會と個人とを類推することは危險であるが、かくして生活の向上が生ずるのではなからうか。世界史に現はれる多くの現象に存する矛盾の中にも、この意味で多くの興味をもつ者である。

（昭和三年四月）

いろいろな立場

世の中には種種様様なことが行なはれ、その上それらのことがそれぞれの理由を有してゐるから面白い。しかも見る人の違ふことに依つてそれらが全然違つたものとして現はれて來る。新聞を通じて知られるいろいろな不平もそれだけを聞けば何れも尤もである。狂犬が多いからどんどん撲殺すべしといふ投書があるかと思ふと、愛犬が僅かに鑑札のないといふくらゐの理由から持主の眼前で殘酷な目に會はされるといつて訴へて來る者もある。公設浴場が不潔だといへば清潔だと駁する人がある。學生の取締を嚴にすべしといふかと思ふと、自由教育を唱ふる理想家もある。泥棒にも三分の理といふやうにすべてのことに理由がある。もし自ら一一そ

れらを唱へる人達の立場になつて見たならば、殆どどうすることも出來ないであらう。何らの議論も立て得ないであらう。在野の時代には相當筋途の立つた議論を說く人でも、一度實際の衝に當ると殆どなすことなきは、この間の消息を語るものであらう。誠に學問の進歩は正正の議論に生じ、文明の發達は不滿の充足に起る。しかしそれにしても現在はあまりに小不平に滿ち過ぎてはゐないか。われわれは各々それぞれ自己の立場をもつてゐる。甲の立場に立つ時は乙のなすことは無意義である。乙の立場に立つ時は甲の行動が無價値となる。それらの違つた立場に立つて議論すれば恐らく際限がないであらう。實際家の目から見れば學者のする穿鑿は愚の骨頂であらうし、學者の目から見れば實際家の行動は馬鹿氣てゐる。しかし彼等自身の立場に至ればすべてが價値を生ずる。究極において、何れが價値ありやの如き問題は微々たる人間の知り得るところではない。廣く大きく考へれば價値あるものは、何もないかも知れない。唯われわれは人間としてある立場に立ち、その立場から複雜多岐な世相を觀察するばかりである。爲政家の如く實際問題に觸れる者であるとしても、唯その立場から事を處理するのみである。そして最も有能な實際家ほど多くの批難を受けるであらう。何故なら必ず彼の立場を固守する